

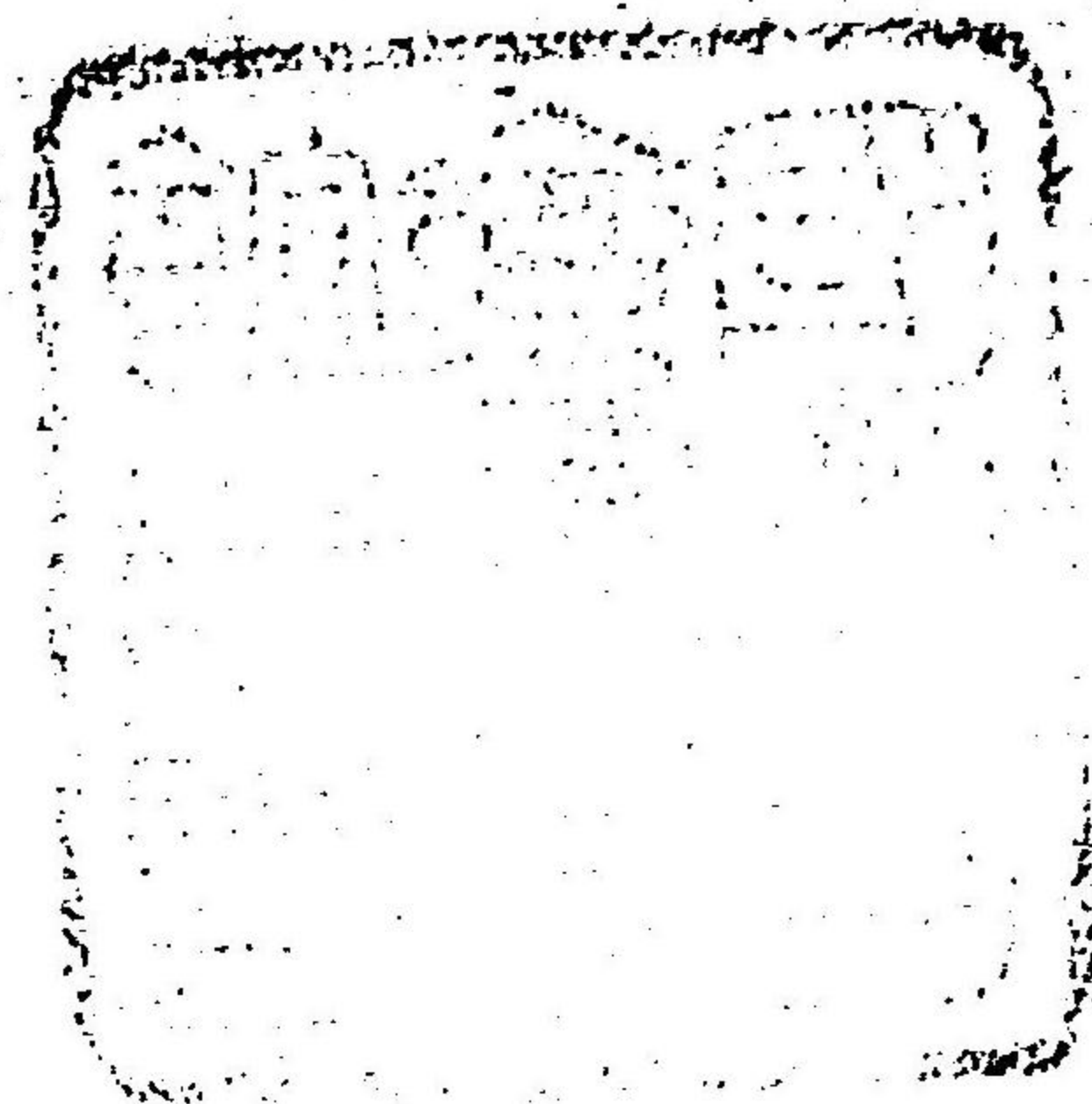
6798

遠藤芳樹著

日本商業志
全

東京 博文館 藏版

672.1
E73m.



212232

日本商業志序

黍稷稻粟耕而自食。魚蟹鳥獸
也。桑棉麻植而自衣。亦無害為
國也。然王國家經紀之道。則遠矣。若
夫張國威厚民生。實富易地。以雄
飛宇內。則播道商之事。豈可地
我抑。本邦之地。四方環海。貿易



之業。從古相開。

樞原奠鼎。四裔來往不絕。

神功征韓。外蕃致貢。

推古以後。隋唐修好。

文武之朝。市令始起。降王延喜。內外

貿易。諸制亦備。馬及武治之世。豪民

乘機。各營其私。於是乎牙儂。以于

録悉其事。雖然觀半編以窺全柱。
 則實多一編。亦未必無少裨。夫法者情
 例之所會也。苟不察民情風習之何如。
 歛敦舊法而謀新施者。余知其不為
 術。則為安石矣。

明治二十四年五月

遠藤芳樹識



凡例

- 一本編ハ曆年事ヲ記スト雖モ其顛末ヲ綜覽セン爲メ或ハ歲月ノ先后ニ因ラズ是ヲ一條ノ下ニ載セ以テ事體ヲ明カニスルアリ標目ヲ別欄ニ掲ルモノハ其索引ニ供スルナリ
- 一編纂ノ用意古典舊記若クハ當時ノ遺說ニ據リ摘撰校讐之ヲ輯録ス若シ其蹟ノ記スルニ足ルモ載籍備ハラザルガ如キハ或ハ老商ノ口碑ニ採リ問之ニ考證ヲ附セリ
- 一引證ノ書冊ハ國史野乘ヲ問ハズ苟モ其事ヲ視ルニ足ルモノ渾テ之ヲ採拾ス若シ片言隻語ヲ斷簡零墨ニ索ルニ方リ意旨通解シ難キモノハ其原文ヲ轉載シ敢テ漫ニ作意ヲ加ヘズ本義ヲ亡フヲ恐ルレバナリ
- 一參照ノ書籍固ヨリ多カラズトセズ然モ勿々涉獵スルニ過ギザレバ漏脱ナキヲ免レズ讀者幸ニ補修ヲ賜ハ、編者ノ素懷

凡例

何ゾ加ヘン且書中苟モ本文ト合考スルニ足ルモノアレバ之
 ナ欄外ニ連載シ以テ一覽ニ供ス亦其蕪雜ヲ嫌フナカレ
 一貨幣ノ通否漕運ノ開塞其他當時民業ノ如何ニ關スルモノ若
 クハ天災地異戰亂ノ如キ皆登載セザルナシ其商事ニ伸縮ヲ
 與フルモノ固ヨリ多キヲ以テナリ
 一 大政更始ノ日夙ニ商政ヲ振起シ以テ買市ノ制ヲ布ク爾來其
 道ヲ購ズルモノ日亦少シトセズ而シテ其事ヤ今日耳目ニ存
 スルモノ多ク別ニ本書ノ引證ヲ要セズ且法規禁令ノ如キ各
 專修ノ冊子アリ亦何ゾ反覆スルヲ須ヒン故ニ今之ヲ零記シ
 以テ其繁ヲ省ク

日本商業志上編

東京 遠藤芳樹纂輯

垂仁紀注 御
 即城天皇崇神
 之世額有角人
 乘一船泊于越
 國稻飯浦故號
 其處曰角鹿也
 去々老夫曰汝
 所求牛者入於
 此郡家中然郡
 公等曰若其主
 原至則償物耳
 即殺食也後問
 牛直欲得何物
 其望財物便欲
 得郡內祭神云
 々トアルハ物
 ヲ以テ直價ト
 爲ス古代ノサ
 マ見ルベシ寶
 貨事略ニ錢貨

本邦商業ノ事古代ニ在リテ如何ナル組織ナリシヤ又商賈ハ如
 何ナル動靜ナリシヤ今得テ知ル可ラザルナリ在昔國乘ノ設ア
 リシヨリ史官筆ヲ絶タズト雖モ其商事ニ及ブモノ寥寥聞ユル
 コトナシ蓋シ本邦ノ經營農ヲ以テ立チ販鬻ノ事措テ問ハザル
 ニ由ルナキヲ得ザルナリ然リト雖モ邦域環海ノ地位ニアリ物
 産豐饒人類群居其交市ノ業亦遠ク上世ニ開達セザルベカラズ
 之ヲ當時ノ事物ニ徵スルニ彼鏡若クハ劔若クハ珠玉若クハ帛
 布ノ類夙ニ太古ニ備ハルモノトス既ニ此等ノ種類ヲ見ルヲ得
 ル工業稍開ケ人智漸ク進ミ工農二事且爲スベカラザルハ理勢
 當ニ然ルベクシテ交易ノ業輒チ茲ニ起因スルハ亦觀易キモノ

ナキ以前ニハ
物ヲ交易スル
ニ米穀絹布ヲ
用ヒタリト云
フ是ナリ

ナリ但山川隔絶道程通セズ各處ニ部落ヲ爲シ境ヲ踰テ交際ヲ
開キ以テ商域ヲ擴ル能ハズ其事ヤ粟ヲシテ布ニ充テ魚ヲシテ
薪ニ易ヘ僅ニ其力ヲ交換スルニ過ザルモノニシテ猶今時邊野
ノ生民ガ物ヲ以テ物ニ代ヘ以テ互ニ其用ヲ使ズルガ如キナル
ノミ

○始造運船

○崇神天皇^{第十}十年四道ヲ關キ以テ八荒ニ通ジ其十七年天下
ニ詔シ船舶ヲ造リ以テ運用ニ供セシム此時ニ方リ海内己ニ戶
口ヲ校リ人民調課ノ制アリ外人亦來貢スルモノアリ歸化スル
モノアリ相往來スルモノアリ蓋シ海外貿易ノ權興チ爲スモノ
アラン而シテ古典ノ徵考スヘキナキハ殊ニ憾ムベキモノトス
魏志ニ倭人在帶方大海之中云々有千餘戶無良田食海物自
活南北市糶又南渡一海千餘里名曰瀚海云々有三千許家差
有田地耕田猶不足食亦南北市糶又吳志人民時有至會稽貨
市上トアルモ昔我カ邦俗古代通商ニ從事シ或ハ支那地方ニ
到リシコトヲ云フナリ

○支那交市

魏志吳志晉陳
壽ノ撰

○立輕市

○始造巨船

帝王編年記ニ
輕ノ市ヲ立ル
ト云フコト何
ニ據リテ記セ
シヤ未ダ考ヘ
ズ

舊事記。應神
天皇元年正月
丁亥崩皇太子
尊即天皇位輕
地謂顯明宮
古語拾遺ハ大
同二年十一月
齊部宿禰廣成
ノ撰

日本紀ニ輕市
又輕街アリ萬
葉集ニ市輕路

○應神天皇^{第十}元年輕ニ都ス帝王編年記ニ十年己亥立輕市此
時ニ際シ我邦威遠ク外域ニ及ヒ三韓藩ヲ稱シ貢船年ニ數十艘
ヲ奉スルニ至リシカバ百貨ノ帝都ニ相聚ル蓋シ又前古未曾有
ノコトナラン官庫ヲ置キ以テ財物ヲ充テセシメ巨船ヲ造リ以
テ航海ノ業ヲ張ラレシコト書紀及ヒ古語拾遺ニ載セ内外ノ事
物發時ニ比スレハ頗ル進動スルモノアリシナリ且此時外客ノ
歸化スルモノ尤多ク王仁典籍ヲ傳ヘ又織婦縫女其他百工ヲ海
外ニ徵シ以テ産業ヲ興起セラレシコトアリ我邦ノ人文既ニ開
ケ古來邦内見ザル所ノ貨物漸ク新ニ現出シ宛モ開港創市ノ日
ニ會スルガ如ク利世ノ業倍進ニ經紀ノ功己ニ盛ナルノ機ニ臨
ムヲ以テ今此市ヲ置レシナルベシ

按ズルニ神代卷ニ乃千會八十萬神於天高市古事記ニ夜麻
豆能許能多氣知爾古陀加流伊知能都加佐爾トアルハ古語

○商賈海運

輕池鹽社アリ
三代實錄及延
喜式神名帳大
和國高市郡輕
曾村鹽神社ア
リ今本郡大輕
村ト云ハ蓋シ
其舊址ナラン
夜麻登ハ大和
ナリ多氣知ハ
高市ナリ古記
加流ハ木高ナ
リ伊知能部加
佐ハ市ノ宮居
ナリ
東雅ニ市讀テ
イナト云フイ
ハ集ナリチハ
道ナリト云ヘ
リ又イチハ百

拾遺ニ天八達之衢萬葉集ニ海石榴市ノ八十衢ナド云ヘル
如ク衆庶相會スル處ニシテ所謂市街ノコトナリ然レハ市
ハモト交易ノ業ヲ云フニハアラザレドモ既ニ人類幅濶ス
レバ其交通互市ノ事アルベキハ亦止ムヲ得ザルノ勢ナル
ガ故ニ後ニハ轉ジテ市トノミ稱シテ貿易ノ義トハナセリ
而シテ今茲ニ立市ノ文字アリ子細ニ之ヲ讀ミ來レバ帝ノ
世ニ至リ外交大ニ開ケ百般ノ體象其長ヲシテ我ニ移サン
トスルニ際シ或ハ異域ノ市法ヲ取捨シ以テ新ニ交易ノ業
ヲ興セシコト既ニ視ルベキモノアリトス
○雄略天皇^{第一}代二十^{第二}日日本紀二十三年八月播磨國御井限人文石小
麻呂有力心強肆行暴虐路中抄劫不使通行又斷商客射艦悉以
奪取トアルハ商賈ノ船路ニ就キシコトノ史ニ載セシ始メトス
○欽明天皇^{第九}代二十^{第十}日日本紀ニ乃告之汝^{ハ大津父}有^ル何事^ナ答曰無也^{ナキ}

○東西道程

貨來リ來ル道
ヲ云フナルベ
シトアルハ非
ナリ
抄劫ハ抄略劫
奪ナリ
武烈紀ニ角鹿
之驛爲天皇所
食ト云フハ北
地ノ製鹽京中
ニ入ルナリ
皇胤紹運錄。
歷代皇記。皇
年代略記。伊
豫三島緣起等
ノ諸書ニ據レ
バ山陽道ハ緩
靖ノ朝ニ開ケ
東海南海ノ二

但臣向伊勢商賈來還山逢狼相鬪汚血ト云フハ商賈ノ山徑ヲ經
ルコトヲ記セシ始メナリ此際ニ在リテ賣買ノ利ヲ繹子遠ク四
方ニ來往シ進テ買業ニ從事セシモノ尤多カルベシト雖モ當時
驛路未ダ開ケズ海陸多ク通ゼザレハ他方ノ物貨ヲ交通シテ販
市ノ事ヲ起スモノハ極テ難カルベシト思ハル况ヤ錢貨尙ホ未
ダ治布セズシテ之ヲ證憑スルモノ多カラザルニ於テチヤ
案ズルニ本邦ノ風化蓋シ西南ニ速ク東北ニ後ル、モノア
リ西南ニ海山陽ノ諸道ハ樞原奠都以還海程既ニ開通シ而
來討熊征韓ノ舉アル毎ニ屢皇軍ヲ紫海ニ移シ或ハ時ニ行
宮ヲ起スニ至リ都鄙ノ來往多カリシコト察スベシ扶桑畧
記歷代皇記皇代記ニ神功皇后攝政五十年庚午始造路驛ト
云フモ當時韓地交通ノ爲ニ開クモノニシテ要スルニ都下
ヨリ西陸ノ間ハ海陸二道亦備ハリ人情事物頗ル開ケ之ヲ

○銀錢買米

道ハ孝元ノ時
ニ通ズト云フ
書紀ニ北越ノ
來往ハ連仁ノ
朝既ニ開ケ東
海北陸ノ二程
ハ覺行ノ時ニ
成レリ舊事記
ヲ考フルニ海
内東西ノ道程
ハ成務國造ヲ
置クノ日ニ始
テ通ゼルカ如
シ而シテ當時
東北地方壤土
ノ不毛ニ悉ス
ルモノ尤多ク
物産擧テスシ
テ人烟ノ稀疎
ナル其西州ニ

東北地方ニ比スレバ其商業ノ程度ノ如キモ進加セシコト
亦知ルベキナリ

○顯宗天皇^{第三十代} 日本紀ニ二年冬十月歲比登稔^{シキリモス}百姓殷富^{トヤカニ}稻斛
銀錢一文ト云ヘリ本邦此時既ニ貨幣ノ通用アリ以テ貿易ヲ紹
介スルモノアルヲ想ヘバ商業モ夙ニ其機ノ熟スルヲ察スルニ
足レリ然リト雖モ當時邦内銀ヲ産セズ其資材ハ皆海外ノ輸入
ニ係レバ流布ノ錢貨ハ尙ホ多カラザルヲ知ルベク未ダ以テ商
業ヲ左右スルニ至ラザリシハ亦言ヲ俟ザルモノアリ

案ズルニ本朝ノ錢幣何レノ世ニ在テ邦内ニ行ハレシカ其
創始ヲ極ル能ハズト雖モ蓋シ應神ノ朝ニ後ルベカラザル
モノアラシク神功外征貢獻ノ品類尤多ク應神亦孜々勸業ニ
從事シ我邦ノ商工渾テ隆昌ノ日ニ臨メリ百事ノ進化既ニ
此ニ至ル豈ニ獨リ交通至要ノ寶貨ナキヲ得ンヤ此時ニ於

懸隔セルコト亦
察スヘキナリ

神皇正統記ニ
仲哀熊襲親征
ノ條ニ皇后息
長足姬尊ハ越
前ノ國竈飯の
神に詣テうれ
より北海をぬ
くりて行給ひ
ぬトアレドモ
當時未ダ北海
航路ノコトヲ
開カス皇后ノ
此行ハ遷テ内
海ヨリ幸セラ
レシナリ

帝王編年記。
顯宗天皇元年

テ秦漢百數十縣ノ生民陸續歸化セシコト古語拾遺及ヒ姓氏
錄ニモ見ヘタレバ是等ノ徒或ハ其本土ヨリ携持スルモノ
アリテ當時我朝ニモ錢貨夙ク行ハレシニアラザランヤ四
夷事畧ニ朝鮮^テ以布粟^ヲ爲市^ニ日本^ヲ以漢唐之錢^ヲ爲市^{ト云フ}モ亦
故アルナリ論者或ハ云フ此時實ニ錢幣アリシニアラズ蓋
シ有年ヲ特書センガ爲ニ漢家ノ語意ヲ假テ以テ追記セシ
モノナリ然レドモ漢語ヲ襲用セシモノ書紀一編概子然ラ
ザルハナシ豈此一章ニ止ランヤ況ヤ彼銅錢アリテ絶テ銀
錢ナキヤ故ニ斷シテ當時錢貨行ハル、モノトス

又此間帝都ハ勿論東西諸州交通便宜ノ地方ニ於テ商賈相聚リ
物貨ヲ換ヘ彼我ノ利ヲ通セシコト時ニ伸縮消長ハアレドモ尙
ホ今日ニ異ナル事ナカルベシ顯宗紀ニ吾儕者旨酒^ヲ餅^ヲ香市^ニ不^レ以^テ
直買^ハトアリ釋日本紀ニハ高麗人來住餅^ヲ香市^ニ釀^ハ旨酒^ヲ時人競^ハ以^テ高

○各所市場

○吳權輸入

乙丑銀錢一文
直米一石賣買
一代要記。顯
宗天皇此時銅
錢一文賣米一
石トアリテ編
年記ニハ二年
ヲ元年トシ一
代要記ニハ銀
錢ヲ銅錢ニ作
レリ
後漢書明帝紀。
永平二年是歲
天下安平人無
徭役歲比登稔
百姓殷富粟解
三十牛羊被野
東雅。古ノ時
ニハ毎歲ノ秋
穀布既ニ成シ

價買飲ト云フコトヲモ載セタレバ此地ハ當時繁賑ナル市場ナ
ルベシ餅香ハ今河内國古市郡ニ屬セリ其他海石榴市大和又粟
津市近江灘波市攝津安倍市駿河小川市美濃深津市備後等アリ
皆國史及風土記萬葉集日本靈異記等ニ見ヘタリ魏志ニ國々有
レ市交易有無ニ使
大倭監主ノトアリ大倭ハ蓋シ當時ノ
國造縣主ノ如キモノヲ云フナラシ
○崇峻天皇第三十代新撰姓氏錄上毛野久比被遣吳國雜寶物等獻
於天皇其中有吳權クレンハカリ天皇勅此物也久比奏曰吳國以懸定萬物令交
易其名云波賀理ハカリ天皇勅之勿令他人同ト云ヘルコト見ヘタレバ
此際ニ外邦ノ權器ハ始テ來輸セシ者ナリ大約物貨ノ輕重ヲ量
リ知ルベキ程ノ器具ハ是ヨリ以前我邦ニモ必ズ在ルベキコト
ナレドモ之ヲ吳權ニ比ブレバ殊ニ異ナルモノナリシハ天皇ノ
勅問アリシニテモ知ラルハナリ勿令他人同ト云フハ權器ハ用
法ヲ鄭重ニセザレバ其弊ナキチ免レズ故ニ濫ニ之ヲ他人ニ托

○隋廷交通

後ニ商賣ノ道
通シタリシナ
リ百貨ヲ以テ
布帛ニ代ルヲ
アキモノト云
ヒユキテ賣ル
モノヲアキビ
ト云シナリ是
ヲ買フトカフ
ト云ハ布賣ノ
類ヲモテ百貨
ニ代レバナリ
是ヲ賣ルヲウ
ルト云フハア
キモノシテ其
贏利ヲ得レバ
ナリト見ユ案
スルニアキモ
ノアキビトノ
アキハ飽足ノ

スベカラズト斯ハ勅セラレシナリ蓋シ此器ノ本邦ニ入シコト
内外貿易ノ上ニ於テ著大ノ力ヲ得シモノナルベシ
○推古天皇ノ朝第三十代内ニ憲法ヲ定テ廟堂ノ制度既ニ緒ニ就
キ外ハ隋廷ニ交リ文物漸ク盛ナルノ時ニ至リシカバ蓋シ民庶
ノ間ニ在リテモ亦幾許ノ程度ヲ加ヘ事物ノ勝ルヲ見シコトア
ルベシ内外ノ使臣相往來シ彼我ノ產品多ク出入シ通商ノ業又
頗ル伸張セジモノアリシナリ

案ズルニ和漢三才圖會ニ推古天皇九年聖德太子始市
使商賈知賣買術以輕子神爲商賈鎮護神ト蓋シ杜撰其據ヲ
知ラス然リト雖モ世間是等ノ事口碑ニ傳フル亦頗ル久シ
キニ居レリ再案スルニ當時皇太子萬機ヲ攝シ其民業ヲ念フ
致々倦ムコトナク制度維レ新ニ朝政大ニ張り天下ノ奉戴
スル實ニ泰斗ノ如ク然リ且此際摸範ヲ海外ニ求メ邦内ノ

意ニシテ賣者買者皆其意ニ満ツルヲ云フナリ

○商長

日本輿地通誌。河内會同賀市在古市村北會我川西又呼曰會我。蒲生秀實云允崇天皇陵俗ニ市野山ト云フ是古ノ香市邊ナリ今國府村ト云フ是ニテ見レバ香ノ地ハ河内國志紀郡ニアリシ者ニ似タリ

工事頗ル開進セシモノアルヲ思ヘバ商業亦固ヨリ其力ヲ加ヘシモノアルベキナリ是ニ由テ之ヲ觀レバ古來此等ノ事ヲ稱謂スル抑亦故アルナリ

○舒明天皇ノ時第三十代上毛野宗麻呂カミツケノムナ商長ノ姓ヲ負ヒシコト姓氏錄ニアリ宗麻呂ハ上毛野久比ノ男ニテ久比嘗テ吳國ニ到リ權器ヲ將來シテ商務ニ功アリ當時商長ノ職ヲ授ケ之ヲ任用セラレシガ其子宗麻呂ノ時ニ至リテ頓テ商長ト云フコトヲ姓トシテ賜ヒシナリ且ヤ曩ニ久比ノ吳ヨリ歸朝シテ奏上スル語勢ヲ玩ブニ獨リ權器ノミナラズ外邦貿易ノ動靜ヲモ我が邦俗ニ取捨セシナルベク故ニ今其勳勞ヲ追賞シテ斯クハ姓トセラレシナラン抑商長ノ職官ハ當時商賈ヲ督領シテ商人及ビ商業百般ノ事ヲ總理セシナルベシ是本邦ニ於テ商業部内ニ主長ヲ置クノ肇メナリ

○定斗升斤兩

○大化之新政

○租市稅

旨酒ハ昔香ノ香ヲ云フノ冠字ナリ吾儕ハ繁昌限ナク物貨充足セル所香ノ市ニ至リテ購求セントスルモ買ハレヌモノナリ所謂千金得難キト云フ語言ナリ即チ來目ノ稚子カ丹波ニ在セシ時ノコトナリ

續日本紀ハト部授賢ノ撰ナリ懷賢ハ建長比ノ人新撰姓氏錄ハ

扶桑零記、一代要記ニ此時斗升斤兩ヲ定ムト云フ事アリ思フニ是ヨリ先キ貨量皆稱アリ然ルニ茲ニ殊ニ定ムト云フハ蓋シ從前ノ數量ヲ改メ更ニ一ニ歸セシナラン而シテ此事ハ曩ニ吳權ノ本朝ニ入リシニ基因スルモノニシテ亦商業ノ一進ヲ徵スルニ足ルモノアルナリ

○孝德天皇ノ朝第三十代祖宗以來ノ遺制ヲ更革セラレ新ニ八省百官ヲ置キ國造ヲ廢シ國司郡領若クハ防令里長ニ易ヘ貢租賦役、驛傳ノ法、戶籍、田畝、食封ノ制、訴訟、鐘櫃ニ至ルマデ百般ノ事、千古未嘗有ノ憲度ヲ立テラレ世ハアラタマノ春ヲ迎ヘ蒼メル花ノ開クニ似タリ然レバ此際積年群牧ノ下ニアリシモノ現ハニ天日ヲ仰クヲ得テ皆新政ニ浴セシカバ商估モ前時ニ超乘シテ業務ヲ提起セシナルベシ乃チ書紀ニ大化二年正月、罷市司、要路、津濟、渡子之調賦、給與田地ト云フコトアリ此時世襲ノ職位ヲ廢

○貞統六十

弘仁六年七月
四品中務卿葛
多親王ノ撰
舊址幽考海柘
櫛市ハ和州添
上郡にあり初
瀬より五十町
北かなや村よ
り四町ばかり
東也源氏物語
玉がつちの巻
にも此地名見
ゆ
和名類聚抄ニ
權衡ヲ加長波
可利ト訓ス吳
楯ト云フ意ナ
ルカ然ラバ楯
衡ノ制ハ前古
以來敢テ更章

シ更ニ百僚ヲ撰マレシカバ商長モ亦職ヲ解レテ新ニ市司ヲ置
レシナリ是ヨリ先キ會市皆賦稅アリ以テ其資用ニ充テシモノ
ナ此特別ニ田土ヲ支給シ之ガ稅入ヲ止メラレシナリ市司ノ與
ル所ナレバ市司ノ稅トハ云ヒシナルベク今是等ノ稅額ヲシテ
斯ク蠲除セラレシハ蓋シ商運ノ隆昌ヲ望ム聖意ニ出ルモノナ
ラン

○齋明天皇第七代第三十日日本紀五年七月高麗使人持熊皮一枚稱其價
曰綿六十斤市司笑而避去トアルナミレバ市司ノ職務ハ海外貿
易ノコトヨリ物價ノ査定ヲモ掌リシモノト知ラル今綿ヲ以テ
價直トナセシハ其需途ノ廣キモノト且輕便ニアルガ爲メニ上
代貿易ノ如キニ於テハ多ク綿ヲ以テ正價トシ百貨ヲ會計セシ
ナルベシ所謂布粟爲市ノ類ナリ降テ景雲二年十月新羅交關ノ
物貨ヲ買收セシ料ニ大臣以下ニ各綿ヲ賜フコト續日本紀ニ載

○支那通略

ナカリシモノ
ナラン古今要
覽稿ニ波質理
ハ吳ノ方言ニ
ヤトアレトモ
カシバカリヤ
神謀或ハ天ノ
御靈等ノ古語
モアレハ勿論
邦言トルベシ
姓氏錄ニ吳語
ノ如ク記サレ
シハ如何アラ
シ
姓氏錄第二ノ
勅字ノ下恐ク
ハ脱文アラシ
ト云ヘリ
和漢三才圖會
ハ寺島良安ノ
撰

スルモノ亦此例ニ外ナラザルナリ又當時貢獻贈遺ノ物料ニ
因リ推テ之ヲ量ルトキハ此際本邦ヨリ外輸スル貨物ハ概子錦
絹、緇、布、綿、絲、皮革、武器、米穀、其他ノ雜種ニシテ海外ヨリ輸入スル
モノハ金、銀、銅、鐵、綿、綾、布、帛、虎豹皮、藥物ノ類尤多キニ居ルガ如シ
而シテ其民間貿易ノ事ハ未ダ考フル能ハザルナリ

日本紀ニ天皇五年秋七月遣小錦下阪合部連石布大山下津守
連吉祥キヤチ使於唐ニシテ仍以陸奧蝦夷男女二人示天子伊吉連博德書
小錦下坂合石布連大山下津守吉祥連等二船奉使吳唐之路
以己未年七月三日發自難波三津之浦八月十一日發自筑紫
口寅時二船相從放出海行到百濟南畔之島名母分明以二十四
日寅時到南此時石布賊ノ爲ニ命ヲ隕シ吉祥ノ船ノミ會稽ヲ經
テ餘姚縣ヨリ上陸シ越州府ニ至リ其十月ヲ以テ長安ニ達
シ高宗ニ謁セシナリ續日本紀寶龜九年十月丁未遣唐使第
三船到泊肥前國松浦郡橘浦判官勅旨大亟正六位兼下總權

萬葉集ニ商長
首麻呂ノ名アリ
宗麻呂ノ裔ナルベシ
合戰解。要路津濟謂不必大路當人往來有惡便者皆是也
新撰字鏡。罷彼互反平志久萬
文獻通考。日本ノ條ニ其地去源東甚遠而去源西甚近初通中國也實自源東而來故其汗回如此至六朝及宋則多從

○壬申之亂

介小野朝臣滋野上奏言臣滋野等去寶龜八年六月二十四日候風入海七月三日與第一船同到揚州海陵縣八月二十九日到揚州大都督府即依式例安置供給得觀察使兼長史陳少遊處分屬祿山亂常館驛凋弊入京使人仰限六十人以來十月十五日臣等八十五人發州入京トアリ是當初邦人ノ支那ニ交通セシ路程ナリ此時既ニ韓地ニ事アリ邦人屢來往シ航路又未ダ開ケズト云フベカラズ然トモ船舶脆弱海上唯天候ニ因ルヲ以テ常ニ颶風覆舟ノ虞ナキハナシ其擾亂ニ際シ途中杜塞ノ難アリト雖モ隣接ノ支那地方ニシテ羈旅尙ホ數月ヲ費スニ至ル昔日外交ノ辛楚亦察スベキナリ
○弘文天皇^{第九代}第三十^{十代}元年壬申ノ亂アリ畿甸東山東海ノ間戰爭ノ地トナリシカバ兵革ノ爲メニ四方閉塞シ都市ヲ始メ各地トモ衆庶通商ノ利ヲ亡ヒシコト亦多カルベシト思フナリサレド程

○銀銅二錢

南道浮海入貢
年中行事歌合
評判。何れと
昔は唐銀も
百濟國よりつ
たはりて渡朝
はしけるなり
濠洲抄。天武
十二年癸未停
銀錢用銅錢
(則天弘通)
文武ハ當時藤
原ニ都セラル
然レハ此時二
市ヲ置レシモ
亦其地ナリ藤
原宮址ハ今大
和國高市郡ニ
屬セリ

ナク其亂平ラキ天武ノ御世トナレリ
○天武天皇^{第十代}日本紀ニ十二年四月戊午朔壬申詔曰自今以後必用銅錢莫用銀錢乙亥詔曰用銀莫止トアリテ此時銀銅二錢ノ通用稍多キニ至ルヲ想ヘバ商業モ追次其便ヲ得テ其歩ヲ進メタルモノナラン
案ズルニ本邦ニ於テ銅錢ヲ通用スルモノ未ダ起原ヲ詳カニセザルナリ蓋シ銅貨ノ銀錢ニ後ル可カラザルハ東西聯邦既ニ然リトス而シテ此時唐朝ノ交倍開ケ内外ノ情多ク通ズルモノアリ惟フニ利世ノ用獨リ棄ツベカラザルハ亦自然ノ理ニシテ銅貨ノ邦内ニ流布スル銀錢ト俱ニ其來ル近ラザルヲ知ルニ足ルベシ降テ持統紀八年春三月拜鑄錢司ト云フコトアレドモ此時始テ置レシモノトモ見ヘズ天武ノ三年對馬已ニ銀ヲ產シ又銅材ノ如キハ邦内ニ採リシモ

○大寶令

令省解ハ清原
夏野撰ム所ナ
リ續日本後紀
ニ承和元年十
二月辛巳施行
天長年中所新
撰令義解トア
ル是ナリ

令集解。戶令、
功作貿易爲工
屋沽與販爲商
又財貨交易具
校知市内賣物
耳、又知直高下
耳、

○東西市司

唐六典。凡市
以日午擊鼓三
百聲而衆以會
日入前七刻擊

ノ尤久シキニ居レバ其始テ鑄錢ノ主司ヲ置レシハ蓋シ天
武ノ時ニアルベシ

○文武天皇^{第四十代}大寶二年十月律令ヲ定メ之ヲ天下ニ布キ東
西二市ヲ開キ更ニ市司ヲ置レタリ抑本朝律令ノコトハ遠ク推
古ノ朝ニ胚胎シ天智ノ時ニ集成セリ是ヲ淡海朝廷ノ令トス然
レドモ天智ノ朝其令ハ天下ニ治布セズシテ止ミヌ文武モ亦百
官ニ令シテ律令撰定ノコトアリツレドモ亦發行ニ至ラザリシ
ガ終ニ持統ノ世ヲ經テ此時始テ大成セリ藤原不比等等奉勅修
纂セシモノニシテ蓋シ唐典ニ倣ヒ加減増損別ニ撰擇制定セシ
ナリ本朝萬般ノ規度是ヨリ備ハリ百姓其澤ヲ被フルニ至レリ
而シテ商政ノ基本亦茲ニ扨建スト謂フヘシ其官位令ヲ案ズル
ニ東西ノ市塵ハ左右京職之ヲ統管シ東西市司之ヲ直轄スルモ
ノトス乃チ東市司^{西市司}准此^{正一人}掌財貨交易器物真偽度量輕重

○價長

証三百聲而衆
以散、
續解。謂官家
交關及懸淨職
物皆歸中沽價
故立此案記本
司者京職及國
唐六典。凡與
官交易及懸評
職物並用中價
令集解。市估
案古記云市估
謂市券並每月
立三等沽價案
也

○關市令

案古記云市估
謂市券並每月
立三等沽價案
也

○關市時限

謂市券並每月
立三等沽價案
也

○商肆掛牌

義解。謂奴牌
之主自修牌牒
牌保證乃申
送官司司判

○時價三等

義解。謂奴牌
之主自修牌牒
牌保證乃申
送官司司判

賣買、估價禁察非違事ト云フハ市司ハ商品ノ勘査市内ノ整理ヲ
掌ルモノナリ且地方各開市アリテ京邑ノ外其事ハ國郡二司ノ
統掌スル所ニ係レリ又職員ハ東西市司正各一人、令史各一人、價
長各五人、物部各二十人、使部各十人、直丁各一人トス此ニ價長ト
云フハ職員令ニ掌平物價市易トアリ義解ニ謂猶言評價直而市
買トアリテ官家物貨ヲ交易スル等ニ際シ其時價ヲ考定シテ輕
重平準ヲ司ルノ史員ナリ其關市令ニ凡市恒以午時集日入前擊
鼓三度散(每度九下)ト云フハ開市ノ時限ヲ示スモノニテ義解ニ
日中爲市致天下之民是也トアリ又凡市每肆立標題行名ト云フ
ハ義解ニ題行名者假如題標牒云絹肆布肆之類也トアリテ肆店
ニ招牌ヲ掲グ賣品ノ名稱ヲシテ之ヲ明示セシムルナリ又市司
准貨物時價爲三等十日爲一簿在市案記季別各申本司ト云フハ
義解ニ謂准貨物時價者凡物各有上中下三品即其價直亦物別各

○九等沽價

立券契也、
 唐六典。凡賣買奴婢牛馬用本司本部公驗以立券
 律。買馬牛已過價不立券過三日等三十賣者減一等、
 本邦ノ古制人良賤ノ別アリ賤ハ良家ノ奴婢トシ使ハル、モノニシテ良家或ハ其奴婢ヲシテ賣買スルコトアリ然レドモ賤亦口分班田ノ

有上中下三等故總有九等沽價、即下條云准中沽價、是准中物中沽價、文云准貨物時價、即知據市廛交關之價、官不別立沽價法也、爲三等者假如一旬沽價上布一端或錢三百或三百五十或四百即依中沽、三百五十立沽價法、其餘中下二品亦依中沽爲定故云爲三等也トアリテ凡テ物貨ハ數等ノ品別アルモノ故ニ今市價ニ據リテ格ヲ上中下ノ三等ニ撰ミ十日毎ニ市中ニ就テ驗案簿記シ之ヲ京職若クハ其國司ニ進ルナリ所謂沽市案ニシテ即千次ニ舉ル所ノ官家交易等ノ價格ニ供用スルモノナリ又凡官與私交關以物爲價者、准中沽價ト云フハ官家物品ヲ價トシテ賣買ヲ行フ時ハ前條ノ中價ヲ以テスルノ例ナリ又凡賣奴婢皆經本部官司取保證立券付價其馬牛唯責保證立私券ト云フハ奴婢ヲ賣ルニハ官司ヲ經テ證券ヲ立テ價位ヲ付スベク馬牛ハ只其保證ヲ要シ私券ヲ以テスルコトナリ義解ニ謂不經官司自立私券賣與其餘

○以物爲價准中沽價

○賣奴婢立券

○三日內聽

○アキカハリ商變

○賣品題製遺者姓名

法アリ且私財ノモ所有スルモノニシテ固ヨリ米國地方ノ賣奴ハ食ヲ併テ其主領ノ權内ニ歸スルモノト其罪ナリ
 律。奴婢有罪其主不請官司而殺者杖八十無罪殺者杖一百家人各加一等
 抄ハ
 明法博士阪上兼明撰ハ
 歩沖ハ難波間珠卷ノ僧名ハ

貨物不在此限トアレバ他ノ物品賣買ニハ又必ズシモ立券ヲバ要セザルコト知ラレタリ法曹至要抄賣買ノ條ニ雜律云賣奴婢馬牛立券之後有舊病者三日內聽悔無病欺者市如法案之除此等之外賣買約諾之物全無改易之法、遂可依前約也ト云フハ動物ヲ賣買スルトキ若シ病病事由アレバ三日ノ間ヲ限リ約ヲ解クコトアリト雖モ他ノ物品賣買ニハ結約ノ後再ビ變易ナキモノトス萬葉集ニ商變爲跡之御法在者許曾吾下衣變賜米トアルヲ略解ニ契沖云フあきかはりは既に物とあたいと取かわして後に忽ち變じて或は物をわろしとして、あたひを取かへし、或はあたひをやすしとして、物を取かへすなり、しらすどの御法とは、さやらの事を、恣まゝにせよとの法令、あらばこそといふ也、あきかわりハ即ち變易ナリ、既ニ賣買セシモノヲ變易スルナリ、又凡出賣者勿爲行濫其橫刀、槍、鞍、漆器之屬者、各令題鑿造者姓名ト云フハ賣

○與販者男女別坐

○贗品不如法者還主

○就市交易

空心姓ハ下川氏
義解。不生爲行也不眞爲濫也
槍戈屬也鞍鞍橋也
唐六典。以偽濫之物交易沒官短狹不中量者還主其造可矢長刀官爲樣仍隨工人姓名然後聽之
諸器物亦如之講解。謂贗者物主相訛也還者物主不知和也

品ハ濫惡ノ作爲アルコトナク刀槍其他ノ器具ノ如キハ皆製造者ノ姓名ヲ鏤彫記入セシムルモノトス又凡在市與販者男女別坐ト云フハ開市ハ紛雜ナルガ故ニ肆店ノ者ヲ區分シテ之ガ不肅ヲ制スルナリ義解ニ與販者賤買賣ナリト注セリ又凡以行濫之物交易者沒官短狹不如法者還主ト云フハ賣品ノ濫惡ナルモノ或ハ式ニ合ハザルモノハ之ヲ官ニ沒入シ又ハ其物貨ヲ賣主ニ還却セシムルナリ又除官市買者皆就市交易不得坐召物主乖違時價不論官私交付其價不得懸違ト云フハ官家ノ買収ニアラザル外ハ各自市店ニ至リテ交易スルノ例法ナリ義解ニ謂雖在市而不得復坐他肆召トアル是ナリ將市中ノ時價ニ相違シテ物貨ノ買収ヲ得ザルモノトス又官私ヲ言ハズ各價ヲ交付スベシ或ハ互ニ賣買ヲ結約セシニ止リテ物品價值ヲ交換セズ後ニ違論ヲ發スベカラズ又物主服從セザル商貨ヲ強テ買収ス

○兵器不得與諸蕃交易

○田宅賣買

○皇親五位以上不得與

續日本紀。天平寶字五年八月美作介從五位下縣大養宿稱沙彌麻呂不經官長悉行國政獨自在館以印公文兼復不據時價抑買民物
撰叙令。帳內給親王家者皆一人一位至五位
給之謂之位分賣人又大臣大納言給之謂之稱分賣人也
前漢書。鹽已者取倍稱之息註稱舉也今俗謂之舉錢

可ヲズトナリ又凡弓箭兵器並不得與諸蕃市易其東邊北邊不得置鐵冶ト云フ諸蕃ハ四裔ノ邊地ヲ指セリ中ニ就テ當時王化未ダ東北ニ洽カラズ蝦夷反服常ナシ故ニ兵甲ノ類ヲ附セズ暗ニ蝦夷ノ力ヲシテ逞フセザラシメントスルニ在ルナリ又凡官司未交易之前不得共諸蕃交易爲人糾獲者二分其物一分賞糾人一分沒官ト云フハ蕃品ノ貿易ハ官司先ツ國用ヲ充足セシメ餘剩ヲシテ衆庶ニ市買ヲ許スナリ故ニ官司ニ先チ私ニ貿易スルガ如キハ物貨ヲ沒入セシムルナリ田令ニ凡賣買宅地皆經所部官司申牒然後聽之ト云フハ義解ニ謂有舍宅之地也畧舉宅地田園皆同其賣買倉屋等自須證據分明不可經官司也トアリテ宅地ヲ賣買スルモノ官司ヲ經由セザルヲ得ズ田園モ亦此例ナリ但倉屋等ノ賣買ニハ此例ニ據ラザルナリ又雜令ニ凡皇親及五位以上不得遺帳內賣人及家人奴婢等定市肆與販其於市賣沽出舉及遣人於

○始頒度量

當時大路ト云フハ山陽道ニシテ東海東山ノ兩道ハ中路ニ屬シ自餘ノ諸道ハ皆小路ナリ
 集解ニ山陽道其太宰以去即爲小路也トアリ
 雜解。謂凡驛舊役共免故不必取家富卒於傳戶唯免雜徭故必取富者也
 義解。謂船有大小隨船配人令應堪行若應

フハ義解ニ謂男女肆別貨食區分是爲市店不擾也奸盜及行濫之徒不得其情是爲奸濫不行也トモアリテ市司ハ此令ヲ奉シテ肆店ヲ統理シ物貨ヲ查檢シ及ビ市内ノ奸盜ヲ制スルニアルナリ
 其他職祿田賦衣服軍防ノ令等一モ具ハラザルナク皇政此ニ於テ大ニ張レリ顧フニ是ヨリ以前ニ在リテハ我邦商業ノ如キモ亦法令ノ設アルナク一ニ古來ノ慣例ニ因リ之ヲ放任セシガ如シ交易ノ令販商ノ事今ニ於テ講求セント欲スルモ其蹟ノ徵スベキ無キヲ奈何センヤ

案ズルニ續日本紀景雲二年三月乙亥始頒度量置天下諸國ト云フハ曩ニ大化新政ノ時田土ニ町段ノ制アリ米布ニ束把丈匹ノ定メアリ以テ海内其法ヲ均フスルコト亦知ルベキナリ而シテ其量器ノ如キ尙ホ之ヲ民間ニ任セ未ダ制度如何ヲ問ハザルガ如シ故ニ新令ニ據リ度量ヲ制シ諸州ニ

○假設市廛爲遊覽

水陸兼造者亦船馬並置之
 公式令。凡行程馬七十里步五十里車三十里
 雜令。凡度地五尺爲步三十步爲里
 續日本紀考證。類聚國史延曆九年二月河内國若江郡田一町大段施入龍華寺爲燈分河内志云燈址在掛川郡植松村今稱市場

頒予以テ標準製作セシメンガ爲メ今其様ヲ給セシナラン
 雜令ニ凡用度量權官司皆給様其様皆銅爲之ト云フ是ナリ
 續日本紀ニ景雲三年十月乙卯權建市廛於龍華寺以西川上而駢河内市人以居之陪從五位以上以私玩好交關其間車駕臨之以爲遊覽ト云フハ天皇行幸ノ際假ニ市廛ヲ設ケ貨物ヲ列子之ヲ御遊ニ備ヘシナリ有無ヲ相通シ百貨ヲ交易スルハ彼我ノ情意ヲ娛マシメ頗ル興ヲ添ユレバナリ河内ハ昔時職工ヲモ置カレ市人ノ多キ地方ナレバ今此事モアリシナラン是ヨリ先キ續日本紀慶雲二年六月丙子太政官奏比日兀旱田園焦卷雖久雲祈未蒙嘉滋請遣京畿内淨行僧等祈雨及罷市廛閉塞南門奏可之ト云フコトアリ皇極紀ニ元年戊寅大旱ノ時ニ方リ群臣相謂之日隨村々祝部所教或殺牛馬祭諸社神或頻移市或祈河伯ト云フモ亦一記事ニ出ルモノニテ市ハ常ニ喧囂ナル故時ニ之ヲ廢停シ靜肅

○大早細市

○官吏職田

大八洲記。河内一云堤沼池井多而種生五倍市郡多也。拾芥抄。絹繩六丈爲匹調布四丈二尺爲端麻布二丈八尺爲端又令ニ據ルニ屯ハ頂サ二斤ナリ。南留別志。太政大臣正一位をうけたらんは官位ともに至れるを極めたれども現米三千石なり。食封をどく。

以テ敬意ヲ表シ其天惠ヲ請フニアルノミ蓋シ當時朝廷李唐ノ風ニ模倣セラレ是等ノ事ハアリシナリ古代交市ノ實況ハ復如何ナリケン今考フル能ハザレドモ此一章ニ據デミルニ或ハ生民便宜ノ地ニ因リ市域ヲ開キ市店ヲ設ケ四方ノ商估相ヒ聚リ物貨ヲ販鬻セルモノナリ古歌ニ所謂市ノ假屋ト云ヘルモノ尤久シキ遺風ナルベシ

大寶ノ官位令ニ登載スルモノ當時朝廷ノ百官ヲシテ尙ホ滿員ニ至ラシムルモ上大臣ヨリ下賤吏ニ至ルマデ僅々八千有餘名ニ過ギズ而シテ職錄ニ位田職分田等アリ渾テ食米ヲ給シ又祿法アリテ衣服ノ料ヲ賜フモノトス乃チ正一位ハ位田八十町職分田四十町トズ一町ヲ以テ假ニ今時ノ千石ニ算スレバ通計凡ソ三千石ナリ此外純參拾匹、綿參拾屯、布壹拾端、蓋壹佰肆拾口アリ何レモ一位ノ食祿ニシテ以

○貢銅

へても二萬俵には至らじ。水鏡。養老五年正月十一日に武藏より銅を初て奉りしかば年號を和銅と替られしトアレドモ此時ノ詔ニ國中乃東武藏國樹自然作成和銅出在止齋而獻焉ト云ヘバ和銅ハ自然ノ熟銅ナリ寶貨事略ニ和國ノ銅コレヲ始メトスレバ年號ヲ和銅トハ收

下ノ官吏各差アリ故ニ官吏衣食ノ料ハ既ニ備ハルモノニシテ自餘ノ物貨ヲ買收スルニハ此祿物等ヲ料トシテ交易ヲナセシナリ其他農工ノ家ニ在テモ亦隨テ然ルモノニシテ後世衆庶都邑ニ在リ衣食百般ノ貨物ヲ併テ商估ノ力ヲ仰グ如キニハアラザルベシ故ニ昔時ノ商業ト稱スルモノハ之ヲ今日ノ商業ニ比スルニ蓋シ繁簡ヲ異ニスルコトアルベキナリ

○元明天皇^{第四十代}和銅元年正月武藏國秩父ヨリ始テ熟銅ヲ奉貢ス尋デ四方ノ産銅尤多キニ至リシカバ頓テ鑄錢ノ事アリテ天下ニ頒チ通用セシム本邦錢幣ノ行ハル、コト既ニ久シト雖モ是ヨリ以前ニ在リテハ資材ノ産スルモノ亦稀ニシテ通錢尙ホ未ダ多カラズ此ヲ以テ其用ヲ上下ニ便スルニ足ラザルナリ然レバ官民一般概チ稻米又ハ布帛綿絲ノ類ヲ用ヒ之ガ交易ノ

メラルトアル
ハ蓋シ水鏡ノ
説ニ隠ラレシ
者ナルベシ
銀錢偽造ノコ
トヲ禁シ銅錢
ヲ問ハザルニ
似タレドモ蓋
シ銀銅錢ヲ併
言セシモノナ
ラン或ハ銀錢
偽造ノ多キガ
爲ニ殊ニ此令
ヲ下シ尋デ銀
錢ヲ廢シ尙ホ
禁ズルニ至リ
シ乎
續日本紀。和
銅三年三月辛
酉遷都于平城

科トセシナリ賦役令ニ諸珍異之類皆准布爲價以官物市充不得
過五十端トアルモ渾テ布ヲ以テ正價トス譬へハ上布一端ハ稻
何東下布一匹ハ米何升ニ交易スルノ類ヲ云フナリ公式令ニ論
奏物件用藏物五百端以上、錢二百貫以上、倉糧五百石以上、奴婢廿
人以上、馬五十匹以上、牛五十頭以上トアルヲ考フルニ他品ニ比
スレバ、錢二百貫ハ頗ル少額ノ嫌ヒアレドモ尙ホ其比巨數トス
ルニ足ルモノナルベク以テ當時通貨ノ多カラザルヲ察スベキ
ナリ此時ニ方リ國運漸ク伸ビ、鑛物亦豐カナリケレバ、嗣後相續
デ鑛錢ノ事絶ヘズシテ商業亦其力ヲ進ムルニ至レリ
續日本紀ニ和銅元年二月甲戌、始置催鑛錢司五月壬寅、始行
銀錢八月己巳、始行銅錢二年正月壬午、詔向者頒銀錢以代前
錢又銅錢並行比奸盜逐利私作濫錢紛公錢自今以後私鑛銀
錢者其身沒官財入告人八月乙酉廢銀錢一行銅錢三年九月

○銀銅錢行

平城ノ都官ハ
轉厭ヨリ遷サ
レ此時東西二
市モ俱ニ轉ビ
ラレシコト勿
論ナリ續日本
後紀ニ承和二
年正月平城舊
宮水陸地三餘
町云々三代實
錄ニ平城舊京
其東係上郡西
添上郡トアリ
テ此比モ都址
ハ尙ホ存セシ
ナルベシ大和
志ニ左京ハ今
ノ南都右京ハ
今ノ西京ト云
ヘリ

乙丑禁天下銀錢ト云フハ皆當時通錢ノ變遷ヲ察スベク又
此比夙ク民間私鑛ノ行ハル、ヲ思ヘバ其錢貨ノ流融セル
亦已ニ日アルコトヲ知ルベキナリ
又當時平城ニ都シ帝京ノ繁華前古未嘗有ト稱ス今其景狀ヲ想
ヒ見ルニ續日本紀ニ養老七年十一月甲子、太政官奏言上古淳朴
冬穴夏巢後世聖人代以宮室亦有京師帝王爲居萬國所朝非是壯
麗何以表德其板屋草舍中古遺制難營易破空殫民財請仰有司令
五位以上及庶人堪營者構立瓦舍塗爲赤白奏可之トアルヲ見レ
バ此比京邑尙ホ古様ヲ存シ木板草竹以テ屋舍ヲ造ルモノ此ニ於
テ燦然之ニ藻飾ヲ加へ其他衣服器皿ノ類凡百ノ事物頗ル美觀ヲ
添フルニ至レリ蓋シ先王化育ノ盛業此ニ於テ大ニ煥發スルモ
ノト云フベシ續日本紀ニ神護景雲元年四月癸巳、東院玉殿新成、
之玉官、又龜元、九月己卯、禁文武百寮六位以下、用虎、豹、熊、皮、金
銀、鈔、鞍、具、并、橫、刀、帶、端、上、但、朝、會、日、用、者、許、之、婦、女、依、父、夫、蔭、服、用、亦、聽、

○奈良繁盛

○都鄙市場

大和名勝志。平城都墟ハ起昇寺郷一條村の南街道の東南に有て築地の内云ふ山手の田地なり又此處に内裏の宮といふ小廟あり

萬葉集。しろかねのめぬきの太刀をさけはきて奈良の都をねるはたかこり

合抄。藤子謂五位以上之子大和始。元明天皇和銅五年

之、又凡横刀鐵者以絲纏造、勿用素木令脆焉、又藤原武智麻呂傳、由是國家殷賑、倉庫盈溢、天下大平、街衢之上、朱紫輝々、奕々、鞍乘駉々紛々、因園幽寂、嘉石若生、仍營防京邑及諸驛家、許三人瓦屋、舖壘、塹トアルハ此比帝宮及朝服ノ様ヲモ知ルベクシテ當時帝都登華麗ヲ競フ一端ヲ此ノ時ニ際リ異邦ノ交通頻リニ開ケ外貨ノモ亦徵スヘキナリ

此ノ時ニ際リ異邦ノ交通頻リニ開ケ外貨ノ會聚スル者多カラズトセズ邦産爲ニ競フテ内地ノ工事頗ル精巧ニ赴キ物品ノ増殖既ニ前日ニ超乘シテ都鄙ノ市場モ亦タ繁昌ナリケント思ハル、ナリ是ヨリ先キ難波ニ攝津職アリ西陸ニ太宰府アリ難波ハ畿内海門ノ要衝太宰府ハ鎮西第一ノ都邑ニシテ且博多ノ大津ヲ帶ビ當時互市ノ要港ナレバ外船常ニ出入シテ貿易ノコト多カリシナリ又滋賀ノ大津ハ東北ノ咽喉ナレバ俱ニ市民幅濶シテ其繁盛亦葢下ニ亞グリ、ザレバ都市ノ朝夕モ殊ニ賑ハシカラザルナク商估ノ作業モ亦旺盛ナリケント想像セラル、ナリ萬葉集ニ西京爾但獨出而眼不並買師絹之商自許里嶋トイヘルニテモ此比民間賣買ノ一斑ヲ察スベキナリ

○商白許里

七月伊勢尾張三河駿河伊豆近江越前丹波但馬因幡伯耆出雲播磨備前備中備後安藝紀伊阿波伊豫讃岐等二十一國をして始めて綾錦を織らしむトモ見へ當時工業ノ濶度ヲ得シコト察スベシ宜ナリ本邦ノ美術ヲ稱スルモノ奈良ヲ以テ今古隆盛ヲ極ルモノトス今正倉院中ノ御物ニ就テ御考スル

此ハ市中ニ往テ絹布ヲ買ヒシニ謀リ合ハス友モナク吾ノミ撰テ購ヒ來シカ其絹布ノ粗惡ナルハ商賈ノ醜賣ニ遇ヒシナリト悟リ悔ヒタル歌ナリ商賈ノ紛雜ニ乗ジテ騙欺ヲ爲スコトハ昔モ今モ繁華ノ都府ニハマ、アル慣ヒニシテ買フモノ、情モ亦遲疑シテ然ルアルモノナリ日本靈異記ニ聖武ノ朝設樂東市賤人、從市東之門而入市中賣經術賣以告之言誰經買誰經買前遮歷而過從市西門而出往也云云猶問經直欲幾何答別卷直欲錢五百文隨乞而買ト云フハ當時市ニ於テ物ヲ立賣セシコトナリ又借其大安寺修多羅分錢卅貫以往於越前之都魯鹿津而交易以運超載船將來家之時ト云フ都魯鹿津ハ敦賀港ナリ南都ノ商估ガ寺錢ヲ借受ケ之ヲ資本トシテ敦賀へ赴キ遠ク物貨ヲ買入レシナリ又尾張國片輪里ノ一女子ガ三野國小川市ニテ蛤捕五十斛載船泊彼市也云云時狐來彼蛤皆取令賣ト云フハ境ヲ踰テ商賈ガ

ニ亦昔日工業ノ一斑ヲ察知スルニ足ルモノアルナリ
 案ズルニ續日本紀和銅四年閏六月挑文師ヲ請國ニ遣リ始テ錦織ヲ織ルコトヲ習ハシム挑文師ハ令ニ挑錦綾羅等文ト見エ
 官位令。彌津關津國太宰府帶筑前國續日本紀考證。博多大津在筑前國那珂郡寶

各所ニ相聚リ物貨ヲ賣買セシサマナリ又寶龜九年戊午冬十月下旬備後國葦田郡大山里人品知牧人爲買正月物向同國深津郡深津市而往云云我與弟公率往于市所持之物馬布綿埤路中日晚宿于竹原竊殺弟公而携彼物到于深津市馬賣讚岐國人自餘物等今出用之ト云フハ備後ノ國ノ商人ガ布綿ヲ市ニ鬻キシナリ河内ノ國蓆販之人名曰石別也過馬之力而負重荷云々賣蓆者即殺其馬ト云フハ河内ノ國ノ商人ガ物貨ヲ市ニ駄送セシナリ又時商人大船載荷乘過ト云フハ商品ヲ草津ノ川ニ船送セシナリ又昔吾與兄共行交易吾得銀卅斤許ト云フハ貨物ヲ賣買シテ其利銀ヲ得タリシナリ又嫌ヲ買フニ宛十貝直欲米五斗ト云フハ米ト魚物ヲ交易セシナリ又富貴多寶有馬牛奴婢稻錢田畠等天年無道心慳貪無給與酒加水多沽取多直貸日與小升價日受大升出舉時用小斤價收大斤息利強微大甚非理マタ或貸八兩綿強倍

○開木會山路

龜七年閏八月肥前太宰博多津即舊明紀所謂那大津也近藤芳樹カ令校本ニ攝津磯は上古餘波に宮ありて是を掌る官を職といふ此職即ち津の國を攝たる故に攝津職と云ふ攝は兼帶の義なり名義抄に攝をカ又と訓めり和訓釋。ホキじこりのいは助語こりは感の接なり

十兩而賣取或貸小斤稻而强大斤取ト云フハ或ハ酒ヲ賣リ或ハ物ヲ貸シ其利分ヲ得タルナリ是等ノ數條ニ據リテ推考ヲ下ス時ハ當時民間賣買ノ一斑ヲモ亦察スルニ足ルモノアルナリ案ズルニ此比都鄙ノ往來頗ル開ケ水陸驛傳ノ便モ多カルモノアルベシ續日本紀ニ和銅四年正月近都ノ郵亭六所ヲ置カレシコトモアレバ諸州モ亦之ニ準ジ便宜驛務ヲ更革シテ其利ヲ得シコトアルベキナリ又是ヨリ先キ續日本紀ニ大寶二年十二月壬寅始開美濃國岐蘇山道既ニシテ和銅五年七月戊辰美濃信濃二國之境徑道險阻往還艱難仍通吉蘇路トアリ東北ノ海道ハ概子積水ニ沿フガ故ニ路程夙ニ開ケタルモ中心ナル東山道ノ如キハ難易同ジカラザルヨリ其開通モ亦最后ニアリシガ此際ニ在テ山間ノ險路漸ク開ケ不毛ノ物産隨テ興リ商賈亦其業ヲ進ントスルニ至レ

大和志。西市
在九條村然レ
ハ今大和國漆
下郡ニ屬スル
ナリ

古昔ハ都邑ト
雖モ多ク樹林
ヲ匿キシナル
ベク殊ニ市間
ハ商估ノ寒暑
風日ヲ避クル
ノ料ニ供スル
ガ爲ニ必ス植
樹ヲ要セシモ
ノナルベキナ
リ雄略紀ニ十
三年春三月天
皇使前田根命
實財露置於前
香市場榎木之

リ當時此舉ハ本邦經紀ノ業ニ於テ殊ニ鴻益アリシモノト
云フベシ再案スルニ都府ヨリ西南諸州ノ往還ハ多ク舟路
ヲ取ルヲ以テ其便少カラザレドモ東北諸道ノ如キハ航海
未ダ開ケズ渾テ陸路ニ據ルヲ以テ轉運ノ勞啻ナラズ其民
力ヲ盡セシコト後人意想ノ外ニ出デシモノアラン此比輸
租ハ皆穀粟布帛ノ類ニシテ之ヲ上送スルニ役夫ノ困難少
シトセズ最遠ノ地方ヨリスルモノ或ハ初夏已ニ其途ニツ
キ季秋纔ニ還ルアリ或ハ入京事了レドモ歸國ノ程糧乏ク
シテ路頭饑餓ヲ免レザルアリ故ニ輸米ノ重キヲシテ之ヲ
綿織ノ輕キニ換ヘ或ハ國司上奏シテ爾今貢租ヲ國內ニ置
キ十年一回京庫ニ進納セラレンコトヲ上請スルモノアル
ニ至レリ其實況亦察スベキナリ又續日本紀ニ去天平七年
故大貳從四位小野朝臣老遣高橋連牛養於南島樹牌而其牌

○海路開通

上文續日本紀
天武十年十月
親王以下及群
卿皆居于輦市
而檢校裝束鞍
馬小部以上大
夫皆列坐於樹
下又萬葉集源
東市樹歌ニ東
市之樹木乃木
足左右トアリ
日本書紀記ハ
南都藥師寺ノ
僧景戒ノ選ム
所ナリ景戒ハ
孝謙ノ朝ノ人
ナリト云ヘリ
三野ハ美濃ナ
リ古者國中ニ
三大野アリ故

經年今既朽壞宜依舊修樹每牌顯著島名并泊船處有水處及
去就國行程遙見島名令漂着之船知所歸向ト云フハ海程ノ
諸島ニ標準ヲ建テ港名等ヲ明示シテ舟路ノ便ヲ圖リシナ
リ又三善清行ノ封事ニ山陽西海南海三道舟船海行之程自
室生泊至大韓泊一日行自大韓泊至魚住泊一日行自魚住泊
至大輪田泊一日行自大輪田泊至河尻一日行此皆行基菩薩
計程所建置也トアレバ此比西州ノ航路既ニ經營ナリテ海
運ノ利亦開ケタル知ルベク皇代記ニ大化二年丙午道登法
師始造宇治橋扶桑畧記ニ神龜三年丙寅十月行基菩薩造山
崎橋トアリ當時繼徒飛錫ノ際山川開路ノ事ヲシテ自ラ之
ヲ任ズルノ風アリ亦以テ國家經濟ノ要旨ヲ得タルモノト
云フベシ而シテ吉蘇ノ山路ヲ開通スルハ朝旨專ラ力ヲ加
ヘシモノ、如ク和銅七年閏二月美濃守從四位下笠麻呂等

○宇治山崎
兩橋

○銀銅二錢

ニ名クト云フ
 新儀樂記。大和菰
 蟻ハ蝦蟇記ノ注ニ河支トアリ今昔物語ニ蛻ニ作ル
 出舉ハ貸出シ也續日本紀ニ公私出舉取利十分三
 三代實錄。元慶三年九月四日檢首記云吉蘇小吉蘇兩村是忍奈郡繪上郷ノ地也和銅六年七月以英

吉蘇路ヲ通ズルヲ以テ位階ヲ進メ封田ヲ賜フコト續日本紀ニ載セタリ

續日本紀ニ和銅二年三月甲申制凡交關雜物其物價銀錢四文以上即用銀錢其價三文以下皆用銅錢ト云フハ銀銅二錢流通ノ區分ヲ設ケラレシモノニシテ銀貨ニ準ズレバ銅貨尙ホ不足セルモノアリ今此制ヲ布カレシナルベシ三年太宰府獻銅錢播磨國獻銅錢ト云フヲ以テスレバ當時所々ニ鑄錢アリテ貨幣ノ增加ヲ望マレシコト明カニ知ラルモノアリ四年五月己未以穀六升當錢一文令百姓交關各得其利ト云フ此時銅位ノ又賤シカラザルヲ知ルベク且此條ニ據リテミレバ六升以下ヲ賣買スルニハ尙ホ他ノ物品ヲ用ヒシモノニシテ錢貨ノ流通未ダ充分ナラザレバ其商業ノ伸張ヲ云フモ未ダ力ノ足ラザリシナリ十月甲子詔曰夫錢之爲用所以通財貨易有無也當今百姓尙迷習俗未解

○勸貯錢

鴻信濃兩國之堺經路險隘往還甚難仍通吉蘇路
 水曾名所國會ニ據ルニ大寶二年ニ開通スルモノハ今御坂古道ト稱シ鴻州大井驛ノ北千駄林ヨリ信州霧原山ヲ經テ御阪ニ至ル山徑ヲ云フ案スルニ此山路險阻艱難ナルヲ以テ和銅ニ至リ更ニ今ノ木曾路ヲ開キシナルベシ

其理、備雖賣買猶無蓄錢者隨其多少節級授位トアリテ錢一千貫ヲ蓄フモノハ位一階ヲ進メ二千貫ハ二階ヲ授クト云フガ如クニシテ貯錢ヲ勸誘セラレシナリ當時人民尙ホ因習ニ安ジ物貨ノ交易ヲ事トシテ通錢充分ナラザルヨリ今斯布令アリシモノナリ六年三月壬午詔曰任郡司少領以上者性識清廉雖堪時務而蓄錢乏少不滿六貫自今以後不得選任トアルハ地方吏員蓄錢六貫ヲ得ザルモノハ其職ニ就ク能ハザルナリ既ニ通錢ノコトヲ望ム最モ切ニ其法度亦餘地ナキニ至レリ

續日本紀和銅五年閏十二月辛丑又諸國所送調庸等物以錢換宜以錢五文准布一常又養老六年九月庚寅伊賀伊勢尾張近江越前丹波播磨紀伊國始輸錢庸又是ヨリ先キ和銅四年十月始テ祿法ヲ定メ二千文ヨリ十文ニ至ル錢貨ヲシテ布綿相併テ之ヲ百官ニ賜フト云フモ皆致々トシテ通貨ノ便

○令旅人府
錢

○遊米任賣
買

扶桑傳記ハ阿
闍梨皇國ノ抄
屋代弘野カ山
崎橋與廢記ニ
山崎の橋ハ聖
武天皇の神龜
三年に行基ほ
さつ造たれど
（是より先き
橋ありて廢せ
しといふこと
行基傳に見へ
たり但し神龜
二年といふ）
洪水俄にいた
り橋ながれひ
とあまた死
せしなり
播磨國風土
記。所以號室

ナ圖ラレシモノナリ

續日本紀ニ和銅五年十月乙丑詔曰諸國役夫及運脚者還鄉之日
糧食乏少無由得達宜割郡稻別貯便地隨役夫到任令交易又令行
旅人必齎錢爲貨固息重擔之勞亦知用錢之便マタ此年正月乙酉
詔曰諸國役民還鄉之日食糧絕乏多僅道路轉填溝壑其類不少ト
アリテ此比土木其他貢稅漕運ノ爲ニ諸州ヨリ上京スル役夫モ
殊ニ多カルベク而シテ旅途ニ着クモノ布匹其他ノ物料ナシテ
之ガ費用ニ充テシモノニテ路中ノ艱辛察スベシ故ニ今此制ヲ
設ケ行旅ノ便通錢ノ用兩ナガラ之ヲ知ラシメ且販鬻ノ利ヲ起
サレシニ出ルモノナリ又六年三月壬午詔諸國之地江山遐阻貧
擔之輩久苦行役具備資糧闕農貢之恒數減損重負恐殫路之不少
宜各持一囊錢作當盧給永省勞費往還得便宜國郡司等募豪富置
米路側任其賣買一年之内賣米一百斛以上者以名奏聞マタ賣買

者此泊防風如
室故以爲名ト
アリ室ハ樞生
ナリ
播磨國風土
記。鶴荷島轉
人彼船所漂之
物漂於此島故
以號鶴荷島ト
アリ大韓ハ韓
荷島ヲ云フカ
魚住ハ播磨ノ
國明石郡ニ屬
ス今明石市街
ノ近傍ナリ
續日本紀。行
基俗姓高志氏
和泉國人名勝
滿天平勝寶元

田以錢爲償若以他物爲價田并其物共爲沒官或有糾告者則給告
人賣及買人並科違勅罪郡司不加檢校違十事以上即解其任九事
以下量考第國司者式部監察計違附考或雖非用錢而情願通商者
聽之トアルモ五年ノ制ニハ官稻ヲ割キ役夫運脚ノ輩ナシテ米
錢交易スルノ定ナリシナ今更ニ役民ナシテ各錢ヲ攜帶シ旅中
豪富ノ家ニ就キ其食米ヲ買收セシム而シテ郡司ヲシテ周年ノ
賣額ヲ上奏セシムルアルニ至ル焉中ノ勞ヲ憇ヘ搬送ノ便ヲ開
ク者ト云フベシ又田園ノ賣買ハ殊ニ價額多キ者ナリ今此禁ヲ
發スル者ハ蓋シ錢貨流通ノ利ヲ興サントスルノ聖意ニ外ナラ
ザルヲ知ルナリ又五年十月癸酉禁六位以下及官人等服用蘇芳
色并賣買ト云フハ蘇芳ハ異木ノ類ニ屬シ當時貴重ノ品種ナレ
バ位階ニ寄リテ禁色トス且其奢風ヲ制センガ爲ニ斯ク賣買ヲ
モ禁セラレシナリ

續日本紀ニ位妻並聽服蘇芳也ト見ヘタリ

○布匹之制

年二月癸化又文武四年三月
 日未道照和尙遷化云々周遊天下以傳經并
 精津濟遠儲船造橋乃山城國宇治橋和尙所
 創立也又神護景雲元年八月
 辛巳筑前國宗形郡大領外從
 六位下宗形朝臣深津授外從
 五位下其妻無位竹生王從五
 位下並以破付齊應麟金壇
 船瀬トアルモ亦古來傳徒開
 路ノコトニ心

又七年二月庚寅制以商布二丈六尺爲段不得用常如有蓄常布自
 援產業者今年十二月以前悉賣用畢或貯積稍多出賣不盡者便納
 官司與和價或限外賣買沒爲官物有人糾告皆賞告者ト云フハ此
 比新ニ布匹ノ制度ヲ立ルニヨリ舊布ノ賣法ヲ設ケシモノニテ
 蓄常布自援產業トハ布商ノコトヲ云フナルベシ

續日本紀和銅六年四月戊申頒下權衡度量於天下諸國又養
 老四年五月頒尺樣諸國曩ニ度量ヲ天下ニ頒タレシコト文
 武ノ景雲二年ニ在リ但權衡ノ字ナカリシハ蓋シ史乘ノ畧
 文ナランカ大寶ノ頒令ニモ三器具備ノ明文アレバ亦以テ
 證ト爲ベシ而シテ今茲ニ此制ヲ布カレシハ再ビ權衡ノ制
 ナ立テ其器ヲ更釐セシニ在ル乎將マタ別ニ因由アル乎未
 ダ考フル能ハザルナリ

○元正天皇第五代 此朝ニハ曩ニ布行アリシ大寶令ヲ刊修セラ

○京城移民

ヲ注キシ一體ナリ
 令抄。庸宿雅等也又庸也不
 役者日爲稱三尺謂之庸
 令抄。八尺曰
 朝倍尋曰常
 令抄。民部式凡調庸及中男
 作物送京差正
 丁充運調
 令集解。割區田租以充雜用
 是爲郡稻也
 舊藤給ハ旅房
 錢ニシテ後世

ル世ニ之ヲ養老令ト云フ蓋シ政務ノ加進ヲ圖リ倍民業ノ發達
 ナモ期セラレシモノナリ續日本紀靈龜元年六月丁卯諸國人二
 十戶移附京城由殖貨也ト云フハ此時平城建都以來殆數年市人
 ノ來テ釐下ニ經營スルモノ日ニ多キヲ致シ其繁盛既ニ前古ニ
 過ルモノアリ故ニ今海内ノ豪富ヲ移シテ四方ノ交市ヲ開キ東
 西ノ物貨ヲ通シ全府ノ財源ヲ涵養セラレントスルニ在ルナリ
 靈龜元年五月庚戌移相摸上總常陸上野武藏下野六國富民千戶
 配陸奧矣トアルモ同シ意ニ出ルナリ

續日本紀養老五年正月丙子令天下百姓以銀錢一當銅錢二
 十五以銀一兩當一百錢行用之トアリ銀銅二錢ノ格位漸ク
 差違ヲ生ズル此ノ如シ蓋シ邦產ノ銅量頻ニ加進シ鑄錢ノ
 業亦隨テ熟スルニ由ルニアラザランヤ而シテ銅貨尙ホ此
 格位ヲ保ツ能ハズ又一年ニシテ養老六年二月戊戌詔曰市

○銀銅二錢

ニ旅籠料ト云
フモノナリ

令其解。謂樣
者刑制法式也

續日本紀考
證。草間氏曰
當時新錢萬年
通野及金銀錢
興和銅錢並行
千世此蓋以和
銅錢言之也

○偽錢

白鑄玉鑄鑄鐵
也

續日本紀神護
景雲元年十一
月丙寅私鑄錢

頭交易元來定價比日以後多不如法因茲本源欲斷則有廢業之家末流無禁則有奸非之侶更量用錢之便宜欲得百姓之潤利其用二百錢當一兩銀仍買物貴賤價錢多少隨時平章永爲恒式トアルハ百貨ノ市價ハ固ヨリ規定アルモノトス實況然ルヲ得ザル者ハ錢位時價ニ適セザルナリ故ニ今銀銅二錢ノ定位ヲ更附シ之ヲ通用セシムル者ニシテ前年一百ノ銅錢ヲシテ銀一兩ニ位セシ者一躍ニ二百錢ニ至リシハ銀銅二貨ノ格位始テ當テ得タルモノカ續日本紀和銅七年九月甲辰制自今以後不得擇錢若有實知官錢輒嫌擇者勅使杖一百其濫錢者主客相對破之即送市司又靈龜二年五月勅太宰府百姓家有藏白鑄先加禁制然不遵奉隱藏賣買是以鑄錢惡黨多肆奸詐連及之輩陷罪不少宜加嚴禁無更使然若有白鑄搜求納於官司ト云フヲ以テミレバ此比偽錢民間ニ行ハレ

人王清麻呂等
四十人賜姓鑄
錢部流出羽國

○遷二市於
恭仁

續日本紀天平
十三年九月已
未班給京部百
姓宅地從賀世
山西道以東爲
左京以西爲右
京又十四年八
月乙酉宮城以
南大路西頭與
鴨原宮東之間
令造大橋令諸
國司隨國大小
輸錢十貫以下
一貫以上以充
造橋用度

爲ニ交通澁滯シ官錢モ亦自ラ精粗アルヨリ衆庶撰擇シテ授受ノ妨アリシナラン當時鑄錢ノ料ニ梵宇ノ銅像ヲ盜ム者アリシコト日本靈異記ニモ見ユ又偽錢ノ多キ一證ナリ

○聖武天皇第四十代續日本紀ニ天平十二年八月丙午遷平城二市於恭仁京ト云フハ此時既ニ宮都ヲ移シ今又二市ヲモ遷サレシナリ恭仁ハ今山城國相樂郡ニ屬セリ

案ズルニ續日本紀天平十年十二月丁卯皇帝在前幸恭仁宮始作京都太上天皇皇后在後而至トアリテ當時其經營ニ從事シ茲ニ至テ東西二市ヲ遷サレシナリ十三年正月車駕新都ニ御シ既ニシテ十五年十二月恭仁ノ工事ヲ停メ更ニ紫香樂宮ヲ造營セラル又十六年閏正月百官及ヒ市人ニ恭仁難波定京ノ地ヲ諮問セラレシ事アリ十七年正月車駕紫香樂ノ新京ニ遷ル此年五月諸司及四大寺ノ衆僧輩ニ帝京ノ

○禁賣兵器
牛馬

ヲキチア。久
選都又恭仁宮
といふかせ山
の邊みかの原
のあたりにあ
りしなるべし
万葉にみかの
原くにの都は
山たかみ河の
瀬きよしトヨ
メリ
和名類聚鈔市
人伊知比止ト
湖ス
西大寺ハ備シ
南都、東大興、
福、學師、大安
ノ四寺ヲ云フ
ナラン

コトヲ問フ皆曰ク平城ニ都スベシト恭仁京市人徙於平城
曉夜爭行相接無絶ト云フ是ニ據テ見レバ恭仁ノ兩市ハ三
年餘リニシテ平城ニ復セシナリ

是ヨリ先キ續日本紀天平四年八月壬戌勅東海東山二道及山陰
道等兵器牛馬並不得賣與他處一切禁斷勿令出堺其常進公牧繫
飼牛馬者不在禁限ト云フ當時蝦夷其他四裔ノ虞アリ故ニ諸道
ヲシテ戎器及牛馬ヲ賣ルヲ禁ゼシナリ天平六年三月甲寅許東
海、東山、山陰道諸國賣買牛馬出堺ト云フハ稍此禁ヲ解レシモノ
ナリ

續日本紀ニ天平二十一年二月丁巳陸奥國始貢黃金奉幣以
告畿内七道諸社トアリテ此ニ至リ邦產ノ金銀銅全ク備ハ
レリ是ヨリ先キ文武天皇大寶元年三月戊子遣追大肆凡海
宿禰鹿鎌于陸奥治金トアルハ東奥ニ黃金ヲ産セシ前兆ト

續日本紀。天
平二十一年四
月乙卯陸奥守
從三位百濟王
敏滿貢黃金九
百兩
水鏡ハ中山内
府忠親撰ス
○常平倉

史記平準書
註實則賑之賤
則貴之平騰以
相準輸賦於京
都命曰平準

云フベシ此時黃金ヲ産セシコト帝王編年記ニハ天平十七
年八月二十三日奥州ヨリ黃金五百兩ヲ獻ズ水鏡ニハ天平
二十年正月陸奥よりこがね九百兩を奉じき濫觴抄ニハ天
平二十一年正月四日進小田郡所出黃金九百兩トアリテ諸
説紛々タレドモ今國史ニ據テ之ヲ記載ス

○淳仁天皇第四十代續日本紀ニ天平寶字三年五月甲戌勅曰頃聞
至干三冬間市邊多餓人尋問其由皆云諸國調脚不得還鄉或因病
憂苦或無糧飢寒朕竊念茲情深矜愍宜隨國大小割出公廩以爲常
平倉逐時貴賤糶糴取利普救還脚苦非直當外國民兼調京中穀價
其東海、東山、北陸、三道、左平準署掌之、山陰、山陽、南海、西海、四道、右平
準署掌之ト云フハ此時新ニ常平倉ノ設ケアリ糶糴ノ法始テ起
レルナリ其本ハ諸州輸租ノ時ニ際シ脚力等ノ苦難ヲ愍ミ都下
ノ穀位ヲ平定スル救治ノ政意ニ發スルナリ天平寶字七年四月

○米石千錢

本朝年表。天平寶字八年藤原惠美押勝反轉伏誅

○金銀銅三貨

甲戌朔京師米貴、糶左右京穀以平穀價、ト云フハ六年八月辛未朔勅曰、如聞去歲霖雨、今年兀旱、五穀不熟、米價踊貴、由是百姓稍苦、飢饉トアリ、前年以降、滯旱ノ爲、此時米價騰貴セシナリ、又天平八年三月巳未、東西市頭乞食者衆、是年兵旱、仍米石千錢、ト云フ兵ハ藤原押勝ノ亂ナリ、千錢ハ則チ一貫錢ナレバ、當時ニ在リテ米價ノ貴重ナルコト察スベシ、和氣清麻呂傳ニ後、民苦飢疫、棄子草間、遣人収養得八十三兒、ト云フモ、此時ノコトナルベシ

續日本紀、天平寶字四年三月丁丑、勅錢之爲用行之已久、公私要便、莫甚於斯、頃者私鑄稍多、僞濫既半、頓將禁斷、恐有騷擾、宜造新樣、與舊並行、庶使無損於民、有益於國、其新錢文曰萬年通寶、以一當舊錢之十、銀錢文曰大平元寶、以一當新錢之十、金錢文曰開基勝寶、以一當銀錢之十、トアルハ、此時ニ際リ、邦内ノ鑛物亦多カリケレバ、三種ノ寶貨鑄造ノ事、既ニ全ク成リシ

今昔物類大なる寺を其所に造る弘濟相共に此を營て佛の像を造らむと爲るに金を買むか爲に弘濟に多くの財を持せて京に上く弘濟京に上て思ひの如く金を買得て返り下る

○物價

ナリ、但是ヨリ以前ニ在リテハ、黄金ノ如キ概子佛像其他ノ器具等其藻飾ニ用ユルノミ、偶交易ニ充ルモノハ、又他ノ物貨ト異ナルナク、渾テ量斤ニ應シテ行用スルニ過ギザリシナリ、而シテ天平十九年二月南都大安寺資財帳ニ練金、生金、沙金等ノ種目アリ之ニ配シテ銀錢壹仟伍拾三文、錢陸仟肆佰添拾參貫捌佰貳拾文ト記セリ、亦以テ黄金ハ通貨ニ比スル大寶タルコトヲ知ルベキナリ、是時ニ方リ錢貨ノ通用漸ク多ク、工事其他百般ノ費途ニ充ルニ至リ、又更ニ官吏ノ祿法ヲ定メ、布錢並ビ賜ハルモノアリ、或ハ諸國ノ豪民錢一千若クハ百萬ヲ貢獻シ、外位ニ叙スルコトアリ、亦既ニ通貨ノ四方ニ被フルヲ知ルベシ

續日本紀、天平寶字元年四月庚午、諸國兵衛資物、令當郡見在、郡司節級輸之、仍附貢調使送所司、其輸以上絶一疋、充銀二兩

貨幣史參考ハ
大藏省印刷局
撰ム

日本紀畧。永
延元年三月十
六日戊寅右大
臣以下參仗座
定申賀茂上社
稱賀賀茂在實
於社頭鳥居側
棚往古錢七百
八十二文獻公
家其文有三和
銅開珍慈年過
寶神功開寶云
ヤト云フコト
見ヘタリ

以上絲小二斤庸綿小八斤庸布四段米一石並充銀一兩即依
當土所出准銀二十兩トアリ其他當時錢百貫若クハ十貫ヲ
稱貸シテ其息利ヲ得ルヲ業務トスルモノアリシコト日本
靈異記ニモ見ヘタレバ此比ニ在テ通錢ノ民間ニ行ハレ
シモ知ラル、ナリ貨幣史參考ニ東大寺古文書中天平ヨ
リ天平寶字ニ至ルノ物價ヲ掲クルモノヲ舉グ亦以テ當時
交易ノ一斑ヲ察スルニ足レリトス天平十二年十二月二日、
薪六十束、代錢四百文、天平寶字元年二月十日、葛野布、一千五
百張、代錢三十貫文、同二年八月四日、紙、五十張、代錢三十七文、
同年八月十一日、紫繩、二丈六尺四寸、代錢貳貫文、同年十二月、
生大豆九束、代錢十六文、同四年正月四日、木沓二十六兩、代錢三
百七十六文、同年十一月十四日、雇人五人、代錢二十五文、同五
年十二月二十七日、神鏡一隻、代錢六文、鈴一隻、代錢八文、紙五

十枚、代錢三十五文、同六年陸奥上野二國ノ上品漆一升、代錢
二百六十文、中二百五十文、ト見ユ又以テ當時交易ノ一斑ヲ
察スルニ足ルモノトス

○糶米

令集解。白丁
正丁ナリ

○糶米者叙位

○孝謙天皇第四十代續日本紀ニ天平神護元年二月庚寅、左右京、
各二千斛、糶於東西市、斗百錢、マタ是月京師米貴、令西海道諸國恣
漕私米、四月丁丑、左右京、穀各一千石、糶於東西京、以米價踴貴也、五
月丙辰、左右京、糶各一千石、糶貧民、其月庚午、左右京、糶各一千石、大
膳職、鹽一百石、糶於貧民、癸酉、勅天下諸國、郡司六位以下及白丁、糶
米二百石、叙位一階、每加二百石、進一階、其繩六百疋、商絲一千六
百斤、調庸綿六千屯、調布一千二百端、商布三千五百段、亦各叙階、准
上マタ令諸司六位以下雜任以上者、糶米二百斛、叙位一階、每加一
百五十石、進一階、叙他物又准此、皆限七月二十九日於東西市出賣、
唯五位以上及正六位上別奏其名、其月甲辰、糶左右京、糶三千二百餘

石於諸司官人ト云フハ當時不登ノコトアリテ布穀ノ類ヲ糶賣シ其窮民ヲ救ハレシナリ常平糶糴ノコトハ爾來國家ノ常典ニシテ各地方トモ之レヲ施行シ復間斷アルコト莫シ然レドモ事固ヨリ一時ニ止リ其商務ニ關スルナキハ別ニ畧シテ記セザルナリ續日本紀天平神護元年九月辛未行幸紀伊國丙子天晴進到玉津島丁丑御南濱望海樓奏雅樂及雜伎權置市廛令陪從及當國百姓等任爲交關散位トアルハ當時官人若クハ市客ヲシテ假ニ賣買ノ事ヲ爲シメ以テ御遊ニ供セシモノナリ市店貿易ノアリサマハ宮中ナトニハ殊ニ珍シキモノナレバ時トシテ斯ルコトハアリシナルベシ出雲國風土記朝約促戸ノ事ヲ云フ條ニ大小雜魚濱菜家園市人四集自然成塵又常陸國風土記茨城郡中ノ事ヲ舉ル條ニ漁獵逐濱洲以輻湊商豎農夫棹舫往來トアル當時東西二州水濱ニ在ル商估ノ動止モ思ヒ出ラレ一層ノ盛事

○權置市廛又關

朝約ハ今出雲國島根郡ニ屬ス

八雲御抄。遣唐使の船四艘トアリ和歌に四の船トモヨミテ四艘ト定メラレシモ蓋シ此比ヨリノコトカ
○砂糖甘藷船來
紫邊錢五十貫或ハ五千貫ニ作ル
天寶二載ハ唐ノ玄宗ノ年號ニシテ本邦ノ天平十五年ニ當レリ
○輸出入品

トコソ千歲ノ下ニモ遙察セラル、ナリ又是ヨリ先キ續日本紀天平四年九月甲辰遣使干近江丹波播磨備中等國爲遣唐使造船四艘ト見ユ當時外交ノ多カリシコト知ラレタリ而シテ唐大和上東征傳ニ天平五年沙門榮叡等遣唐大使丹墀真人廣成ニ隨ヒ支那ニ入テ留學セリ同十五年歸朝ノ日船中ニ勝載スル物貨數十種アリ經卷佛具尤多ク其他麝香甘劑沉香龍腦香等各六百餘斤胡椒阿魏石密蔗糖等五百餘斤蜂蜜十斛甘蔗八十束青錢十千貫正爐錢十千紫邊錢五十貫羅幞頭二千枚麻靴卅量席冒卅箇僧祥彥等一十七人玉作人畫師彫佛刻鏤鑄寫繡師修文鐫碑等工手都テ八十五人同駕一隻舟天寶二載十二月舉帆東下ト云フ是等ノ貨物ハ當時海外ヨリ輸入スル貿易品ナルベク續日本紀ニ寶龜七年四月渤海王ニ絹繩絲黃金水銀金漆海柘榴油水精念珠檳榔扇ナド賜ヒシコトアリ亦輸物貨ノ一斑トスベキカ而シテ輸

○會賀市司

續日本紀。神龜四年云々。渤海郡者舊高麗國也。淡海朝廷七年冬十月。唐將軍李勣伐滅高麗。其後朝貢久絕。至是渤海郡王遣使遣將軍高仁義等二十四人朝聘。濫觴抄。渤海使聖武四年丁卯始來朝。姓氏考。忌寸は姓なり。異國歸化のものを神宮に奉る例にて齋置の意なり。

○遷東西市

續日本紀。延暦三年十一月。以子天皇移幸長岡宮。七年五月辛卯。新遷京。都公私草創。百姓移居多未。數。於是昭賜左右及東西市人物各有差。菟野泥社。長岡八勝立寺。神足なとの邊をなへていふ。勝立寺ハ山崎より一里の南北也。細川幽齋もここに住む故に長岡幽齋といふ。

入ニ法具ノ多キハ固ヨリ崇佛ノ時世ト其將來スルモノ緇徒ニ係ルヲ以テナリ

○光仁天皇第四十代續日本紀ニ寶龜元年正月癸酉以從五位下山口忌寸沙麻呂西市員外令史正八位下民使毗登日理權任會賀市司ト云フ會賀又惠我餅香ニ作ル會賀ハ前記ノ如ク今河内國ニ屬セリ河内ハ近畿ニ在リテ都下便宜ノ地方ナルヲ以テ前古外工等ヲシテ多ク本州ニ置カレシコトアリ爾來凡百ノ工作隨テ起リ商品亦少ナカラズ蒸シ四方ノ貨物ヲ交易スル當時樞要ノ市場ナルヨリ今市司ヲモ置レシナルベシ

○桓武天皇第五十代日本紀卷ニ延暦十三年七月辛未朔遷東西市於新京丁丑造壓舍且遷市人ト云フハ是ヨリ先キ續日本紀延暦七年九月ノ勅諭ニモ水陸有便建都長岡トアリテ奈良ノ京ヲ更ニ長岡ニ遷サレシヲ今又轉ジテ新京ニ遷サレシナリ新京ハ則チ

平安城ト稱ス今ノ西京是ナリ壓舍ハ東西ノ市中ニ在ル房舍ヲ謂フ商民相聚リ交易スル所即チ官造ニ係ル者ナリ抑平安帝城ノ地タル山ニ據リ水ニ臨ミ左ニ大湖ヲ湛ヘ以テ東北二道ノ運漕ヲ起シ右ニ浪華ヲ控ヘ以テ西南海路ノ交通ヲ便ナラシム海内四通ノ利是ヨリ盛ニ物貨澁滯ノ弊是ヨリ去レリ商民其利益ヲ被フル蓋シ亦淺々ナラザルヲ信ズ宜ナリ萬古不易ノ帝都トナリ千有余歲海内無双繁賑ナル商業要地トハナレリ而シテ寧樂ノ朝文或ハ質ニ過ギ藻飾ノ楹繡文ノ袂一時其俗ヲ風靡シ加フルニ崇佛ノ事大ニ行ハレ創塔建寺尤多ク甚キハ一造佛ノ費天下ノ熟銅ヲ盡シ遂ニ國用民財共ニ窮乏ヲ告グルニ至ル延暦ノ朝其后ヲ受ケ勅令ヲ發シ以テ今者宮室居ルニ堪ヘ服甌用ルニ足り佛廟茲ニ畢リ錢貨既ニ宜シト鑄錢司其他各般ノ事ヲモ廢撤セラシハ頗ル前政ヲ更釐シ勤テ民力ヲ休養セラレシナリ嗣后土木

○交易立估價

割敵ハ俗ニタ
テキルト云フ
意ナリ

ノ功征東ノ師其舉尙ホ國費ヲ要スル少カラズト雖モ積年ノ侈俗
是ヨリ一變シ終ニ國家ノ健全ヲ保テル者ハ抑亦遷都時宜ニ適
シ國家形勢ヲ得ルニ因由セザララザランヤ類聚國史延曆十七
年十月乙未勅物有貴賤價異高下夏純秋穀色類既多諸國交易先
立估價貴時強與賤價賤時詐注貴直遂事割截枉謀利潤盡民害政
莫甚於斯宜改前過不得重犯仍候物賤之時充和市之價依實言上
不得紆截如猶不悛科違勅罪ト云フハ類聚三代格ニ據ルニ禁官
交易物失時致損トアリテ諸國土宜ノ物貨ヲ以テ普通貢納ノ布
匹等他品ニ易ヘテ奉ルニ預メ之ガ時價ヲ定メ官民交易ノ料ニ
供スル者ニシテ今其價格ノ高低ヲ實查シ上下ノ損耗ナカランメ
ヨト令セシナリ令ノ義解ニ貨物價直隨時輕重官家賣買據其中估
トアル是ナリ又二十一年正月壬戌勅如聞山城國百姓賣買水田
以稻爲直準錢論町過萬錢自今以後宜上田一町直錢四千中下田

○以稻爲直

者準此差減若有違法處違勅ト云フハ田土ノ賣買ニ稻穀ヲ充ル
モノニシテ萬錢八十貫文四千ハ四貫文ナリ山城ハ都市ニ接近
シ之ヲ遠邑遐陬ニ比スレバ其價值ノ騰上セルコト既ニ知ルベ
シ而シテ上田一町ノ價直四貫文ニ過ルヲ得ザルモノハ亦以テ
當時錢貨ノ貴キヲ察スルニ足レリトス

○禁貯錢

類聚三代格ニ延曆十七年九月二十三日太政官符禁斷貯錢
事右被右大臣宣備奉勅用錢之道取於輕便有無均利彼是得
宜者亦如聞外國吏民多有貯蓄京畿士庶還乏資用既乖均利
之義亦失得宜之方宜下嚴制不得更然所有之錢盡皆納官仍
用正稅准價給之送京之功亦用正稅如有藏而不進爲他被告
不論蔭贖科違勅罪五分其物一分給告者四分沒官但伊賀近
江若狹丹波紀伊等國不在禁限又日本逸史延曆十九年二月
壬申今聞般富之民多貯錢貨藏繼萬許或至腐爛是以官符信

力無_レ輟_レ於_二錢作_一京畿乏錢未_レ布_レ於_二民間其_レ百姓納_レ錢以求_レ爵位自
 今以後最_レ加_二禁止更_レ莫_レ令_レ然ト云_レコトアリ又續_レ紀ヲ考_レフル
 天平以降鑄_レ錢漸_レ少_レ饑_レカニ臣僚其他_ニ錢幣ヲ賜_レフコト多
 ク財貨ノ都鄙_ニ流布スルモノ亦知_レルベク民間交市ノ便既
 ニ察_レスベシ而シテ本文ノ如キハ當時錢貨ノ堆積却_レテ都外
 ニ多_レカリシナリ

○禁狄馬交關

類聚三代格延曆六年正月二十一日太政官符應陸奧按察使禁斷
 王臣百姓與_レ俘夷交關事右被_レ右大臣宣_レ爾奉_レ勅如_レ聞王臣及國司等
 爭_レ買_レ狄馬及_レ俘奴婢所以_レ放_レ羊之徒苟_レ貪_レ利潤略_レ良竊_レ馬相_レ賊日深加
 以_レ無_レ知_レ百姓不_レ畏_レ憲章賣_レ此國家之貨買_レ彼夷俘之物綿_レ既_レ着_レ賊襖胃
 鐵亦造_レ敵農器於_レ理商量爲_レ害極深自_レ今以後宜_レ嚴_レ禁斷如有_レ王臣及
 國司違_レ犯_レ此制物即_レ沒_レ官仍_レ注_レ名申_レ上其_レ百姓者一_レ依_レ故按_レ察使從_レ三
 位大野朝臣東人制_レ法隨_レ事准_レ決ト云_レフハ此_レ比討_レ夷ノ舉_レアリテ軍

○禁競買狄土
物品

器其他ノ物貨モ買_レ市ノ事ヲ禁_レジ彼_レヲシテ其_レ力ヲ恣_レニセシメザ
 ラント爲_レルニ在_レルナリ又類聚三代格ニ延曆二十一年六月二十
 六日太政官符禁斷_レ私_レ交易狄土物事右被_レ右大臣宣_レ爾渡_レ島狄等來
 朝之日所_レ貢_レ方物例_レ以_レ雜_レ皮而_レ王臣諸家競_レ買_レ好皮所_レ殘_レ惡物以_レ擬_レ進
 官仍_レ先_レ下_レ符禁_レ制已_レ久而_レ出_レ羽國司寬_レ縱_レ曾_レ不_レ遵_レ奉爲_レ吏之道豈_レ合_レ如
 此自_レ今以後嚴_レ加_二禁斷如_レ違_レ此制必_レ處_レ重_レ科事緣_レ勅語_レ不得_レ重_レ犯ト云
 フハ先_レ下_レ符禁_レ制已_レ久トアレバ此_レ合_レハ今_ニ始_レレルニア_レラザルナ
 リ四裔ノ來_レ貢ハ常_ニ交_レ市ヲモ兼_レ子タルヨリ其_レ間自_レラ弊_レ習ヲ生
 ズルモノアリ故_ニ再_レ比_レ此制ヲ設_レケラレシナルベシ

○弘仁格式

○嵯峨天皇_{弟五十代}本邦格式ノ撰_レ此朝ニ創_レリ紀綱秩_レ然政_レ令見_レル
 ベキモノアリ蓋_レシ格式ノ商政ニ關_レスルモノヲ設_レケ頗_レル貿易ノ
 規矩ヲモ立_レラレシナルベシ然_レトモ此書ハ夙_レク亡_レビテ復_レ世ニ傳
 ハルモノアラザレハ今_レ其事ヲ知_レルニ由_レシナキナリ日本後紀ニ

○麥爲勸之禁

弘仁二年四月丁丑、勸麥爲勸禁制久矣、今聞京邑百姓未秋之前、沽之給急計其所得、倍於收實利、苟利民、何勞禁制、自今以後、永聽賣買、ト云フハ、饑ニ民食ヲ豐ナラシメンガ爲メ、天平勝寶三年此禁制アリシヲ、此時緩メシモノニ似タリ、又類聚三代格、弘仁十年六月二日、太政官符、禁斷賣買麥、勸事、右去天平勝寶三年三月十四日、格爾、大小麥寔能助夏乏、愚痴百姓不慮後欠、頓勸青菟徒爲沽失、自今以後、堅固禁斷、若有違犯、必科重罪、又太政官去大同三年七月十三日、騰勅符、爾、如聞富豪之輩、不顧憲式、無賴之民、尙暗法令、賣麥恣食、積習爲常、不革前失、依法科處、所司容隱、隨狀貶黜、又太政官今年三月十四日、下左右京職五畿內符、爾、去年不登、百姓食乏、至于夏時、必有飢饉、救飢之儲不可不備、職國承知、依件禁斷者、今被大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣、宣爾、奉勅所在之官、恣制無顧、愚暗之民、忍法有犯、既違朝制、忽失民賴、靜論其弊、深

廣字未詳恐衍

伏至切
切但伏過度也
ト見

乖濟民、又或民寄事、生刈其好、偏計少直、不顧多損、凡是播蒔之時、不圖地膏生臥之日、猶致此費、宜官長自臨、時檢校示、以此旨、莫致後損、若有違犯、并播種乖宜者、所由官司、隨事貶考、違犯人、依法推決、トアルハ、民食ヲ贍サン爲ニ、再ビ青苗ノ賣買ヲ制セラシモノニテ、爾後續日本後紀、承和六年十月丙辰、制大小兩麥耕種勞少、而夏月早熟、與急力多、若不刈青苗、令其成熟、貧賤之民、將療飢、屢下禁制、不聽爲、而累年奢侈、俗怙青苗、以飼馬、庶民之愚、利得直、以暫用、積習至今、不畏憲法、宜令左右京五畿內諸國、不得更然、其百姓不改、悛及所容、繼准大同三年格、隨狀科處、ト云フコト見ユ、曩ニ其禁ヲ解キ、後更ニ此制アリ、一張一弛、以テ時宜ニ從フモノナリ、日本後紀、弘仁六年三月辛卯、勅、軍用之要、以馬爲先、今聞權貴之家、富豪之輩、通使於邊邑、求馬於夷狄、部內由其不肅、兵馬取以闕乏、宜依延曆六年格、禁買陸奧出羽兩國馬、若有犯違、置以嚴科、物即沒官、但馱馬

○禁買與羽馬

之色不在禁限ト云フハ權貴豪富人ヲ邊陲ニ遣リ馬匹ヲ買コト
 アルヲ制セラレシナリ是ニ因テ想見レバ獨リ馬匹ノミナラズ
 財貨ヲ携帶シテ四方ニ往來シ其商利ニ從事スルモノ蓋シ亦少
 カラザリシナラン

○米價

案ズルニ日本後紀ニ大同元年九月壬子封左右京山崎津難
 波津酒家饑以水旱成災穀米騰躍也ト云フハ五月己巳是日
 勅今聞頻年不登民食惟乏トアル是ナリ又四年閏二月庚辰米
 價已貴懸倍往年依舊給錢事乖隨時又弘仁三年六月壬寅京
 中米貴出官倉米以減價糶貧民ト云フ往時凶年饑歲ヲ記ス
 モノ頗ル多キニ居レリ今其原委ヲ詳ニセズト雖モ或ハ轉
 漕梗塞シテ物貨殆ト一方ニ偏シ都鄙相通ヲ得ザルニ在ル
 モノ蓋シ其半ニ居ルナラン

○修和田泊

日本後紀弘仁三年六月辛卯遣使修大輪田泊ト云フ大輪田

和名類聚抄ニ
 泊ヲ度末利ト
 訓ス止也地元
 錄云雅州有百
 頃泊岐州有荷
 池泊今案播磨
 國輪田泊此類
 也

續日本後紀
 承和七年九月
 丁亥太宰府言
 對馬國司言傳
 聞新羅船能渡
 波行望請新羅
 船六隻之中分
 給一雙曉之類
 案三代格ニ遣
 唐使所乘之新
 羅船於府前

ハ攝津國八部郡ニ在リ今ノ兵庫港是ナリ類聚國史ニ天長
 八年四月戊子太政官符應定造大輪田泊使遷替年限ト見ヘ
 テ案ヨリ京攝ノ要港都鄙ノ官道ナルヲ以テ廷議專ラ修築ヲ
 加ヘラレ造大輪田泊使ヲモ置レシナリ續日本後紀ニ承和
 三年五月丙辰夜暴大風暴雨交切折樹廢屋城中人家不壞者
 希斯時入唐使船寄宿攝津國輪田泊トアリテ當時外客モ多
 クコニ投錨セシナリ又日本後紀大同元年五月丁丑勅備
 後安藝長門筑前驛館本備蕃客瓦葺粉壁頃年百姓疲弊修造
 難堪或蕃客入朝者便從海路其破損者農間修理トアレバ古
 來外人往來ハ陸路ヲ取ラレシナリ此比ヨリ海程ヲ用ヒシナ
 リ日本後紀延曆十八年五月丙辰前遣渤海使外從五位下內
 藏宿禰賀茂麻呂等言歸鄉之日海中夜暗東西望不識所着
 于時遠有火光尋逐其光忽到島濱訪之是隱岐國智夫郡其處

○商船往來

令傳彼標是尤
主松之所掌者
也ト云フハ當
時新羅船ハ航
海ヲ巧ミニス
ルモノニ似タ
リ

○造浮橋布
施屋蓋渡船

菟懸泥赴。山
崎の橋ハ今の
大浦ナリ山城
より攝津への
道路の橋ナリ
土佐日記山崎
の橋見ゆうれ
しきとかきり
なし又、附日本
後紀嘉祥元年
八月辛卯洪水
浩々人畜流損
何陽橋斷絶僅
殘六間云云山

無有人居、或云比奈麻治比賣神、常有靈驗、商賈之輩、漂宕海中、必揚火光、賴之得全者、不可勝數、神之祐助、良可喜報、伏望奉預幣例許之、マタ是ヨリ先キ續日本紀、天平神護元年二月乙亥、勅淡路國守云々、又聞諸人等、詐稱商人、多向彼部、ト云フモ、此比商賈ノ沿海ヲ渡航セシテ知ルベシ、續日本紀、延暦元年七月、仰阿波、讚岐、伊豫、三國、令造山崎橋斷材、日本後紀、弘仁三年六月乙丑、遣使造攝津國長柄橋、マタ類聚三代格、承和二年六月廿九日、太政官符、應造浮橋布施屋並置渡船、事浮橋二處、駿河國富士河、相摸國鮎河、右二河、流水甚速、渡船多難、往還人馬損沒不少、仍造件橋、加增渡船十六艘、尾張、美濃、兩國、堺墨俣河四艘、元二艘、今尾張國草津渡三艘、元一艘、今參河國飽海矢作兩河、加三艘、遠江、駿河、兩國、堺大井河四艘、元二艘、今駿河國阿倍河三艘、元一艘、今下總國太日河四艘、元二艘、今武藏國

崎ノ橋モ河陽
橋ト云ヒシナ
リ
鮎川ハ相摸川
太日河ハ刀部
川ナリ
古瀬河今考フ
ヘカラス
古瀬河改ハ右
瀬河又石瀬河
ニ作レリ

古瀬河三艘、元一艘、今武藏、下總、兩國等、堺住田河四艘、元二艘、右河等、崖岸廣遠、不得造橋、仍增件船、又布施屋二處、右造立美濃、尾張、兩國、堺墨俣河、左右邊、以前被從二位行大納言兼皇太子、傳藤原朝臣三守、宣備、奉勅、如聞、件等河、東海、東山、兩道、之要路也、或渡船少數、或橋梁不備、因玆、貢調、擔夫等、來集河邊、累日、經旬、不得渡遠、彼此相爭、常事、鬪亂、身命、被害、官物、流失、宜下知、諸國、預、大安寺、僧傳、燈住位、僧忠一、依、件、令、修造、講讀、師、國司、相共、檢校、但、渡船者、以、正稅、買備之、浮橋、并、布施屋、料、以、救急、稻充之、一作之、後、講讀、師、國司、以、同色、稻、相、續、修理、不得、令、損失、是ヨリ、後、三代、實錄、仁壽三年九月己卯、遠江國、奏言、廣瀬河、舊有郵船二艘、而今水濶流急、不由利涉、公私行人、擁滯、岸上、請、更加置二艘、以防羈旅之難、許之、トアルハ、亦以テ、道路、開通ノ、便、ヲ圖ルモノニシテ、運輸ノ、勞、ヲ省ケルコト、察スベキナリ、
行基菩薩

行狀記ニ布施屋九所橋六所云々建立シテ諸國ノ群類ヲ救
 ヒ給フトアリテ布施屋ハ當時郵亭種々ノ地方ニ於テ旅客
 ヲ待遇スルカ爲ニ設ケシモノナリ太平記ニ旅僧カ武藏野
 ヲ過ルト云フ條ニ接待所トアルモ布施屋ノコトナルベシ
 又後日本紀ニ延暦八年四月辛酉美濃參川等國去年五穀不
 稔饑餓者衆難加賑恤不堪自存於是遣使開倉賑濟時價糶
 與百姓其價物者收貯國庫至秋收留成額稻名曰救急使
 其國郡司及郡官之民不令得交易ト云フハ救急稻ノ大旨ナリ

○強買不止市
 慮荒廢

○強買不止市
 律。強市者笞
 五十。謂以威
 若力強買物者

○仁明天皇第五十類聚三代格ニ承和元年十二月二十一日太政
 官符應勘移補左右近衛左右兵衛市廛百姓及決罰主殿主鷹織部
 等寮司雜色駟使並犬飼餌取等事右得左京職解爾件等百姓多任
 衛府住市邊強買不止毆冤無絕又主殿主鷹織部等寮司雜色駟使
 惡行既甚罵凌官人因是市廛荒廢公事難堪望請衛府移送本府以
 從解却自餘雜色更不經本司隨犯決罰然則暴亂永絕市廛安業者
 右大臣宣依請右京亦宜准此ト云フ市廛ハ東西ノ市廛ナリ當時
 市人ノ軍人ニ相交リ威力ヲ張リ濫行ヲ逞フスルモノナ停メ賣
 買ノ衰亡ニ至ラントセシナリ制セラレシナリ續日本後紀承和六

○宮市
 神皇正統記ハ
 北畠准后親房
 撰

續日本後紀。
 承和元年二月
 甲午今夜三品
 明日香親王薨
 壽桓武天皇第
 七皇子也親王
 天資質朴不尚
 浮華弘仁年中
 世風奢麗王公
 貴人頗好鮮衣
 親王獨至夏日
 朝衣再三游罷
 或費抑極上走
 馬以支費用

年十月癸酉是日建禮門前張立三帳置雜唐物內藏寮官人及內侍
 等交易名曰宮市トアリ神皇正統記ニモ我國の盛なりしとは
 此の比ろおひにやありけむ遣唐使も常にあり歸朝の後建禮
 門前にして彼の國の寶物を市をたて、群臣に賜はすことも
 ありきトアル是ナリ三善清行封事ニ仁明天皇即位尤好奢靡彫
 文刻縷錦繡綺組傷農事害女功者朝製夕改日變月悛後房內寢之
 飭飡宴調樂之儲麗靡煥爛冠絕古今府帑由是空賦歛爲之滋起於
 是天下之費二分而一トアルナ參勘スルニ清行慷慨悲憤ノ餘ニ
 出デ其言或ハ抑揚ニ過ルナシトセザルモ亦上下外飭是競フノ
 風ハ多カリシナラン然レバ當時輸入物貨ノ如キモ亦必ズ前古ニ
 例ナキ需途ヲ開キ其增額ヲ來セシモノアラン續日本後紀嘉祥
 二年八月己酉太宰府馳驛言上大唐商人五十三人多賚貨物駕船
 一艘來着ト云フ是正シク海外商船ノ來航セシモノ、史ニ載ス

ル始メトス是ヨリ以下商舶來往ノコト常ニ絶ヘザルニ至レリ
 日本後紀大同三年十一月戊子勅如聞大嘗會之雜樂伎人
 等專乖朝憲以唐物爲飭又此頃屢諸山陵ニ唐物ヲ奉獻スル
 コトアルモ輸入物貨ノ多キ一證ナリ

又續日本後紀ニ承和九年十月庚戌西市司言依承和二年九月符
 旨錦綉絹調布絲綿紵染物縫衣續麻針櫛染革帶幡油土器絹冠牛
 塵等類興販於西市而東市論云檢承和七年四月符依弘仁十二年
 四月式件等色物兩市共可興販不可更廢今百姓悉遷於東交易件
 物仍市塵既空公事闕怠者去承和二年彼此中折施行既訖而承和
 七年四月班式之日遺漏不改勅宜依前格不可據式ト云フヲ見レ
 バ既ニ弘仁承和ノ始ニアリテモ屢東西二市商品ノコトヲ令セ
 ラレシモノ亦知ラレタリ

延曆置都ノ日東ヲ洛陽ト云ヒ西ヲ長安ト云フ東西市域其

○東西二市商
品

本朝文粹ハ藤
 原明衡撰ム
 尺素往來ニ西
 京近來幾田島
 人家全減少ト
 云フコトモア
 リテ後世ニ至
 リテハ亦聞ヨ
 リ然ルナリ

○新羅人貿易
 輸或ハ較ニ作
 レリ

中ニ在リ兩市司之ヲ掌レリ然モ東市ハ常ニ盛ニ西市ハ終
 ニ振ハズ今貨物ノ偏廢セルヲ停ル如キ亦以テ其衰兆ヲ視
 ルニ足ルモノアルカ本朝文粹池亭記ニ予二十餘年以來歷
 見東西二京西京人家漸稀殆幾幽墟矣人者有去無來屋者有
 壞無造ト云フ此記ハ天元五年十月慶保胤ガ撰ム所ニシテ
 當時ヲ距ル僅カニ百餘年ノ後ニアルノミ是ニ因テ推考ス
 ルニ西京ノ衰廢亦一日ニアラザルナリ

續日本後紀ニ承和八年二月戊辰太政官仰太宰府云新羅人張室
 高去年十二月進馬鞭等室高是爲他臣敢輒致貢稽之舊章不合物
 宜以禮陶閑早從返却其隨身物者任聽民間令得交關但莫令人
 違失沾價競傾家資亦加優恤給程糧並依承前之例ト云フハ新羅
 人隨身ノ物貨ヲシテ民間ノ交易ヲ許サレシナリ又續日本後紀
 承和九年正月乙巳新羅人季貞等三十人到着筑紫大津云々是日

三代實錄。貞觀十二年九月十五日宣潤清長馬昇等才長於造瓦預陸與國修理府新造瓦等今長其道者相從傳習

筑前國守文室朝臣宮田麻呂取季忠等所賚雜物其詞云室高存日爲買唐國貨物以絶付贈可報獲物其數不勘正今室高死無由得寶物因取室高使所賚物者縱境外之人爲愛土毛到來我境須傾彼情令得其所而奪廻易之便絶商賈之權府司不加勘嚴肆令辨兼非失買客之資深表無王憲之制トアルヲ以テスレバ張室高ハ當時邦人ノ爲メニ唐物ノ買收等ヲ圖リシ商人ナリ類聚國史ニ承和九年八月丙子太宰大貳從四位上藤原朝臣衛上奏四條起請一曰新羅朝貢其來尙矣而起自聖武皇帝之代迄于聖朝不用舊例常懷舒心苞茅不貢寄事商賈窺國消息方今民窮食乏若不虞何用防支望請新羅國人一切禁斷不入境內報曰德澤泊遠外蕃歸化專禁入境事似不仁宜比干流來充糧放還商賈之輩飛帆來着所賚之物任聽民間令得廻易速放却マタ續日本後紀承和二年三月太宰府ノ上言ニ頻年新羅商人來窺不絶非置防人何備非常又是ヨリ後三

○市司官印

代實錄ニ貞觀十二年二月十二日甲午如聞新羅商船時到彼縱託事買販來爲侵暴若無具備恐慢藏又對馬島司云々潤清等久事交關橋寄此地能候物色知我無備トモアリテ彼國ノ商賈カ常ニ西海地方ニ往來セシコト多キヲ知ルベシ潤清ハ新羅人ニシテ後陸奥國ニ安置セラレシナリ

拍茶抄ハ左府寶藏ノ撰ム所寶藏ハ足利院政時代ノ人ナリ

○准估價表直ニ

續日本後紀ニ嘉祥元年七月己未勅准西市司賜東市印一面ト云フ拾茶抄ニ諸司ノ印ハ方二寸二分トアルモノ是ナリ爾後三代實錄ニ貞觀三年三月六日辛己新鑄銅印一面賜東市司ト云フハ前印既ニ廢壞等ニ係ルヲ以テ然ル乎將又別ニ故アルカ續日本後紀ニ嘉祥元年七月丙辰災于東西二京凡十一家木工寮倉東市司樓云々此時市司ハ延焦セシナリ又類聚國史嘉祥二年四月戊子勅去承和七年定諸國穀直訖而今如聞穀價踴貴錢幣差賤而猶守舊程不隨時宜改前直一依當時

○禁市人仕諸司家

仍須隨陸海之貢輸取定數於京師准其估價以爲穀直自今以後立爲恒例ト云フハ同書ニ嘉祥二年春正月丙辰廢朝賀緣去年天下有洪水害秋稼不登也トアリテ此時穀價ノ騰貴セシハ前年ノ大水ニ因由スルモノ多キガ如シ今之ヲ考ルニ承和七年ヨリ嘉祥二年ニ至ルマデ凡ソ十年ノ間ニアリテハ穀價常ニ平カナリシヲ此時非常ノ不登ニヨリ漸ク差違ヲ生セシカバ乃チ之レガ時價ヲ撰ミ豫定ノ沽價ヲモ更メシナラン以テ古昔邦内平穩ノ世ニアリテハ物價ノ變遷尤モ少キヲ知ルベキナリ

○清和天皇第六代第十 此朝右大臣藤原氏宗等勅ヲ奉シテ貞觀格式ヲ撰マレシガ其書ハ既ニ亡ビタリ弘仁ノ時定メラレシ商業ノ格式モ取捨潤飭セラレシコトアルベキモ今ニシテ其蹟ノ知ル由ナキヲ憾ルノミ又類聚三代格ニ貞觀六年九月四日太政官符應禁斷市籍人仕諸司諸家事右得左京職解爾凡在市籍者市

○通錢

司所統攝而市人等屬仕王臣家不遵本司事加召勘則稱高家從者要結衆類凌轢官人違亂之甚無由禁止望請施嚴制懲將來者右大臣奉勅朝家之制別置市籍者專事商賈不預他業而今如聞去就任意好仕勢家勢家不加簡閱竊自容遇以威權擅其紆濫既念司存似無憲法是而不肅豈云善政宜一功禁斷勿令更然諸司諸院及諸家知而不糺責其知事者科違勅罪四位以下無位以上如有隱仕者同科違勅罪仍須錄其犯過具狀申官但市人於職家決杖八十右京職亦准此ト云フハ此比市人ノ勢家ニ托シ威力ヲ假テ既ニ市司ノ令ヲ奉セズ或ハ紆濫ニ及ブテ以テ今之ヲ制セラレシナリ

三代實錄貞觀九年五月八日丙午勅而今畿外諸國富豪之輩不慎格旨猶事貯積聞其由緒非充資用徒奢富強之名爭聚集之夥邊鄙既無通用之理朝家永增鑄作之勞靜論其費誠須懲革宜令伊賀伊勢志摩近江美濃若狹越前丹波丹後但馬山陽

○撰錢
開悉八開誤

南海太宰府國府等更施嚴制一切禁斷ト見ユレバ此比ニモ通
 錢ノ使用ハ尤多カリシナリ三代實錄貞觀七年六月十日已
 未禁京畿及近江國賣買之輩擇弃惡錢曰弘仁十一年六月九
 日下知大藏省曰鑄錢司所進新錢雖文字頗不明而不失體勢
 亦有小疵行用無妨宜猶檢納而間愚有不悟此旨專任己心擇
 弃不受或稱文字不全計十嫌二三或號輪郭有欲舉百欠八九
 是以要升米者飢口難餬買屯綿者寒身不暖宜牒于路頭嚴
 加禁止若有乖違隨即決答又貞觀十四年九月二十二日壬辰
 新鑄貞觀錢文字破滅輪郭無全凡在賣買嫌弃大半譴責鑄錢
 司令分明鑄作ト云フヲ以テスレバ此頃鑄錢ノ全キヲ得ザ
 ルコト亦既ニ知ラレタリ

○米價

三代實錄貞觀八年二月十六日壬戌左右京白米一升直錢四十
 文前二十六文今加十四文是歲穀價騰躍東西津頭白米一斛七貫

○糧官米

二百文黑米四貫百文由是增定京邑估價トアリテ精米一升ノ正
 價廿六文更ニ十四文ヲ加フト云フハ亦格外ノ高價額ナリ而シ
 テ東西津頭精米一斛七貫二百文トスレバ一升ヲシテ七十二文
 ニ充ツ踊躍實ニ甚シト謂フベシ又三代實錄貞觀八年閏三月丙
 午朔是日召進京城貧窮者於鴨河邊以新錢五萬文飯二千五百畧
 頒給焉ト云フモ此時ノコトニシテ京中頗ル饑餓ニ困ミシナリ又
 類聚國史貞觀九年四月二十二日辛卯東西市始置常平所出官
 米而糶之米一升直新錢八文京邑之人來買者如雲是時穀價騰躍
 內外飢饉米一斛直新錢一千四百由是官糶以救俗弊焉又三代實
 錄貞觀九年二月十七日丁亥承去年之災早京邑飢餓詔以米三百
 二十石糶鹽三十五斛新錢一百貫賑恤東西京乏絕之人此時藤原
 良相抗表ニ窺聞比來州郡京邑承去年旱儉之弊人用不瞻穀價登
 躍加以諸國入少百官俸乏帑藏已空歲用不支トアルヲ以テ見レ

三代實錄貞觀元年四月二十八日癸丑詔云々宜改鑄新錢勅改更下新錢勅此對通流

歐文曰饑饉神
一以舊之
十即舊之與新
並令雜用

○禁鑄銅器
上
下
易
防國山口近
傍ニチニセシ
ト云フ字ノ

此年ノ飢饉ハ前年ノ旱損ニ在ルナリ又當時舊新二錢並用シ
テ新錢ノ一ヲ以テ舊錢ノ十二充ルモノナレバ念其一升ノ米價
ハ舊錢ノ八十文ナリ又一斛ノ米價ハ新錢一千四百即千一貫四
百文ナレバ一升ノ價ハ舊錢ノ一百四十文ナリ又三代實錄貞觀
九年二月十二日癸未是年内外儉乏人庶阻飢就中畿内特甚盜賊
群起或遮道路而脅人掠奪或窺屋舍而行火入盜仍下知國司每鄉
結保督察奸盜ト云フヲ以テ此時ノコトヲ察スレバ連年ノ凶歉
京畿群賊橫行シテ生理道塞リ商賈其利ヲ失フコトアリシナリ
類聚三代格貞觀十八年三月二十七日太政官符一應停止鑄
造銅器交易民間事右得探長門國銅使鑄錢司判官弓削秋佐
解狀爾國須探得部内之銅全送納鑄錢司而檢校鍊畧無勤送
納於是百姓任意私採鑄造雜器只事商賈積習爲常難輒可改
例進欠少職此之由望請殊下嚴制將從停止若有奸犯之輩國

○禁材木切
狹及東殿法

地アリチニセ
シハ鑄錢司
ニシテ昔時其
司ヲ置レシ地
ナルベシト予
明治十五年周
朝ニ遊ヒシ日
赤尾關區長松
田敏樹氏ノ一
語ナリキ案ス
ルニ續日本後
紀承和十四年
二月乙未周防
國鑄錢司實遷
立司家東方滋
上山者許之途
伐樹木也ト云
フハ此地ナル
キカ將然ラ
サルカ

吏注名官上郡司並百姓浪人等隨所犯多少決杖以下罪此時
己ニ鑄錢司ヲ周防ニ置キ山陽山陰南海西海諸州ヲ探銅ヲ
此地ニ取リ以テ其料ニ供ス而シテ東北未ダ產鑛少ナクシ
テ常ニ鑄材ノ不足ヲ告ルモノアリ故ニ今此議アリテ銅器
賣買ノコトヲ禁ズルニ至レリ是ヨリ先キ三代實錄貞觀元
年二月廿五日辛亥以長門國醫師從八位下海部男種麻呂爲
探銅使詔三箇年内所進銅鉛年別各足三千斤者須借授五位
其後三年內不減此數者隨爲眞トモ見ヘテ當時朝旨探銅ヲ
切望サレシコト察スベシ
是ヨリ先キ三代實錄ニ貞觀七年九月十五日癸巳太政官下知彈
正臺左右京職山城攝津伊賀近江丹波播磨等國禁材木短狹及定
載車法曰步板簀子榻榻長短厚薄去延曆十五年初立制法於是年
月遷改久怱格意仍弘仁四年天長八年嘉祥三年科罪兼可役之狀

獲字悉後誤

下知己訖而採材倫輩爲貪潤澤伐斫一本欲得百利因茲裁長要短而任意爲漸嫌厚求薄而生平不輟公途私用常多闕乏頻施嚴制未聞懲肅雖是愚民之可責豈非國吏之解體宜早遵行無有乖違沒物科罪一如格但中間所不法材者承制之後百二十日內悉令賣竟其車荷者量材長短先有制法今奉不法既貴輕薄運載之法何應一同須相樁三十二材步板八板篋子十枚以此爲定獲舊之後改從恒例不得因此更令濫吹官相承嚴加督察勝示山口及津以分明令知又元慶五年十一月九日癸丑下知左京職山城國司減定材木直車賃人功等數ト云フハ凡ソ古制賣買ノ物品皆定價アリ漫ニ之ヲ増損スルヲ得ザルモノトス木材ノ如キ車載ノ如キ各其法アリテ皆然ヲザルハナシ是ニ於テ奸民動モスレバ之カ量額ヲ左右シ以テ私利ヲ逞フスルモノアリ亦止ムヲ得ザルノ弊俗ナリ又三代實錄ニ貞觀十四年五月二十日己丑內藏寮與渤海客廻易貨物

渤海人貿易

二十一日庚寅聽京師人與渤海客交關二十三日辛卯聽諸市人與客徒私相市易是日官錢四十萬賜渤海國使等乃喚集市廛人賣與客徒此間土物トアリ渤海ハ古來獸皮骨角ノ類ヲ以テ特產トス今茲ニ貿易スルモノ蓋シ此等ノ品種ナラン

○禁以貴直就買所物

○陽成天皇第七代五十三代實錄元慶六年十一月二十八日丙申下符加賀國安置渤海客於便處依例供給勤加優遇又禁制私廻易客徒所齎貨物ト云フハ元慶六年十一月廿七日乙未加賀國馳驛言今月十四日渤海國入觀使裴頰等一百五人着岸トアレバ正シク其國ノ使節ニシテ固ヨリ貿易ヲ以テ來航スルモノニアラズ而シテ當時隣好來往ノ間皆通商ヲ兼タルナリ故ニ貿易ノ例ニ準シ官先ヅ之カ民間ノ潛賣ヲ禁ゼラレシナリ

○光孝天皇第八代五十三代實錄仁和元年十月二十日辛未是日大唐商賣人着太宰府下知府司禁王臣家使及管内吏民私以貴直競買

他物ト云フハ弘仁承和以降上下奢侈海外ノ物貨ヲ弄フノ風漸ク朝野ニ浸入シ民情之ヲ競望シテ止マズ或ハ貿易ノ秩序ヲ紊スニ至ルモノアリ既ニ禁令ヲ發シテ尙ホ未ダ其跡ヲ絶ツ能ハズ故ニ今此例ヲ再施セラレシナリ

○禁買唐物

○醍醐天皇第十代類聚三代格延喜三年八月一日太政官府應禁遏諸使越關私買唐物事右大臣宣頃年如聞唐人商舶來着之時諸院諸官諸王臣家等使未到之前遣使爭買又內富豪之輩心愛遠物踊直貿易因茲貨物價直定准不平是則關司不慥勘過府吏簡略檢察之所致也律曰官司未交易之前私共蕃人交易者准盜論罪止徒三年令曰官司未交易之前不得私共諸蕃交易爲人糾獲者二分其物一分賞糾人一分沒官者府司須因准法條慎其檢校而寬縱不行令人狎侮宜更下知公家未交易之間嚴加禁遏勿復乖違若猶犯制者沒物料罪曾不寬宥ト云フハ貞觀儀式ニ太宰府言上商客着岸

○貿易順序

之由爲令檢頒貨并行和市事差藏人一人出納一人下遣或不便使雜色或藏人所使等檢頒唐物參上厥後更遣出納一人令辨賜直トアリテ是官家ニ於テ蕃人ノ物貨ヲ交易スルノ例ナリ當時豪富ノ輩異邦ノ物品ヲ權買シテ其意ヲ得シモノ多カルベク外品潛商ノ禁其來ル最久シク貿易射利ノ弊亦一日ニアザルチ知ルニ足レリ而シテ此朝ニハ弘仁貞觀ノ二式ヲ增損刊修セラレ賣買ノ法令一層審詳ヲ加ヘ東西市廛ノ規範モ完全整備ニ至リシナリ乃チ延喜ノ彈正式ヲ案ズルニ凡市人集入市召市司令市廛靜定每肆巡行糾彈非違謂諸錢、綾、紵、若、罽、不、盈、一、尺、九、寸、長、不、盈、六、丈、又、一、物、者、有、行、濫、及、橫、刀、鞍、等、不、題、繫、造、者、姓、名、之、上、ト云フハ彈正ノ職員市中ヲ巡行シ賣品ノ式ニ違フチ查驗スルナリ又凡市皆每廛立勝題號各依其廛隨色交關不得彼此就便違越ト云フハ市廛ハ皆飲食服飾ノ類ヲ區分シ各々招牌ヲ掲ゲ其肆頭ニ就テ交易セシムルナリ商者買者互ニ其便ヲ以テ此法

○延喜式

○市廛市廛

○每廛立勝

○結價

○賣買不和
 唐大典。凡賣
 買不和而推固
 云々推固專署
 其科固罰額固
 其中別指物直

○不得帶劔入
 市

ヲ擾ルベカラズトナリ又凡毎月勘造沽價帳三通送職職押署即以職印印之一通進官一通留職一通付司ト云フハ市司月別ニ市中上中下三等ノ物價ヲ撰ミ牒簿三部ヲ制シ之ヲ京職ニ進ム京職之ヲ太政官其他市司ニ送附スルナリ即チ令ニ示セル如ク官家ノ交易及ビ贖物ノ標準等ニ供スルナリ又凡賣買不和較固者市司追捉勘當ト云フハ賣買熟セズ賣品ヲ專署シ若クハ市場ヲ障害スルモノアルニ方リ市司ハ是ヲ捕捉シテ即チ其罪ヲ勘當セヨトナリ又凡商買之輩沽價之外若有妄增物直者不論陰贖登時見決ト云フハ前ニ舉ル京職ニ於テ撰ム所ノ沽價ノ外若シ故ナク其價ヲ增加賣買スルモノアレバ蔭位贖刑ノ者ヲ問ハズ常人ニ例シテ罪ヲ決行セヨトナリ又凡六衛府舍人等不得帶劔入市ト云フハ衛府ノ舍人ト雖モ市中ニ於テ刀劔ヲ帶携スルヲ聽ササルナリ軍人ノ威力ヲ制シ衆者ノ雜沓ヲ防クナリ又市人籍帳

○市町權前決
 罰罪人

○地子續

○德川幕府ノ
 時新ニ一事ヲ
 設ルニ際リ或
 ハ之ニ屬地ヲ
 附シ其費造ヲ
 補フモノアリ
 所謂贖賣所ノ
 附屬地ヲ神田
 其所ニ置クカ
 如キ蓋シ亦延
 壽市政ノ遺制
 ナルヘシ
 ○日本後紀
 弘仁三年三月

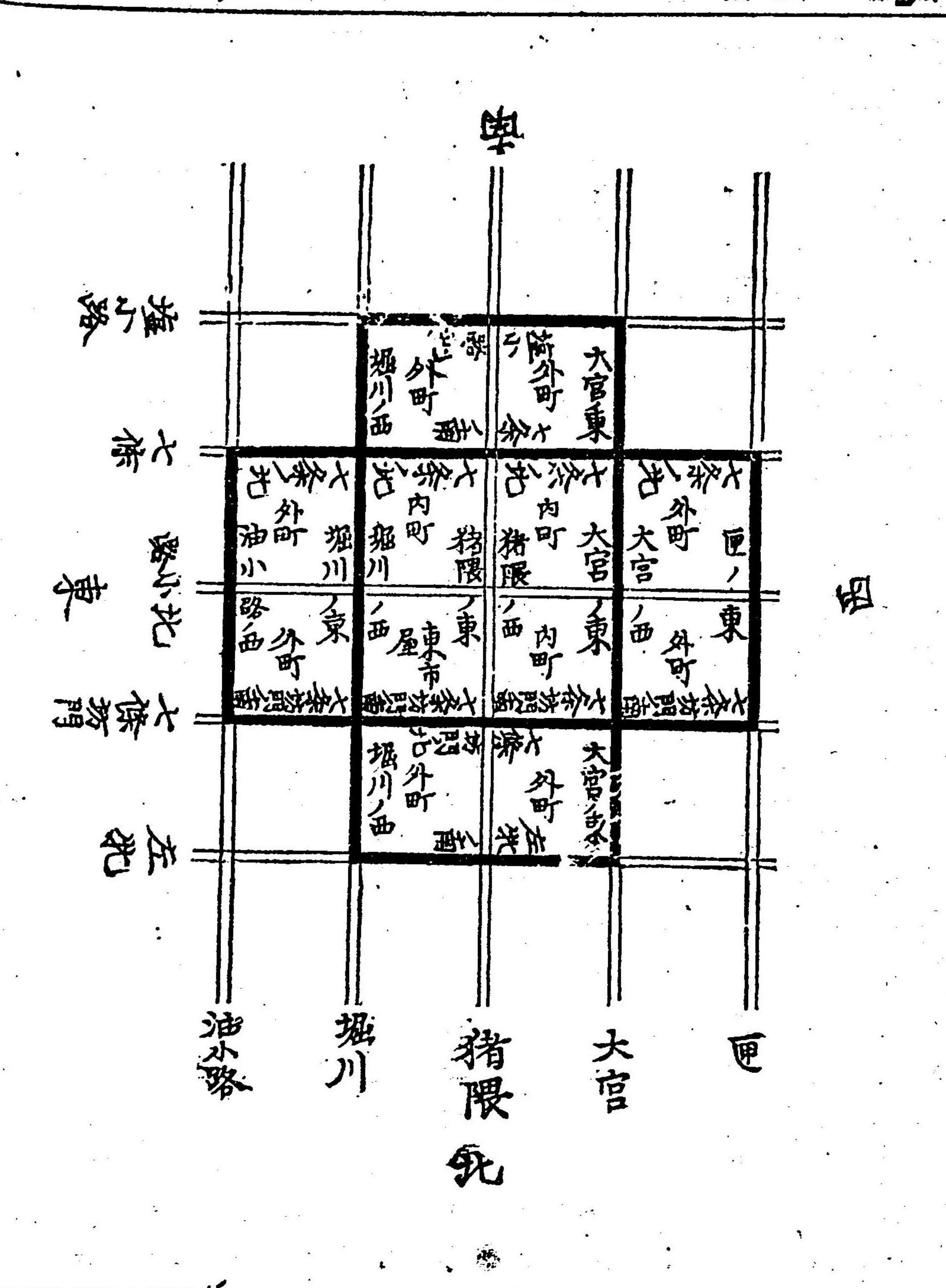
毎年造造ト云フハ戶令ニ凡戶籍ハ六年一造トアルコト常法ナレドモ市人ハ毎年改造スルナリ其變替ノ多カレバナルベシ又凡市裏有凌奪之輩者委任以上准狀散禁請裁判任以下扭禁隨犯決罰ト云フハ官吏ノ市中ニ在テ法令ヲ違犯シ若クハ賣品ヲ掠取スルモノアレバ奏判其官ニ從テ禁刑ヲ施スナリ又凡決罰罪人者官人與使相對樓前罰之ト云フハ市中ハ衆人會聚ノ地ナル故ニ罪人ヲ決罰シテ懲戒ニ充ルナリ

續日本後紀ニ承和九年七月辛亥是日掃獄免前年罪人又於東市樓前脫盜人銓各給糧放却ト云フ是ナリ又凡市町准市裏本司加勘糺ト云フハ市人ノ居住スル町中ハ市内ト均シク市司ノ勘當糺明シテ處分スル所ナリ又凡居住市町之輩除市籍人令進地子即以充市司廻四面泥塗道橋及當堀河等造料其用帳年終申送ト云フハ市人ニアラズシテ市町ニアルモ

巳未朝請司要
 劇傳米宛錢
 幟頭ハ冠物巾
 子ハ級日本紀
 考證格致原編
 引宗郭思勳論
 雲際朝惟實臣
 鐵鳥抄幅次用
 桐木黒漆爲巾
 子蓋於幟頭之
 内側脚三脚後
 運之脚實體服
 之而爲帽漸廢
 則天朝以絲葛
 爲幟頭巾子以
 爲官關元開始
 易以羅縵正式
 云凡除禮服并
 參議以上半臂

ノハ其住所ノ地子錢ヲ市司ニ収メ市場内外修造ノ諸費ニ充テ
 用帳ハ其用途ヲ合算シ歲末ニ具狀スルナリ又凡闕官要劇料充
 司中修理雜用ト云フモ又本司ノ諸費ニ充ルナリ本後紀トハ四
 年間二月庚辰勅前例特管劇官給三要劇錢准其官位多少有差ト云
 フ是ナリ官吏ノ事務繁忙ナルモニ特ニ服ハルノ料錢ナリ
 又凡毎月十五日以前集東市十六日以後集西市ト云フハ東西兩
 市ヲシテ十五日毎ニ分番ニ開カシムルナリ又東西市塵ノ目ヲ
 列スルニ東繩、羅、糸、錦、幟頭、巾子、縫衣、帶、紵、布、苧、木綿、櫛、針、沓、非、筆、墨
 丹、珠玉、藥、太刀、弓、箭、兵具、香、鞍、橋、鞍、鞆、障、泥、鞆、鐵、並、金器、漆、油、染、草
 米、木器、鹽、醬、索餅、心太、海、菓、子、蒜、干、魚、馬、生、魚、海、菜、ノ、五、十、一、塵、ハ
 東市ニ於テ開業スルモノトス又絹、錦、綾、糸、綿、紗、椽、帛、幟頭、縫衣、櫛
 帶、櫛、紵、調、布、糠、麻、櫛、針、非、雜、染、簀、笠、染、草、土、器、油、米、鹽、未、醬、索、餅、糖、心
 太、海、藻、菓、子、干、魚、生、魚、牛、ノ、三、十、三、塵、ハ、西、市、ニ、於、テ、販、鬻、ス、ル、所、ナ
 リ但此種類中ニ絹、雜、染、物、土、器、聽、通、賣、ト、ア、リ、テ、東、西、二、市、何、レ、ニ

五位以上機頭
 之外不得著羅
 非ハ草靴穿餅
 マガリ東鏡
 反ヒ類案仕
 宋ニ穿餅アリ
 心太ハ海菜海
 ハ昆布ノ類
 母ハ八角角五
 ノ類ハ葱ノ
 細類ハ合糖解
 ニ女袋衣也ト
 アリ非布ハ買
 布才器ハ今ノ
 醬油ノ類類ハ
 行ニ見ユ甘葛
 ノ類ナリ
 拾芥抄ニ記ス
 則京中街路ノ



○市門
 ○辨大宰府
 郡内米買

名稱ハ後世ノ
 モノニシテ當
 時此稱アルニ
 アラサルナリ
 今東市ノ舊址
 ヲ案スルニ並
 シ六條東本願
 寺ノ邊ナラン
 聖德太子ノ著
 ス京職令解及
 ヒ柳菴雜筆
 二南都所傳若
 ハ嵯峨片川某
 傳書ノ由ニテ
 此市圖ニ類ス
 ルモノヲ舉ケ
 更ニ精キヲ加
 ヘタレトモ實
 ハ未タ詳カナ
 ラス故ニ今之
 ノ抄ラス

モ販賣スルヲ得ラル、ナリ拾芥抄ニ東市屋七條坊門、市領十一
 町内町三町以上七條坊門南、七條北、大宮東、猪隈西、外町八町川左北、南、大宮
 坊門東、二町油小路西、堀川東、北、三町堀川西、大宮東、北、二町門南、七
 條北、大宮、二町トアルニ據リテ今試ニ其圖様ヲ制スル右ノ如シ
 市中ハ渾テ門ヲ設ク之ヲ市門ト云フ其開鎖ハ市司ノ掌ル所ト
 ス延喜式ニ市司執鑑二人ト云フ是ナリ市門ノコト白箸翁ノ傳
 ニ見ヘ又今昔物語ニ東ノ市門西ノ市門ノ名アリ又拾遺抄ニ空
 也上人ガ市門ニ和歌ヲ誌セシコトアリ
 扶桑零記ニ爲買經紙與僧平如同車到市交易之頃法師走來
 塞干車簾要望殘紙マタ江談抄ニ往代人多到市買物道明與
 妻同車到市買物トアルモ皆市中賣買ノコトヲ云フナリ
 雜式凡王臣家及諸商人船許出入太宰府郡内但不得自此擾勞百
 姓及糴米買馬若有違者依法科罪又凡王臣家使不得到對馬島私

○衛士仕丁
 巧不得商買

萬壽泥地。東
 市七條ノ北堀
 川ノ東ニアリ
 山城名勝志。
 市拾芥抄ニ
 西京圖在左女
 牛南御前西腰
 小路北池小路
 東
 白雲御佛ハ紀
 長谷雜撰ム
 今昔物語ハ字
 拾遺抄。市門
 にかきつけて
 待ける
 「ひさたひも
 南無阿彌陀佛
 といふ人の蓮

買眞珠擾亂百姓ト云フハ太宰府郡内ニ米粟ヲ糴シ馬匹ヲ買チ
 得ザラシメ對馬ノ沿海ニ眞珠ヲ買ヒ其利ヲ爭フヲ制セシナリ
 又左右京職ノ式令ニ凡京中衛士仕丁等坊不得商買但酒食不在
 此例トアルハ衛士仕丁等或遠邑遐陬ヨリ入京分番スルモノト
 薄給微祿奉仕スルモノアルヲ以テ費途ノ支ヘ難クシテマ、貧
 困ニ陥ルヨリ坊中渾テ商買ヲ禁ジ之ガ誘致ヲ防ギシナルベシ
 又僧尼令ニ凡僧尼等不可賣買但隨身品物便得賣買藥丹等聽着
 身ト云フハ僧尼ノ賣買ヲ禁ズルモノニシテ僧俗業ヲ俱ニシ其
 信憑ヲ失フヲ以テナリ
 三善清行ガ意見ニ况ヤ其國分僧少人皆是無慚之徒也蓄妻
 子營室家力耕商價ト云フ是僧侶ニテ商業ヲスルナリ
 又凡禁斷刈大小麥青苗爲馬菟賣買并桑棗木鞍橋ト云フ青苗桑
 棗ノ屬ヲ用ルヲ禁ズルハ物産ヲ損害セシメズ亦生民ノ衣食ヲ

○度量衡

のうへにのほらぬはなし」
元享釋書空也傳。天慶元年入王城於市。唐唱囉陀勸化人々呼爲市上人

○國司不得所部交關

朝野群載。對馬島中珍貨充溢。白銀船鑄真珠金漆之類長爲勸買
日本後紀。弘仁元年九月乙丑。按捕者除桑葉之外不備。桑葉心通用

○市人服制

中央ハイタシ
三轉行封事。其制則市人於都門外皆買去トアリテ市人ハ商人ナリ
和名類聚鈔。車蓋、俗車屋形、夜加太
京師令。八梁履借充撰ム

○京師人員

瞻スニアルモノナリ日本紀畧ニ延曆十一年六月戊午禁桑棗鞍橋但舊者申所司燒印用之トアリ古例既ニ然ルナリ雜式ニ凡度量權衡者官私悉用大但測晷景合湯藥則用小者其度以六尺爲步以外如令ト云フハ度量權衡ハ元來大小ノ二種アリシチ自今其種類ニヨリ大小區別シテ用ヒヨトナリ又凡國司一任之内不得所部交關但聽買衣食ト云フハ國司在任中ハ部内ニ於テ衣食ノ外交易ヲ得ザルモノニテ預メ其制ヲ設ケ之ガ不肅ヲ制スルナリ
續日本紀天平勝寶六年九月又覽去天平七年格國司等所部交關運物無限者禁斷既訖然猶不肯承行貪濁成俗朕之股肱豈合如此自今以後更有違犯依法科罪不復矜宥續日本後紀承和八年八月丙子太宰府上奏云々交替務了未得解由五位之徒寄事格旨留住管内常好農商侵漁百姓ト云フモ當時國司ノ任務動モスレバ商利ヲ圖ルノ弊アリシナリ

凡蕃客來朝應交關者丞錄吏生率藏部價長等赴客館與内藏寮共關詰録色目申官其價物東純一百疋調綿一千屯錢卅貫文若有殘者同申返上ト云フハ當時官家ニ於テ海外來舶ノ物貨ヲ貿易スル例規ナリ或ハ各國使臣ノ商舶ニ駕シテ渡航スルモノアルヲ以テ來朝ト稱スルガ如キモ其實ハ皆貿易ニ屬スルナリ又彈正式ニ凡市人不得以白綾夾纈等爲車屋形裏以雜楷色爲從者衣以綵色編竹成文爲簾及將從四人以上ト云ハ市人ノ服制及ビ其從者ノ分限ヲ定ルモノナリ而シテ本邦百般ノ制度延喜ノ式ヨリ盛ナルハナク又延喜ノ式ヨリ備ハラザルハナシ當時海内靜肅後世稱シテ治蹟最一トス要スルニ上下文恬或ハ太平ヲ裝フノ弊ナキニアラズト雖モ其治世ノ景象亦想フベシ然レバ當時海内四方ノ市場モ交市ノ業大ニ開グルモノアリ况ヤ平安京中ノ繁賑已ニ觀ルベク貿易ノ事亦察スベキナリ

和名類聚抄ハ
 源順撰ム
 枕草紙ニ展市、
 飾磨市、樺市、
 家よりの市、飛
 鳥市アリ春曙
 抄ニ展市飛鳥
 市樺市ハ大和
 ニ屬シ飾磨市
 ハ播磨ニ屬シ
 ちよりの市ハ
 未動トアリ
 和州新藤崎
 考。藤上郡大
 宗寺村の南に
 展市社あり
 其舊社也とい

○伊知久良

案ズルニ京職令解ニ中世都下ノ人員ヲ考フルモノアリ京
 中凡ソ五百六十八町ニシテ内市町十二京職ノ占其法一町
 三十戸トス東西二京乃チ三萬五千四百五十六戸ニシテ一
 戸概シテ十口トスレバ十七萬七千二百八十口ナリト云へ
 リ今京外各地及ビ諸州在京ノ旅客等ヲ合算スレバ蓋シニ
 十萬口左右ニアルベシ是當時都府人員ノ概計ニシテ商賈
 ハ是等ノ需求ニ對シ物貨ヲ進退スルモノナレバ或ハ遠ク
 孤帆ヲ懸テ千里ノ波濤ヲモ試ムベク或ハ獨リ行季ヲ負ヒ
 深ク外境ヲモ渉ルベク其賣買ノコトヲ圖リ鉄細ノ利ヲ爭
 フモノ紛々タルコト昔時トイヘドモ亦知ルベキナリ
 而シテ其商賈ノ動止ハ如何ナリケン今思ヒ得ズト雖モ和名類聚
 鈔ニ肆ハ伊知久良ト訓ス店家東西町是也、坐賣物舍也令ノ義解
 ニ肆ハ陳物處也トアリテ皆後世ノミセダナノ類ナリ、市塵ハ渾

○商

ふ
 廣大和名勝志。
 西九條東九條
 杏八條以上呼
 て展市莊とい
 ふ
 菟野池也。山
 崎むかしは愛
 よりつくしへ
 も行けるにや
 大和物語に御
 くしの女を送
 るところ山崎
 にもろとも
 行てなん舟に
 のせなとしけ
 りとあり又つ
 くしへ行くか
 ち路をもこ、
 より行しにや

テ物貨ヲ展布シ各商賈ヲ爲セシサマ尙ホ今日ニ異ナルコトナ
 カルベシ宇津保物語ニたな初に女居をりつ、物賣うる、又むな車賣に、い
 を、しほ魚鹽つみてもてきたり、あづかりとも、よみとりて、たな魚鹽にすあ
 て、うるトアルハ店ハ魚鹽ナトチ並ヘテ賣ルナリ三代實錄ニ山
 城國乙訓郡相應寺、元是漁商比屋之地也云々、此地累代商賈之店、
 逐、魚鹽、利之處也、ト云フハ河陽ノ驛市ノコトニシテ河陽ハ今ノ
 山崎ノ地ナリ土佐日記ニ山崎棚のたな小櫃ゝる、こびつ繪のゑも、ま曲かり
 のね大ほぢ路のかたも、かはら雙ざりけり、うる人心のこゝろ知をを、し知らぬ
 とぞいふなる、トアルモ山崎ノ市頭ニ物貨ノ賣店ヲ設ケタルサ
 マチ云フナリこびつノ繪トハ小櫃ヲ賣ル店ノ看牌ナルベシま
 かりのおねぢト云フハ諸説多々ナレドモ蓋シ山崎ノ街路ノコト
 ナ云フナラン市中ハ變遷多キモノナレドモ紀氏ノ任國ニ赴キ
 シ時ト敢テカハラヌサマチ云フナルベシ又商賈ノ關津トスル

○荷積問屋

古今に渾のま
ねかつかつく
しへ湯あみん
とてまかりけ
る時に山崎に
て別れたると
ころにてよめ
る

實之
「いのちたに
ころにかま
ふものなちは
あまのりか
あまのりまし」

○商估帶秤

所謂荷積問屋ノ如キ此比既ニ之アリ和名類聚鈔邸家和名津屋
今按俗云可謂停賣取賃處也トアリテ賣トハ賣品ニシテ賃トハ
藏敷料ノコトナルベシ津ハ水ニ沿フ所ヲ云フ貨物運搬ニ便ナ
ルヨリ此業ニ從事スルモノ皆水邊ニ居ルコトハ今モ亦然ルナ
リ又古今集ノ序ニあきびとのよききぬきたらんがごとしナド
アリ買人ハ渾テ其實力ヲ要シ又外筋ヲ顧ミズ常ニ鮮衣ナド着
ルモノニアラザレバ紀氏モ斯ハ記セシナルベシ今モ江州日野
ノ商估ハ家資數萬ヲ積ムモノモ尙ホ弊衣負擔シテ更ニ豪商ノ
風ナシト云フ市人服制ノ事式ニモ既ニ明文アリ敢テ賤卑ヲ極
ルモノニハアラザルナリ

慈覺大師ノ傳ニ其夜夢有一人提囊米過我前意謂賣物問曰
是何人乎對曰商人也隣坊和上聞其聲曰所持何物對曰不是
和尙可買物大師問之商人曰懸三千大千世界秤子大師買得

○博多津

之懸此大地我乍居地隨秤上昇於是自然明知百法ト云フハ
當時行商ノ常ニ秤子ヲ帶ブルモノニシテ後世亦然ルアル
モノ或ハ千古ノ遺風ナルベシ

○輸出入品

又文德實錄滋野貞主ノ上奏ニ夫太宰府者西極之大壤中國之傾
袖也東以長門爲關西以新羅爲拒加以九國二島郡縣濶遠自古千
今以爲重鎮夫謀事必就租發政占古語因檢舊記大唐高麗新羅百
濟任那等悉託此境乃得入朝或緣貢獻之事或懷歸化之心可謂諸
蕃之輻湊中外之關門也ト云フガ如ク太宰府ハ西海ノ大鎮ニシ
テ外客ノ往來頗ル多ク殊ニ博多ノ大津ハ此比貿易ノ巨港ナレ
バ絕域ノ買帆常ニ絶ヘズ内外輻湊ノ要地ニシテ其隆昌亦察ス
ベシ而シテ此比海外ヨリ來輸入ル所ノ物貨ハ金銀香藥布帛銅
錢獸皮等多キガ如ク又本邦ヨリ輸出スルモノハ水銀布帛菽粟
ノ品類既ニ其數ヲ占ルニ似タリ

○商舶來港

魏志。神異記
 引云。南
 荒之外有火山
 長三十里。廣五
 十里。其中皆生
 不燼之木。晝夜
 火燒。暴風。猛雨
 不滅。火中有鼠
 百斤。毛長二
 尺。細如絲。可
 以作布。常居火
 中。色赤。時々出
 外。而色白。以水

三代實錄。元慶元年八月廿二日庚寅。先是太宰府言。去七月廿
 五日。大唐商人崔鐸等。六十三人。駕一隻船。來着管內筑前國。問
 其來由。崔鐸言。從大唐台州。載貴國使安江等。頗資貨物。ト云フ
 八十六年六月十七日癸酉。遣伊豫權正六位上大神宿禰已
 井豐後介正六位下多治直人安江等。於唐家市香藥。トアリテ
 四年。經テ此時歸朝セルモノアリ。安江ハ本國ヨリ貿易ヲ
 兼テ彼國ニ赴キシナルベシ。又竹取物語ニ左大臣あべのみ
 ひらじは。たからゆたかに。家ひろきひとに。たはしけるその
 年。來。唐土。船。王。卿。人。其
 としきたりける。もろこし。ふねの。わうけいといふ。ひとのも
 許。文。書。火。鼠。皮。衣。物。
 とに。ふみをかひて。ひねずみの。かはさるも。いふなるもの。
 かひて。を。こせよとて。つか。あまつる。ひとの。なかに。こころ。た
 しかなる。を。あらびて。を。の。ふさもり。といふ。ひと。をつけて
 つかはす。も。て。いた。たり。かの。うらに。を。る。わうけいに。かね。を。と

深。深。深。之。郎
 死。其。毛。以
 爲。布。

永。久。四。年。百。首。
 唐。人。ハ。しか。の
 を。し。ま。に。舟。出
 して。は。か。た。の
 を。き。に。時。つ。く
 る。也。
 唐。人。の。衣。に。か
 かる。白。玉。の。し
 ろ。き。光。の。め。つ
 ら。し。き。かな

らす。わうけい。ふみをひろげてみて。へんじかくひねずみの
 かわさるも。このくになきものなり。をどにはきけともい
 まだみぬものなり。よにあるものならば。このくに。も。も。て
 まうで。きなまし。いと。か。た。き。あ。き。な。い。な。り。し。か。れ。を。も。も。し
 て。ん。ち。く。に。た。ま。さ。か。に。も。て。わ。た。り。な。ば。も。し。ち。や。う。じ。や。の
 あ。た。り。に。と。ふ。ら。ひ。も。と。め。ん。に。な。き。もの。な。ら。ば。つ。か。ひ。に。そ
 へ。て。か。ね。を。ば。か。へ。し。た。て。ま。つ。ら。ん。と。い。へ。り。か。の。も。ろ。こ。し
 ぶ。ね。き。け。り。を。の。ふ。さ。も。り。ま。う。で。き。て。ま。う。の。ぼ。る。と。い。ふ
 こと。を。き。て。あ。ゆ。み。と。う。す。る。ひ。ま。を。も。ち。て。は。し。ら。せ。む。か
 へ。さ。せ。玉。ふ。と。き。に。む。ま。に。の。り。て。つ。く。し。よ。り。た。い。な。ぬ。か。に
 ま。う。で。く。る。ふ。み。を。み。る。に。い。ふ。ひ。ね。ず。み。の。か。は。さ。る。も。か。ら
 う。じ。て。び。と。を。い。だ。し。て。も。と。め。て。た。て。ま。つ。る。い。ま。の。よ。に。も
 ひ。か。し。の。よ。に。も。こ。の。か。は。は。た。や。す。く。な。き。もの。な。り。け。り。む

大鏡ハ藤原爲業ノ撰

今昔物語ハ宇治十景ノ

西、大衆合力、以錢二百貫文所買得也、ト云フヲ以テスレバ其通錢モ亦多キヲ知レリ又古今集ニ「あすか川淵にもあらぬ我家もせにかはりゆくもの」にありけるト云フハ伊勢が衰ヘテ家ヲ賣リタル時ノ歌ニテ瀬ニカハリ行クトハ錢ト換ハルト云ヘルナリ源氏物語横笛の卷ニ拍木亞相ガ薨セシトキ黄金百兩ヲ香奠ニセラレシコト見ユ當時用計ノ料ニハ黄金ヲ充ラレシハナク何レモ錢貨ヲ用ヒラレシハ國史ニモ往々載スル所ナレドモ玆ニハ寓意ノ綺語ナレバカクハ記セシモノナルベシ又大鏡ニしうのねつかひにいちへまかりしに、又わたくしにもせよ、十貫を持って侍りけるナドアレバ都下ニハ錢貨ヲ以テ交易ノ料トスルコト少カラザレドモ其需用スル所ノ錢貨ハ之ヲ交通漸ク繁ク需用隨テ多カラントスル當時ニ在テ更ニ亦不足ヲ告ルモノアルニ至レ

新撰字鏡。櫻
傳感反去買物
總付錢也市買
先入曰賒阿支
佐須

今昔物語。某も
贈妻をもちて
侍れともしや
願はば似て
心は販婦にお
とりぬれば云
々又和名類聚
抄ニ販婦比佐
岐女權藏抄ニ
凡テヒサキ人
ナルヲ女ヲ指
テヒサキメト
云フ今ヒサセ
ト云ヒナセリ

ルコト理勢ノ然ラシムル所ニシテ商業因テ以テ其一進ヲ期スルニ足ルナリ江談ニ以金一兩買米マタ今昔物語ニ此金一兩を以て、直米三石に賣て、それを以て、家を買て、其家にして平安に子を産つ今二兩を賣て、其を本として便り付てなん有けるト云フハ米ヲ以テ貿易ノ本料トスルナリ又夫に翻て云く我等年來家貧にして頼方なし、然るに、此布一段を私に織得て持たり、近來聞ば、箭橋の津に海人多く有て、魚を捕て商ふと、然れば、汝此布を持て彼津に行、魚を買て持來れ、稻粳等に替て、今年一二段の田を作て、世の中を渡らん、又初め嘉運、其時に人の爲に書講して、絹十匹を得たり、其絹を以て、他の魚を買ふに依て、生を購ふといふは、此を云ふ也トアルハ絹ヲ以テ魚を買ヒ其利ヲ以テ稻米ヲ得ントスルナリ又此ハ何なりつる、馬の俄に死るすと、答て云く、此は陸奥國より

延喜式雜物價
 法鏡内絹一疋
 直稻卅束絲一
 物六束綿一屯
 三束調布一端
 十五束麻布一
 段九束鐵一口
 三束鐵一延五
 束アルハ常
 時官定ノ價格
 ナルヘシ
 古今聖賢橋。
 樹ハ絲十六兩
 の重さといふ
 成形圖説に備
 萬樂歌ふ夏引
 のしら糸を、
 はかりといふ
 を針に七はか
 る六七兩のよ

○以米爲旅

此を財にて、上りたまへるに、萬人の欲かりて直も不限買は
 むといふつれども、ト云フハ馬ヲ交易ノ料トナシテ旅行ス
 ルナリ又佛の像を造らむとするに金を買はむが爲に弘濟
 に多の財を持せて京に上り云々弘濟京にて思の如く金を
 買得て歸りける、ト云フハ土宜ノ物貨ヲ以テ黄金ヲ購入セシ
 モノナルベシ又扶桑畧記ニ以稻千束買得此馬トアルハ稻
 ナ以テ馬ノ代ト爲シナリ、又三代實錄ニ貞觀十五年九月辛
 未、侍從從五位上春澄、朝臣高子、奉幣氏神、向伊勢國賜稻二千
 五百束、以爲行旅之資、トアルハ稻ヲ旅費ニ賜ハリシモノニテ其
 稻ハ金銀錢幣其他輕便ノ物品ニ換ヘテ旅中ノ料トセシナルベ
 シ又竹取物語ニたつのくびのたま、とりにとていだしたま
 あ、この人々のみちのかてくひもの、どの、うちのけぬわ
 た、せになど、あるかぎり、とりいだしてつかはす、トアルハ綿
 取、出、遣、中、殿、取、出、中、給、わ

し見へたり

○海門驛政

河陽驛
 有德京邑
 御製
 河陽亭子
 宿月夜松風閣
 旅人雖聽山猿
 助交阿誰能不
 價帝京春

舟ノ類ヲモ旅費ニ併セ用ヒシナリ
 此時ニ方リ海門驛政ノ事モ既ニ備ハリ道橋、舟車、傳馬、人功ノ
 業各、其緒ニ就シテ以テ貨物運搬ノ道此ニ開通シ都鄙ノ來
 往亦多キニ至レリ東西ノ國府及ビ各地市場ノ如キモ四方
 ノ產品出入スルモノ頗ニ増加シ全般ノ商業之ヲ前時ニ比
 スレバ亦大ニ程度ヲ進メルモノアラントス是ヨリ先キ三
 代實錄ニ元慶八年九月戊午朔、遠江國濱名橋、長五十六丈廣
 一丈三尺高一丈六尺、貞觀四年修造、歷二十余年、既以破壞、勅
 給彼國正稅稻一萬二千六百三十束、改作焉、ト云フコト見ユ
 本朝文粹、江以言見遊女記ニ河陽則介山河攝三州之間、而天
 下之要津也、自西自東、自南自北、往返之者、莫不率由此路矣、又
 江匡房遊女記ニ自山城國與渡津、浮巨川、西行一日、謂之河陽、
 南海西海三道之者、莫不避此路、江河南北、邑々處々、分流向河

扶桑集。

到陽陽有

感而泣

菅盛相

去歲故人平府

舊德親手泣

相分我今到此

問事更爲報向

來一附項

内國謂之江口、マダ攝津國有神崎蟹島等地、比門連戶人家無
 絶、倡女成群、マダ商客舳舻相連、殆如無水、蓋天下第一之樂地
 トアルナミレバ山崎ヨリ神崎蟹島ノ如キハ此比南西ノ要
 路ニアルヲ以テ頗ル繁盛ノ地ナルコト察スベキモノアリ
 延喜式ニ凡難波津頭海中立、滯標若有舊標朽折者、搜求、去
 凡、太宰貢雜官物船、到、緣海、國、津、引、令、知、泊、處、又、延喜十四年四
 月二十八日三善清行ノ封事ニ重請修復播磨國魚住泊、ト云
 フ條ニ此泊天平年中所建立也、其后至于延曆之末、五十餘年
 人得其便、弘仁之風浪侵蝕、石頽沙漂、天長年中右大臣清原眞
 人奏議起請、遂以修復、承和之末復已毀壞、至貞觀初、東大寺僧
 賢和修菩薩行起利他心、負石荷鋪、盡力底功、單獨之誠、雖未畢
 其業、年紀之間莫不蒙其利、實和入滅稍及三十年、人民漂沒不
 可勝計、官物損失亦累巨萬、伏望差諸司判官幹了有巧思者、令

修造件泊、又山槐記ニ延喜聖代下、綸旨、仰山陽南海之兩道、修
 輪田船瀬之舊泊、トアリテ沿海泊船ノ港灣ヲ修築シ海漕ノ
 利ヲ起スコト奕世絶ヘズ此時ニ至リ其事亦頗ル觀ルベキ
 モノアリ然レバ四方商船往來モ多ク都鄙ノ交通モ亦開ク
 ルアル察スベキナリ而シテ舟楫ノ力未ダ脆弱ナレバ万里
 一碧ノ大洋ニ向テ從橫其勢ヲ逞フスル能ハズ土佐ハ南海
 ノ一地方ナレドモ紀氏ガ歸帆海上尙ホ月餘ヲ費スニ至ル
 蓋シ海賊ノ蠶ヲ窺フニ因リ戒嚴或ハ然ルモノアルベシ
 雖モ其延緩モ亦甚シク海路ノ便否固ヨリ後世ヲ以テ論ズ
 ベカラザルナリ

是ヨリ先キ扶桑略記ニ昌泰九年己巳正月二十七日甲午常平所
 穀宛寬平錢升別三文可沽之由、下知天下、ト云フハ曩ニ貞觀九年
 官米一升ヲ以テ貞觀新錢八文ニ糶ストアリ今寬平新錢三文ト

○穀價

○東西津

日本紀畧。延
曆十三年十一
月初近江國滋
賀古津者先帝
舊都今按登下
可追古號收稱
大津
上

スルトキハ價格ノ減退遙ニ半ヲ過グ之ヲ年曆ニ考ルニ殆ト三
十年其間多少ノ變異ナシト爲サルモ當時ニ於テ亦甚シキ懸隔
ト云フベキナリ蓋シ貞觀ノ饑歲ハ前後兩年ニ通ジテ一升ノ米
價四十文ニ至レリ寬平ノ時ハ未ダ凶年ト云フニ足ラザルヲ以
テ然ル乎果シテ然ラハ寬平ノ米價ハ當時ノ平價トスルニ近キ
モノアラン乎日本紀畧ニ延喜九年七月八日於東西津平商米價
凡當時京中ノ民食ヲ仰グモノ西南諸州山陽山陰ノ物貨ヲシテ
之ヲ難波ノ大津ニ船載シ更ニ澱水ニ據リテ運漕スルト江濃及
ビ勢越等北方ノ米粟ヲ滋賀ノ大津ニ取り以テ都下ニ致スノニ
道其最重ナルモノナリ故ニ此二津ハ常ニ粒米狼戾ノ情アリテ
其價格ハ即チ京邑密切ノ關涉ヲ有セリ是ヲ以テ今此制ヲ設ケ
二津ノ米價ヲ均一ナラシメシナリ

○朱雀天皇 第六十代 本朝世記ニ承平三年閏五月十一日戊戌被定

本朝世記ハ總
原通鑑書目
ニ本朝世記
ニ結天慶
續トアルモ
是ナリ而シ
其詳既ニ亡
存スルモノ
シ此ニ本朝
世記ト云フハ
備シ殘編ナル
ベシ
新花傳。新國
史ノ目ヲ載
セテ三代實錄
ノ次ニ置ク其
學多帝以來ノ
事ヲ記スヲ以
テナリ今博物
館中新國史一

常平所穀賣買事トアルハ當時凶歉等ニヨリ此ノ事ハアリシナラシ
新儀式ニ若行常平所事上卿奉仰先定左右京兩所執行人奏
之京師官人、穀倉、院、次、令、運、近、京、諸、國、穀、沽、與、東、西、人、事、畢、使、等、勘、
錄具狀付上卿令奏聞ト云フ當時常平所賣穀ノ例ナリ
又本朝世記天慶二年以來春夏之間米升別十七八文頻年來饑渴
之盛見聞之者無不愁歎又天慶五年四月九日有勅召內給所錄百
貫文分給東西飢饉疾疫之輩又新國史ニ承平三年癸巳自正月至
三月之旬畿内畿外盜兵穿人壁伏山野追捕往返之商民ト云フテ
以テミレバ此比連年不登疾疫ノコトアリ而シテ當時大平尙文
ノ後ヲ承ケ上下競フテ侈靡ヲ事トシ民力凋衰シテ又救フベキ
ナク積弊ノ赴ク處畢ニ群盜輦下ニ橫行スルニ至リ尋テ純友西
ニ反シ將門東ニ潛シ四方騷然タリ此時ニ方リ匪徒山海ニ出沒
シ履行行李ヲ掠メシカバ運路爲ニ杜塞シ商况殆ト沮喪スルモノ

○物價減定

卷ヲ存ス蓋シ
殘冊ナランカ
案スルニ江談
抄ニ師平煥新
國史ト云フハ
抑々別ニ新
國史アル乎
扶養略記。延
長五年五月廿
一日召興福寺
僧徒法師於修
明門外齋請就
新商人船入唐
米法及巡禮五
壽山
永仁二年二月
興福寺ノ僧者
然其弟子某
其ルモノヲシ
テ夷那ニ赴

アリ幾許モナク東西平定シ四海舊時ニ復スルガ如シト雖モ武
威漸ク下ニ移リ終ニ將府秉權ノ勢ヲ馴致スルニ至レリ
○村上天皇^第六十百練抄ニ天曆元年十一月辛酉諸卿被^レ定雜物
價減定事ト云フ雜物トハ各種ノ交易品ナリ今其價格ヲ斯ク減
定セラレシモノハ世間物價ノ異動アリテ臨時詮議セラレシナ
ラン又日本紀略ニ天德元年十二月二十日壬申今夜疾風暴雨發
屋折木古今未聞之事也今年穀直甚貴ト云フコト見ヘタリ又海
外交通ノコトハ曩ニ寬平七年五月詔シテ遣唐使ヲ罷メ訪問頓
ニ絶ルヨリ承曆二年十月始テ宋廷ニ通ズルマデ其間數十年未
ダ一个ノ聘使出入スルモノナシト雖モ釋氏及ビ商民ノ相往來
スルモノハ常ニ絶ヘザルコトナリ而シテ當時海外ヨリ輸入
ル物貨ノ種類ハ概子錦綺布帛藥種香木若クハ珍禽奇獸ノ類ト
ス又本邦ヨリスルモノハ布帛黃金水銀漆器米穀硫黃木材ノ雜

○黃金出於海外

キ宋主ニ獻ス
ル所アリ其物
品中雜物類具
各等ノ類多シ
又精細力兼衡
ヲ能クヤシ時
邊所ニ常理以
下唐米ヲ以テ
歸スル財子數
歸平泉ノ庫中
ニアリシコト
東鑑ニ見ユ
外交史書。延
長三年十月使
ヲ契丹ニ遣ル
（遺史）而シテ
國史見ル所ナ
シ後十年承平
五年九月吳越

品尤多乎ニアルベキナリ
案ズルニ黃金ヲ海外ニ輸致セルハ諸書載スル所少カラズ
百練抄ニ仁平元年九月廿四日左大臣送沙金於宋客劉文冲
去年進送書籍故也トアリマタ本朝文粹ニ天曆元年閏七月
廿七日左大臣實賴書ヲ吳越王ニ贈リ副フニ砂金貳百兩ヲ
以テシ佛牙舍利記ニ昔日本西園寺前太政大臣孫竹園禪師
投^レ三千五百兩黃金於大宋國求此經トアリ又降テ源平盛衰
記ニ蟬折ト云フ御笛ハ鳥羽院ノ御時唐土ノ國王ヨリ御堂
造營ノ爲トテ檜木ノ材木ヲ所望アリケルニ砂金千兩ニ檜
木ノ材木ヲ被^レ進タリケレバ唐土ノ國王其志ヲ感ジテ種々
ノ重寶ヲ被^レ報進ケル中ニ漢竹一兩節ヲ被^レ副タリ又彼青葉
ノ笛ト申スハ父經盛笛ノ上手ニテ御座ケルガ砂金百兩宋
朝ニ被^レ渡テヨキ漢竹チ一枝取寄又平家物語ニ安元ノ春ノ

○高麗交易

其臣將水師助
其遣ハシ土產
ヲ獻ズ初ノ本
唐ノ末跡鑄錢
鑄世亂ニ際シ
其兩浙地ヲ
據有シ自ラ吳
越ニ移ス
漢平遠寶記
即漢州知府
李暉仙傳ヨ
寶子三言明
其地ハタリ
忽ル其地ト
漢平遠人ノ説
據アリテ
其地トアリ
本日本史亦子
川原トス蓋

比鎮西ヨリ妙典ト云フ船頭ヲ召上セ人ヲ遙ニ除テ對面アリ金ヲ三千五百兩召寄テ汝ハ聞ユル大正直ノ者ナレバトテ五百兩ヲバ汝ニ得サス三千兩ヲバ宋朝ニ渡シ一千兩ヲバ育王山ノ僧ニ引ニ二千兩ヲバ帝ヘ進セテ田代ヲ育王山ヘ申シ寄テ重盛ガ後世用ハスベシトゾ宣ヒケルト云フ類此外猶多ガルベキナリ

○圓融天皇第四十六代日本紀畧ニ天延二年壬子十月三十日高麗國交易使藏人所出納國雅相具貨物參入ト云フコトアリテ交易使ハ臨時彼國ヘ發遣セラレシ通商專任ノ吏員ナルベシ又永觀二年甲申六月廿三日此間米直騰踊飢渴之甚也全年十一月六日又鹽直一籠一貫六七百文升別五六十文也トアレバ諸物ノ高貴ナク推シテ知ルベシ又永觀二年十一月六日壬子近來世間錢鐵尤甚適所取錢號ニ寸半銅錢原直也同月二十八日ノ記ニ又被

○定估價法

漢書食貨志云
漢興以來
錢貨之爲
漢金之海外
傳之者
非人感之
知形ノ類カ
文讀清談ノ知
愚寺ニ松路ト
云陽アリ此祝
ハ昔清盛公異
朝ノ天子ヘ寄
金湯千獻セラ
レシニ天子殊
ニ寵顯ウルハ

定嫌破鑄事見ヘタリ錢以テニ寸半ノ字悉クハ寸ノ額ニシテ未タ詳カクテラザルナリ按ズルニ寸半ノ際通貨ヲシテ十分ノ二分半ニ遊ズルモノニシテ即チ銅錢ノ原價ニ當ルト云フトナルヘキ乎未タ臨説ヲ得ズト雖モ既ク記シテ後考ヲ俟ツノミ蓋シ此時鑄錢弊惡爲ニ通用ヲ障碍セシモノアラン銅錢ノ原直ト云フハ赤銅ノ原價ナルベシ此年製鹽一升五六十文ト云フモ其實ハ錢位ノ低下セシモノナリ

○花山天皇第五十六代百練抄ニ寛和二年三月二十九日丁酉左大臣以下諸卿參伏座被定沽買法トアリ本朝世記寛和二年六月十六日ノ記ニ從去年九月中至干今一切世俗錢不用交關之間不通人民無不嗟歎又因茲件錢如例爲令用神明可被祈禱也ト云フコトアリテ此時錢貨弊惡下民之ヲ厭ヒ流通澁滯物貨騰踊セシヨリ今沽價ヲ改定セラレシナルベシ

○一條天皇第六十代日本紀畧ニ永延元年十一月二日辛酉仰檢非

○通錢停滯

○通錢澁滯

○外人著但

レト仰不辨
則此返禮トシ
テ布ヲ松陸ノ
磯ヲ入道相爾
ハ贈ラレト
ナリ
外交史蹟。宋
僧惠清歸化シ
カ鎮西ニ在リ
壽ヲ能ス長和
三年藤原清賢
從軍大納言
ナリ。惠清ヲ遣
シ鈔金千兩ヲ
贈ル。宋ニ赴キ
厚方ヲ求ム
藤原抄。記録
所上朝拜開國
勳人。已上依宜
官符事但於

遣使加制止上下人々不用錢貨事百練抄ニ永延元年丁亥十月二
十七日於諸寺祈可用錢之由又同年十一月一日仰有司制上下不
用錢貨事ト云フヲ以テスレバ通錢ノ停滯既ニ極レリ日本紀零
ニ長徳二年十二月云々米穀高貴至冬京師頻有火ナト云フコト
見ヘテ其商業ノ動靜亦知ルベキノミ
○後朱雀天皇^{第九代}百練抄ニ寛徳二年八月十日諸卿定申但馬
國唐人守隆等愁申守章任朝臣押領雜物事トアリ雜物ハ貿易ノ
物貨ナルベシ扶桑零記ニ寛徳元年八月七日前大隅守中原是國
任但馬介民部少丞藤原生行任椽爲令存問大宋國商客張守隆漂
着彼國岸也トアリテ宋ノ商客但馬ニ漂泊シ國守ノ爲ニ貨物ヲ
零收セラレシテ愁訴セシナリ百練抄ニ其月十一日諸卿定申但
馬國宋客廻却事トアリテ今此財物ヲ返送セシメシナリ
○後三條天皇^{第七十代}當時朝政日ニ衰フ帝深ク之ヲ憂ヒ銳意治

○加美屋紙

上朝拜可介
行記所由
彼下也
讀本朝文粹。
後朝宮城之左
則豐大學寮以
兼御師右則臣
殿倉院番米穀
藤原抄。カミ
ヤ紙宿紙ト書
ク紙屋川ト云
フモ此紙ヲ漉
ク河ナレハ此
名ヲ傳タリ薄
墨色ノ紙ナル
ヘシ給紙ナン
トニ用ニルカ
故ニ旨紙ト云

ナ求メ記録所ヲ置キ親ク民政ヲ聽ク積年ノ餘弊一朝之改
コト難シト雖モ德澤生民ニ被ルアル又知ルベキナリ古事談ニ
延久ノ善政ニハ先器物ヲ被レ作ケリ資仲卿藏人頭ニテ奉行之云々
升テ召寄テ取廻々々御覽シテ簾ヲ折リ寸法ナドサ、セ給ヒケリ
米ヲバ穀倉院ヨリ召寄テ於殿上小庭貫首以下藏人出納ナド見沙
汰シテ小舍人タマダスキシテハカリケリ本米ヲバ加美屋紙
包テモチマイリタリケレバ御覽アリテゾ御持僧ノ許ナドハハ
ツカハサレケル斛器ハ櫃ヲ差テ石ヲ括リテサゲテオモシニシ
テ跨木ニ懸テ於穀倉院國々米ヲバ被納ケリトアリ徵稅ノ法詳
カナラザレバ民間ノ疾苦ヲ知ルニ由ナシ故ニ今量器ヲシテ均
一ナラシムルモノ蓋シ其本ヲ知ルト謂フベシ百練抄ニ延久四
年八月定沽價法ト云フモ其民心ヲ酌量スルヨリ之ヲ更定セラ
レシモノナラン

フカ東鑑、建
長三年三月米
三千石白米二
石(官倉身定)
大豆石同斷

九磨。天德元
年三月二十五

開大内記後生

勅旨作之銀文

去乾元大寶參

難維時卿勅申

長建元年四月八日

九阿彌之令

九阿彌之令

時能書者道風

朝臣文正等也

道風稱目時文

正爾猶仍定件

兩人奉聞以儀

之爲勝

朝野群載ハ三

德爲斷撰

天聖四年八宋

ノ仁宗即位四

年ニシテ本朝

後一條天皇ノ

萬壽三年ナリ

外交史畧。賢

河六年(道宗

八安三年)六

日本紀畧ニ天德二年三月廿五日改錢貨。延喜通寶爲乾元大
寶トアリ拾芥抄ニ據ルトキハ乾元大寶ハ應和三年七月五
日ニ至リ廢スル如ク見ヘタリ何ニヨリテ斯記セシニヤ永
觀二年僧裔然ガ入宗ノ時本邦ノ事ヲ述ル條ニ交易用銅錢
文曰乾元大寶トアルハ固ヨリ應和三年ヲ距ル二十年ノ後
ニ在リテ當時本錢ノ通用多カリシヲ察スベキナリ蓋シ乾
元ハ乾元ノ誤ナリ本邦ノ制中世鑄錢司ヲ周防ニ置キ本州
任國ノモノ多ク鑄錢長官ヲ兼ルヲ例トス蓋シ此地ハ國邊
採銅ノ搬送ニ便ナルヲ以テナリ抑和銅以前ニアリテハ鑄
錢斷續常ナク其蹟モ亦詳カナラズ和銅元年始テ和銅通錢
ヲ鑄造セシヨリ天德二年本錢ヲ鑄造スルニ至リ大約二百
五十年トス其間ニ於テ金錢ヲ鑄ルモノ一回銀錢ヲ鑄ルモ
ソニ回銅錢ヲ鑄ルモノ前後十二回トス其新鑄ノ際概テ舊

錢ヲナシ以テ新錢ノ一ニ充テ並行セシムルヲ常トス然レ
バ舊新ノ間忽チ九錢ノ差異ヲ生ズルヲ以テ此時ニ方リ物
價ノ昇降モ殊ニ甚シキモノアラントス續日本紀ニ寶龜三
年八月物情擾亂詎訴ヲ致スヲ以テ遂ニ新舊二錢其價々同
ナセシムルノ制アリシモ亦此事ニ原由スルナリ類聚三代
格ニ據ルニ備後周防長門伊豫筑前豐前肥後七州ノ貢物之
ヲ鑄錢ノ料トナシ弘仁十二年ヨリ天長五年ニ至リ年別三
千五百貫文ヲ鑄造ス此年數八箇年即チ貳萬八千貫文ナリ
又天長六年ヨリ承和元年ニ至リ壹萬壹千貫文ヲ鑄造ス此
年數六箇年即チ六萬六千貫文ナリ爾來年別三千五百貫文
ヲ鑄造スルヲ例トスト云フ此時即チ承和九年ナリ而シテ
採銅ノ如キ或ハ其數ニ充タズ鑄錢動モスレバ額ヲ減ズル
ニ至リ寬平ノ比ニハ周防一國ノ產銅ヲ以テ鑄造スルモノ

月我商船ノ遊
ニ據ル規則フ
定ム既ニシテ
邊商道官能算
來リ事ヲ以テ
相爭フ家ニ之
ヲ禁ストアリ

○物産貿易

年別僅ニ五六百貫ニ過ギスト云フ況ヤ古來舊錢ヲ更鑄ス
ルモノ又此數ニ入ルニ於テヤ之ニ因テ之レヲ觀ルニ海
内通錢ノ總額モ亦概シテ知ルベキナリ日本紀畧ニ天慶三
年庚子十一月七日戊辰周防國飛脚言鑄錢司爲賊被燒之由
トアルヲ以テ見ルニ朝政陵替鑄錢ノ業此比漸ク衰兆ヲ來
タシ終ニ其事全ク廢スルニ至レリ而シテ爾后數百年間交
易ノ料ト爲スモノハ本邦古錢ト支那錢アルノミ而シテ尤
多ク賣買ヲ紹介スルモノハ米粟絹布ニシテ其交市ヲ稱通
ズルアルガ爲メ衆庶馴テ以テ甚シキ不便ハアラザリシカ
リ然レドモ之ヲ商業ノ進退伸縮ノ如何ニ問ハ其加度ハ
更ニ望ムベカラザルヤ亦論ヲ俟ザルモノアリ大江匡房狐
媚記ニ有人買七條京極宅云々其所渡與之直本是金銀系絹
也後日見之皆是弊鞋舊履瓦礫骨角也ト云ヘルハ金銀系絹

外交史略。長
治二年宋ノ泉
州ノ綱首李充
太宰府ニ來ル
例ニ依テ存問
ス李充等本國
ノ公憑ヲ進メ
交易ヲ請フ
契丹ハ東胡ノ
種屬ニシテ當
時渤海ノ地ヲ
平吞セシナリ

ノ類ヲシテ家ヲ買フノ代物トスルコトナリ朝野群載ニ天
曆四年六月田地賣買券ニ田三町ヲ直稻肆佰貳拾束ニ沽却
シ又應德元年四月家地賣買券ニ准米參佰石又米千七十餘
石ヲ絹二千二百匹ニ沽却スルノ例又應德元年二月十三日
直絹貳拾匹ヲ以テ一段ノ畠ヲ沽却スルノ立券長寬二年十
二月二十五日八丈絹四匹ヲ以テ貳段ノ田ヲ放與スルノ立
券等物貨賣買ノ例格ノ如キ往々古文書ニ載セタリ

○後冷泉天皇第七代百練抄ニ永承二年十二月廿四日渡唐者清原
守武配流佐渡國同類五人可浴徒年之由被宣下件守武太宰府召
進之於貨物者納官厨家ト云フハ是ヨリ先キ寬德二年八月二十
九日諸卿定申請家勘申筑前國住人清原守武入唐事トアリテ守
武ハ筑前ニ在リ私ニ宋ニ至リテ貿易セシモノナリ宋史ニ天聖
四年十二月明州言日本國太宰府遣人貢方物而不持本國表詔而

經古事談。高麗本朝ノ名醫推忠ヲ給ハシト申タリケリ臣房卿其狀ヲ書キケルニ云々双鱼難運臥池之月照欄何入鶴林之雲ト云弗句カキタリケル後ニ彼國ノ商人來ケルカ此句ヲ紳ニ書シテコソ來リケル百練抄。永曆元年十二月諸卿定申高麗國留對馬島人

却之其後又未通朝貢ト云フガ如キモ亦此比ノコトニシテ皆邦民ノ私ニ通商ヲ圖リシモノナルベシ
 ○堀河天皇^{第七十代}百練抄ニ寛治六年六月二十七日諸卿定申本朝商客渡契丹事又同七年二月十九日諸卿定申渡契丹之商客事嘉保元年三月六日諸卿定申前帥伊房卿遣明範法師於契丹交易貨物之罪科伊房權中納言太宰ノ帥タリシ時私ニ人ヲ海外ニ遣ハシ貿易ヲセシモノナリ又嘉保元年五月廿五日伊房卿解却位一等緣坐者多隨法家勘狀所被行ト見ユルハ乃チ此事ヲ所決セラレシナリ

是ヨリ先キ外交史畧ニ承保元年甲寅^{高麗文宗二十八年}二月海商重利等三十九人高麗ニ至リ貿易ス二年乙卯三月大江等十八人六月朝元時經等十二人七月某等五十九人皆往テ貿易ス高麗史並ニ之ヲ貢獻ト稱ス而シテ邊民ノ商利ヲ求ルニ過

御代々文書表。享保九年十一月十日是ヨリ前松平加賀守獻スル所ノ金澤文庫本ノ新編源氏物語抄ヲ御文庫ニ納メラル
 職原抄。檢非違使此云使職本所乃勅責職淳和天皇御宇天長年中初登之異朝尤重此職云々朝家遺此職以來衛府追補正亂強刑部判斷京職訴訟併使職

○後白河天皇^{第七十代}此朝保元ノ亂アリ軍記ニ載スル所ヲ考ルニ此戰ハ保元元年七月十一日寅ノ刻ニ起リ辰ノ刻ニ至ル僅ニ數時ノ間ニ出デズ然レド多年無事ニ沈睡セシ京洛ノ生民金鼓一タビ動クヲ聞キ其周章亦如何ゾヤ蓋シ戰塵鴨水以東ニ止リ

ガルノミトアリ當時西州ノモノガ朝鮮地方ニ至リテ物貨ヲ貿易セシコトハ尤モ多キモノナラシ承曆四年十一月薩摩國主島津某承保二年對馬國主宗某應德元年筑前商信通寛治元年對馬人元平等四十人同三年太宰商某永久四年二月邦商某眞珠水銀寶刀牛馬或ハ柑子ノ類ヲ以テ高麗ニ至リ貿易セシコト又全書ニ見ヘタリ本邦既ニ四面環海ノ地位ニアリ當時海門ノ鎖鑿未ダ周到ナラザレバ固ヨリ彼我通商ナキヲ保シガタシ後武治ノ世ヲ終ルマテ私市ノコト全ク除クベカラザルニ至レリ

○保元平治之亂

仍爲國家之極
權應代以爲項
贖者也

○平氏熾

○勸札物價
違法者

續日本紀。高
野天皇三年十
月辛亥是年良
私鑄錢者始復
相繼配鑄錢司
監役並皆著命
於其狀以備選
走聽鳴追捕焉
三代實錄元慶
四年十二月出
昭獻云々著
獻若千人未著
獻若千人トア
金光寺緣起。
東市屋市燈大

明神三座延曆
十四年五月七
月贈相國冬嗣
公祭宗像大神
于東市爲守護
神因號市燈九
月七日祭之

○市屋

葛藤泥社。市
燈とて市場に
いはへる神も
あり屏風に市
燈のかたかい
たるを爲頼か
歌に
「市燈の神の
井垣のいかな
らん商ひもの
に千代をつむ
なり」

高倉天皇帝

一六

テ全府ヲ擾亂セシニアラサレハ其市民ニ及ボス被害ハ尙ホ多
カラザリシナルベシ既ニシテ又平治ノ亂アリ此時ノ交戦モ亦
數日ナラズ其事平ラギ程ナク前時ニ復セシカバ一時逃避ノ京
民等各還テ其業ニ就シナルベシ而シテ公家倍式微ニ至リ武人
猖獗ヲ極ムル者アリ是ヨリ後平族獨リ熾ニシテ田園終ニ天下
ニ半バシ勢威殆ト並ブモノナカリシカバ諸州ノ武族家門ニ出
入シテ都鄙ノ來往亦少カラズ殊ニ當時靜穩ニシテ世上無異ニ
屬セシカバ帝都ハ常ニモ打勝リテ繁賑ナラズト云フコトナク
商家ノ如キモ東西交通開ケテ頗ル其業ヲ張リシナラン

○高倉天皇^{第十代}清瀨眼抄治承三年十月二十六日ノ記ニ大夫尉
義經畏申記可令向市屋人結番事一番康綱朝臣久光基廣明基奉
行兼康二番兼綱朝臣季貞清重重成三番章貞盛澄信盛資成久忠
四番仲頼信盛資成久忠右市屋雜物沽價法被載去八月三十日官

符又高買之輩不恐嚴制猶以違犯宜令檢非違使等五箇日一度分
番向東西市可令勸札違法之由同九月十九日被下宣旨畢仍任彼
宣下狀爲令行向所令結番也來三十日一番可行向也又自件日限
又以前如此轉輪儲守結番行向市屋可令勸札件違法之狀依別當
宜所廻如件ト云フハ此比京中市屋ノ物品官定スル所ノ沽價ニ
ヨラズマ、高格ニアキナヒテ其例ヲ紊マス者アリ故ニ令檢非違
使ノ吏員ヲシテ分番查行シテ以テ犯者ヲ勸札セシメシナリ又
當時市中ノ動靜ヲ見ルベキモノハ法橋顯昭ガ壽永二年五月ニ
著ハセシ拾遺抄ニ據テ考フルニ市門ハ七條猪隈ナリ七條町ト
イヘル僻事也市屋アリ市マツリアル所ナリ着鈇祭ナリ夏冬ニ
度アリ昔ハソノ市ニテアキナヒハシケリ町ハ私事ナリ彼市ニ
テ盜人ヲモトヒ又犯人ハハスルモアマ子ク市ニテ人ニミゴリ
サセムタメトコソマウスメレソノ小路ノ末ヲフルクハ市門ト

日本書紀

一七

〇三條吉次

本朝無題詩。
 二條物女
 法性寺入道
 可憐服一疫
 未夕日沈時
 物進増直前
 會止任唱名門
 外暫徘徊富家
 難拍金無願
 屋不喚喚欲來
 映月春花其意
 看此時難自與
 相催
 飛渡案。市に
 動かふ車あり
 「市さのめい
 ふうはかなき
 萬代をかひに
 う我は巻き出
 つる」

イヒケル今ハ花小路トナツケタリト載セタリ市中ノコトハ照
 合シテ逃走ニ備フルモハ罪人ニ附市司ノ樓前ニ罪人ヲ決罰スル
 コトハ延喜式ニモ見ヘタリ昔ハソノ市ニテアキナヒハシケリ
 ト云フナ以テ考フルニ壽永ノ比ハ福原遷都等事アリテ市場
 モ頗ル衰弊ニ屬シ殆ト其址ヲ止メザルニ至リシナラン故ニ治
 承三年ヨリ壽永二年ニ至リ僅ニ數年ニ過ギザレドモ全都頗ル
 衰弊シテ變遷尤甚シキ故斯クハ記セシモノト思ヘリ又義經記
 ニ奥州へ下る金商人三條の吉次信高とて其頃有徳の者あり云
 々是は都のものにて候が毎年奥州へ金をあきなひに下り候な
 り云々信高頓て出来る其誠に美々敷して種々の寶を荷物に
 し廿四駄を先に立て我身は黒栗毛の馬に覆輪の鞍置て乗たり
 ける云々京都に隠なき金商人三條の吉次めが此宿に着とき
 いざや酒手取て云々秀衡を秀衡と思はん輩はあの吉次に引出

京の人の家に
 市衣來り酒
 「なよ竹の末
 の世違きわた
 りひは市女も
 我もかはらさ
 りけり」
 續詞花集。か
 まを鏡にかへ
 けるにこよな
 くいひたとし
 ければうるも
 のよみける
 「地こくのや
 かなへにもこ
 うにへたまへ
 おほくのせに
 なおとしたま
 ひう」

物を取らせよと宜へば云々秀衡けしきよげに笑て今は白皮鹿
 の尾もいらしとてかい摺たる唐櫃の蓋に砂金一蓋給ひけりト
 アリ陸奥地方ハ黄金多キ所ナレバ都府ヨリ買收ニ赴キシナ金
 商人ト云ヒシナリ然レバ此種々ノ寶二十四駄ト云フハ乃チ都
 府ヨリ搬送スル交易ノ料ニ供スル物貨ナルベク當時此等ノ商
 估アリテ都鄙ノ間ニ往來シテ賣買ノ事チハカラヒ其利ヲ得テ
 業トスルモノ東西地方尙ホ夥多アリシナルベシ源平盛衰記ニ
 是ハ栗太ノ者ニテ候ガ蒲生郡小脇ノ八日市へ行者也云々遙ノ
 市ヨリ重荷ヲ負セテ歸ランズレバト云フハ小脇ノ市場へ物貨
 ナ駄送シテ往來スル商人ナリ又海チモ渡シ山チモ越ベキ馬尋
 子得サセヨト云テ上品ノ絹二百匹持セテ奥へ下ス云々熊谷ハ
 二百匹ノ絹ヲ以テ栗毛馬チ商ヒテ軍陣ノ先掛タリト云フハ武
 州ヨリ遠ク奥州へ馬チ買ニ赴キシナリ山家集ニまなべと申す

○治承之亂

返し
けふより
うるころつみ
はをもけなれ
むへころかま
の底にみえけ
れ」
維新記ハ尤後
世ニ作リ出
モノナルヘケ
レトモ吉次カ
コトヲ子細ニ
記セシモノ他
ニナルコナケ
レハ今茲ニ痛
記スルナリ
太平記。五條
ノ吉次末眷ニ
作レリ和漢三
才圖會楠次井
才圖會楠次井
西陳五辻通南

島に京よりあき人をものくだりてやうくのつみの物ともあ
きなひて又しはく鹽飽のしまにいたりてあきなはんとするよし申
しけるを聞て「まなへよりしはくへかよあき人はつみをかひ
にて渡る也けりく申にさしたる物をあき商なひけるをなにと、
とひ問ければはまぐりをほして待るなりと申けるを聞て「れなし
くはかきををさしてほしもすへきはまくりよりはなもたより
ある真鍋鹽飽は二島の名なりつみのものは積荷ト云フコト
ニテツミト云フナ罪却ト云フニ通ハセタルナリ皆其比ノ旅商
ナルベシ又源平盛衰記ニ嘉應元年冬ノ比目代ニテ衛門尉政友
美濃國杭瀬町ニテ宿ヲ取ル山門領平野庄ノ神人楠ヲ賣テ出來
レリ政友是ヲ買ントテ直ノ高下ヲ論ジテ様々ナブルトアル賣
買ノサマ亦察スベシ治承四年五月十六日源ノ頼政高倉宮ヲ擁
シテ兵ヲ起シ平氏ヲ討テ克タズ其廿六日ヲ以テ乃チ宇治ニ亡

○京中大火

櫻井辻子此所
金巻橋次末眷
之宅地
栗太舊栗本ニ
作ルト云フ近
江ノ地名勢田
ニ境シ守山ニ
接ス
山家集ハ西行
法師ノ家集
真鍋ハ備中ノ
屬島鹽飽ハ談
枝ノ屬島ナリ
つみのものハ
ト書ルヲレト
のト字體ヤ、
似タルヲ以テ
誤リシナルヘ
シ

ブ戰爭僅ニ十日ニ過ギザレドモ此際圓城興福兩寺ノ僧兵等其
謀ニ與リ以テ平族ヲ襲フノ議アリ人心恒々洛中ノ動搖已ニ察
スベク商民ノ困弊以テ知ルベキナリ是ヨリ先キ京中火アリ禁
闕ニ及ハリ亦商業ノ一衰ヲ來セルモノトス
此時ニ方リ京中ノ災異モ實ニ少々ナラズ百練抄ニ治承元
年四月廿八日亥刻火起自樋口富小路火焰如飛八省大極殿
小安殿青龍白虎樓應天會昌朱雀門大學寮神祇官八神殿眞
言院民部省南門大膳職勸學院等拂地燒亡大内免其難此外
公卿家十餘家爲灰燼皇居閑院依近々主上駕腰輿行幸正親
町邦綱第凡東限富小路東西限朱雀西南限樋口北限二條凡
百八十餘町此中人家不知幾万家希代大災也又歷代皇記ニ
安元三年四月廿八日夜大内裏燒亡事自樋口富小路火起京
中三分一燒失其數二萬余家燒畢町數百八十餘町トアリ當

玉海ハ月輪攝
政彙實撰ム

方丈記ハ鴨長
明撰ム

○養和傳

時ニ在テハ又夥シキ大災ト云フベシ玉海ニ治承四年四月二十九日申刻三四條邊廻颯忽起發屋折木人家多以吹潰同時雷鳴七條高倉邊落白川邊雹降西山方同然ト云ヘリ又皇帝紀抄ニ今年養和元年天下饑饉道路饑死者充滿開關以來無此程子細トアルハ實ニ非常ノ被害ナルベク商業ノコト亦論スベキナキナリ方丈記ニ更ニ其ノ事ヲ云フ尤モ詳密ナレバ今茲ニ附記シテ現時ノ動靜ヲ見ルノ參考ニ供ス養和の比かどよ久しく成てたしかにも覺へず二年の間世中飢渴して淺ましき事侍ハベリ或は春夏日ハベリ或は秋冬大風雨大水などよからぬ事共打つきて五穀とくくみハベリのらす空敷春耕し夏ハベリあるいとなみのみありて秋刈冬収るぞめきはなし是によりて國々の民或は地をすて堀を出イデ或ハ家を捨て山に住スさまくの御祈はじまりてなべてもらぬ法と

うめきハソヨ
メクト云フ意

○毀屋爲薪

も行はるれども更に其しるしなし京のならひなにわざはつけてもみなもとは田舎をこそたのめるに絶てのぼるものなければさのみやはみさをも作りあへむねんじ佗ハベリ様々の寶物かたはしより捨るがとくすれども更に目みたつる人もなしたまかくかふるものは金を軽くし粟を重くす乞食道の邊におほく慈悲し赤聲耳にみてり前の年かくの如くからくして暮ぬ明る年はたちなをるべきかと思ふ程にあまさへえやみ打そひてまさる様に跡かたなし云云あやしきしつ山かつも力つきて薪さへともしくなりゆけばたのむかたなき人はみづから家をこぼちて市に出でこれをうるに一人が持て出たるあたひなを一日命をさゝるに及ばすとぞあやしき事はかゝる薪の中につき白かねてがねのはくなぞ所々につきてみゆる木のわれあひまじれ

り、是を尋ぬれば、すべき方なきもの、古寺に至りて、佛をぬすみ堂の物の具を、やぶり取てわりくだけるなり、濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うきわさをなむ見侍りし云々、仁和寺に慈尊院の大藏卿隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數しらす、じぬるとをかなしみて、聖をあまたかたらひて、その首のみゆるごとに、額に阿字を書て、縁を結はしむるわざをなむさられる、その人數をしらむとて、四五兩月がほと、かへたりければ、京の中一條より、南九條より北、京極よりは西朱雀より東、道の邊にある頭、すへて四萬二千三百餘りなむ有ける、況や其前後に死ぬるもの多く、川原白川西の京もろくの邊などを加へていは、際限も有べからず、いかにいはむや、諸國七道をや、トアリて、延喜ノ時京民ノ概數假ニ二十萬人トスレバ、此時死亡ノモノコ、ニ四萬二千三百餘

○六十日間亡
四萬二千三百
餘人

○兵庫築島

皇代記。承安二年壬辰平相國福原和田治始築御島泊

山槐記ハ中山内府忠親撰ム

トスルハ實ニ未曾有ノ巨害ト謂フベシ

如是院年代記ニ第八十代高倉、承安三^癸己年築兵庫島、兵庫ハ帝京ヲ控ヘ山陽西海南海ノ諸道ヲ扼シ畿内最一ノ要地トス、清盛嘗テ此地ヲ相シ據テ以テ永世ノ計ヲ爲ス且本港ヲ増築シ通航ノ便交易ノ利ヲ圖レリ源平盛衰記ニ承安三年癸己此島ヲ築造シ翌年怒濤ニ逢テ破壊セシヲ尋テ再築セルコトヲ載セタリ

山槐記ヲ閱スルニ治承四年三月五日ノ記ニ築港ノ官符ヲ舉ク亦以テ當時官造工事ノ一斑ヲ見ルベキ者トス治承四年二月廿日太政官符太宰府廳下知管内諸國雜物運上船楫取水手下向時人別三箇日勤仕攝津國大輪田泊石椋造築役事右得入道前太政大臣家今日解狀備謹考案内輪田崎者上下諸人經過無絶公私諸船往還有數而東南之大風常扇朝暮之逆浪難凌是則無泊之所致也爰近年占攝州平野之勝地爲

○波勢常險石
掠不全

遁世退老之幽居、依其境之相近、開此崎之爲要、方今仕數代之
聖座、飽殊私之朝恩、遂登相國之官、更入菩提之道、寤寐所思者、
四海之靜謐、造次所求者、萬國之歡欣、是以老爲救諸國之歎、一
爲除諸人之怖、勵私力、雖築新島、波勢常險、石掠不全、自非擬國
々之功力者、爭得致連々之營築乎、伏尋舊記、粗訪故事、延喜聖
代下輪旨、仰山陽南海之兩道、修輪田船瀬之舊泊、聖代之政、尤
足因准、然則下知畿内河内和泉攝津並山陽南海兩道、諸國不
分庄土、不論權勢、令致不日之勤規、禦逆風之難、其人夫者、田一
町別畠二町別、各宛一人、可被雇召、於其時節、者各可依申請、但
播磨造小安殿、備前造大極殿、已以營大功、不可准他國、宜除留
支配庄園、至于東西海兩道、國々者、當國大小雜物運上之時、其
船楫取水手下向之次、慥任先例、役經三日、望請官裁、被下宣旨、
於件國々、任延喜例、被築彼石掠者、海波行路之怖畏、不聞官物

鑑賜抄。祇園
橋仁平四年甲
戌三月廿九日
於前供養之
歷代皇記。壽
永元年三月廿
九日抄阿聖入
祇園橋供養誌
浴名所圖會ニ
祇園ハ條橋ト
號テ祇園社條
々記録ニ鳥羽
院永治二年始
祇園四條橋爲
勸進聖沙汰目
之是常橋を架
するの流筋な
リ

私財之損失、永絶者、右大臣宣奉勅、依請者、府宜承知、依宣行之
府到奉行、正五位上行左少辨藤原朝臣、修理左宮城判官正五
位下トアリ、是ニ因テ見レバ、治承ノ比ニモ、輪田港修築ノ事
アリト知ラルレドモ、此時諸源東北ニ起リ、天下騒カシク情
盛尋テ亡ビシカバ、終ニ此工事ハ廢セシナルベシ、且西南海
路ノ如キハ、當時江口、神崎室、兵庫ナド、連稱シテ皆繁昌ノ港
津ナリシハ、源平盛衰記ニモ見ヘ、是ニ尋テ室積、葦屋、門司、關
新宮ノ濠等、何レモ船舶繫泊ノ地タリシコト、本朝無題ノ詩ニ
モ載セタレバ、航路各所ノ往來モ亦繁カリシナルベク、盛衰
記ニ俊寛ガ硫黄を取テ商人ノ舟着たるに取らせて、如形代
を得て日を送り、又平家物語長門本ニ硫黄を掘てれ、のづか
ら九州へ通ふ商人に逢て、是をあきなひ、なんとして過しか
どもトアルモ、皆此比西南地方商賈ノ船ノ往來セシヲ知ル

ベシ之ニ反シテ東北ノ航線ハ容易ニ其脉ヲ通ジ難ク治承ノ比僧文覺ヲ流刑ニ處スルニ京都ヨリ伊豆ニ至ル海路三十餘日ヲ費スニ至ル以テ此一方ニ在テ船行ノ尤難キヲ知ルベキナリ

○安徳天皇第一代八十治承ノ末海内鼎沸兵革相尋ギ東北ノ諸源競ヒ起リテ頻ニ京師ヲ窺フ平氏形勢ニ寄リ兵庫ヲ扼シ以テ是ニ據ル乃チ福原遷都ノ議成ル所ナリ

○福原遷都
保曆間記。治承四年八月古京ニハ人々ノ家々コホチテ鴨河桂河ニ入テ福原ヘ下リケリ其後新都ハイヨク繁昌ス街都ハイヨク荒行ク

源平盛衰記ニ去程に治承四年六月二日都を福原に移されて既に八月にも成けり平安の故郷は日に隨て荒行公卿殿上人上下北面に至るまで人々家々或は後に組或は舟に積で漕下る所々に家居しけれ共福都も未だならず有とある人は皆浮雲の思ひをなせり本より此所に住ける者は田島を失ひ屋舎を壊て愁へ今移居たる人は土木の煩旅宿を悲

○新舊兩都荒廢

て歎く路の邊を見れば車に乗べきは馬に乗り衣冠を著すべきは直垂を着たり都の振舞忽に廢してひたすら武士に不異又新都は繁昌人屋軒を並けれとも舊城は只荒にあれば行て適殘れる家々も門前草深ふして庭上露しけし空じき跡のみ多ければ雉堞の栖かと成替紫蘭の野邊とすまがひけると云フハ遷都ノ姿致ヲ記セシナリ又平家の一門皆上りければ他家の人々は留る者なし怪の童甲斐もなき下臈までも嬉く思て劣らじと走つゝきて上形勢の哀に面白き見物なり世にもあり人共かすへらるゝ輩皆移たりしかば其ゆかりの女房侍共雜色中間小舎入まで下り殿々家々悉く運び下して此五六箇月の間造立て資財雜物共今日迄も歩より舟より漕寄持寄つたるに又物狂敷いつしか角有ければ家をこぼち返さんまでは思ひもよらず何もかも打捨

○毀家爲善

セ上^ノけり云^フル再^ビ都^ヲ平安ニ返^セントキノサマヨシ
 テ衆^ヲ諸^ヲ舊^ノ新^ノ兩^ノ都^ヲ間^ニ彷徨^シ徒^ニ京城^ヲ案^タシテ生^民ヲ
 類^ハスエ過^ギサルモノアリシナリ
 百^練抄^ニ壽^永元^年平^月二^日京^中人^屋自^去夏^壞之^沽却^殆無^人家
 仰^使應^制止^之然^而猶^不拘^之ト云^フハ皇^帝紀^抄ニ壽^永元^年天^軍
 饑^饉去^年旱^魃疫^癘越^年之^死人^在墻^壁ト云^フコトモアリテ此^年
 饑^饉ノ爲^ニ屋^材ヲ薪^トシ賣^却スルモノアリシナリ此^時源^ヲ議
 仲^北越^テ風^靡シテ京^中ニ入^リ類^リニ狼^藉ニ及^ビシカハ洛
 民^悚怖^逃竄^シテ一時^營業^ヲ失^ラニ至^リシモ多^カルベク既^ニシ
 テ山^陽南^海及^ビ九^州ハ各^所賊^亂ノ巷^トナリ東^北二^道モ亦^翻亂
 ノ中^モテ^リシ^テ六^諸國^ノ通^津津^モ杜^塞シ物^品ヲ運^輸モ絶^ルニ至^リ
 リ平^安市^民ヲ此^變動^ニ際^シ其^業ヲ失^フモノ固^{ヨリ}幾^許ナ^ラシ
 知^ラズ挽^キ安^完ニ延^熬養^和ヲ飢^饉俱^ニ都^下ヲ衰^廢ヲ來^タセ^シ

○壽永之亂

○京中實錄

モノ亦^亦變^動ヲ^受ル^ル於^テ是^ヲ加^ワル^ニ福^原遷^都ヲ日^京中^ノ邸
 舍^ハ皆^毀テ新^都ニ移^セシテ幾^程モナク故^都ニ復^セシバカ^リ
 ニテ未^ダ舊^觀ニ回^ルニ及^バズシテ重^子テ此^亂アリ蓋^シ桓^武遷
 都^以來^經營^{スル}所^以遺^制此^時ニ於^テ多^ク亡^ビ京^坊六^十東^西二
 市^ノ如^昔亦^舊樣^ヲ存^{スル}アルナク京^商殆^ト殘^衰ニ屬^{セリ}
 ○後^鳥羽^天皇^第八^十文^治三^年ニ方^リ東^西播^亂既^ニ已^ミ源^ノ頼
 朝^惣追^捕使^トシテ勅^業ヲ函^左ニ開^キシヨリ海^内ノ右^族皆^幕府
 ニ朝^宗セシカバ鎌^倉ハ漸^ク盛^昌ニ赴^キ買^人騰^集市^易續^紛頗^ル
 繁^華ノ商^業要^地ト^スナリ北^條九^代記^ニ此^所ハ本^{ヨリ}遠^境
 邊^鄙ノ事^{ナレ}バ海^郎野^人ノ外^ニハ住^人ス^クナ^カリシニ今^此時
 ニア^タツテ大^名小^名多^少ノ人^集リ或^ハ市^ヲタ^テ或^ハ店^ヲ飾^リ
 家^居サ^ラニ軒^ヲキ^シリ賣^買諸^職ノ聲^聞ヲタ^テ小^路ヲ通^シテ山
 谷^村連^リレ^タニ號^ヲサ^ツケ絶^{タル}ヲツ^ギ棄^レタルヲ興^シ鎌
 倉^軒

○鎌倉別業成
 東^條。御^家人
 等^同持^宿館^自
 以^隣東^國而
 見^其有^道推^而
 爲^鎌倉^主所^邊
 鄙^而海^人野^吏
 之^外卜^居之^類
 少^之正^當于^此
 時^間間^巷直^路
 村^里投^號加^之
 家^屋並^瓦門^扉
 報^軒

草葉は創葉なり
 倉ノ荒蕪ヲ耕ハラツテ天下ノ草葉ヲ立給フト見ヘタリ然ルニ
 王城ノ地ハ數年戰亂ノ巷ニ在リシカバ東西ノ市場モ爲メニ荒
 廢シ其創痕未ダ癒ズシテ之ヲ前日ニ比スレバ殆ト衰態ニ陥ル
 モノアリ然レバ寂蓮ノ家集ニ隆房卿別當の時都のまつり事、
 な昔に數あれける時、七條に市のたもけるを、これはせければ、土の
 三條四條のあせせたりけるに、もとの如く、むらがりければ、ま
 つかはしめる、ホアリ立いにもへの跡をを頼むか、つまたの池に
 も鳥のかへめすむ世に「ト云フトコアリ公卿補任ヲ案ズルニ
 房檢非違使ヲ刺當サリシハ文治三年御リ同五年ノ間ニアレバ
 當時亂後東都凋弊シ百般ノ事古ニ及バズシテ交市ノ業モ其萎
 靡セシヨト相、知ラレタリ七條ノ市ト云フハ蓋シ東市ノ蹟ナル
 ベキカ
 東鑑文治二年二月廿五日の記ニ不善之者、稱北條殿、不知、
 記。世房權大
 附家知譜拙
 中世ノ撰ナリ
 黒川氏云々我
 物語ハ足利氏
 大納言(大理
 卿)殊に説を
 えらばると願
 なり
 百寮訓要抄。
 檢非違使別當

倉ノ荒蕪ヲ耕ハラツテ天下ノ草葉ヲ立給フト見ヘタリ然ルニ
 王城ノ地ハ數年戰亂ノ巷ニ在リシカバ東西ノ市場モ爲メニ荒
 廢シ其創痕未ダ癒ズシテ之ヲ前日ニ比スレバ殆ト衰態ニ陥ル
 モノアリ然レバ寂蓮ノ家集ニ隆房卿別當の時都のまつり事、
 な昔に數あれける時、七條に市のたもけるを、これはせければ、土の
 三條四條のあせせたりけるに、もとの如く、むらがりければ、ま
 つかはしめる、ホアリ立いにもへの跡をを頼むか、つまたの池に
 も鳥のかへめすむ世に「ト云フトコアリ公卿補任ヲ案ズルニ
 房檢非違使ヲ刺當サリシハ文治三年御リ同五年ノ間ニアレバ
 當時亂後東都凋弊シ百般ノ事古ニ及バズシテ交市ノ業モ其萎
 靡セシヨト相、知ラレタリ七條ノ市ト云フハ蓋シ東市ノ蹟ナル
 ベキカ
 東鑑文治二年二月廿五日の記ニ不善之者、稱北條殿、不知、
 記。世房權大
 附家知譜拙
 中世ノ撰ナリ
 黒川氏云々我
 物語ハ足利氏
 大納言(大理
 卿)殊に説を
 えらばると願
 なり
 百寮訓要抄。
 檢非違使別當

納言正三位建
 永元年六月廿
 三日出家法名
 最惠
 往柄天神緣
 起。白河天皇
 御宇承保二年
 四七條に當キ
 銅細工あり
 三長記ハ三條
 中納言長兼撰
 ○頼朝討秦衡
 笠井系圖。初
 使市爲交易以
 此圖不日安
 濫也頼朝其
 志爲平泉内檢
 非違使

取、七條細工、鑑ガトアルモ七條ニ市ノアリシ一證トスベシ
 又三條四條ニモ昔日ヨリ立市アリシト見ユ曾我物語ニ四
 條のまぢにてかねよきたちをかひとりと云フハ右云云
 四條ノ市ノ再興アリシ比ナルベシ又三長記ニ建久六年十
 月戊午今日極宮御五十日也云々向、東市、買餅、直米一石市極
加、市、例、也、ト云フヲ見レバ此時尙ホ東市ノ余波ハアリシ
 モノナラン
 又文治五年十一月八日頼朝藤原ノ泰衡ヲ討伐ノ後、葛西三郎清
 重ヲシテ奥州地方ヲ綏撫セシム清重反命スルニ際シ乃チ領内
 ノ開市ヲ感セラレシコト載セテ東鑑ニアリ抑、奥羽二州ノ地ハ
 境域千里昔時之ヲ蝦夷ト號シ朝廷待ツニ荒服ヲ以テス古制ゾ
 信夫以南ハ畿ヲ國府ノ公廨ニ充テ蒞田、以北ハ之ヲ鎮守府ノ兵
 糧ニ充ツ、歷世ノ天子屢征東ノ大軍ヲ下シ給フモ未ダ克ク平定

藤氏三世ハ清
衛垂秀衛

ノ功業奏大ニ成ルモ於テ夫者清衛以來兩國夫管領スルモノ三世一
百年朝家復東陸ノ憂ナキモノ、如キモ實ハ棄テ顧ルノ暇ナキ
ナリ是ニ於テ藤氏積年二州ヲ經營シ富強天下ニ冠絶ス賴朝平
族ヲ滅シ已ニ其意ヲ逞フスニ雖モ泰衡ヲ獲ザレバ未ダ以テ其
業ヲ成ス能ハザルモノナリ是賴朝が奥州征討ヲ以テ宿志ヲ成
ル所以ナリ而シテ賴朝ニ州ヲ舉ケ更ニ葛西清重ヲシテ此地ヲ
ニ止ル假ニ檢非違使ノ事ヲ行ハシム清重乃チ國民ヲシテ開市
ノ事ヲ以テスルモノハ二州壤土邊陲ニ位ス雖モ區域廣延加
ルニ黄金絹綿布帛米粟ノ類物産最多シトス而シテ貿易ノ業之
ヲ他邦ニ轉レバ尙ホ未ダ其宜キヲ得ザルモノナリ故ニ清重各
所ニ緝市場ヲ定テ交通ノ便實買ノ利ヲ興シ以テ物貨滯塞ヲ解
チ調和シテ於今兩國ノ生民永ク千古ノ夷俗ヲ脱シ其治之上
國ニ一ニ並ル職隨テ商賈隨テ相通スルヲ得ルモノ抑亦賴朝征東

○陸奥開市場

○禁宋錢

○内外兩錢
金塊集。寄金
「あふことこの
なき名をたつ
の市にうるか
ねて物いふ我
身なりけり」

ノ功ト稱ハザルヲ得ザルカ也
法曹至要抄ニ建久四年七月四日、宣旨云、應自今以後、永從停
止宋朝錢貨事、存左大臣宣奉勅云々、自非止錢貨之交關者、爭
得定直法於和市哉、仍檢非違使並京職、自今以後、永從停止者
トアリ、東鑑、建久四年正月二十六日ノ記ニ、去年十二月至
十日、偏止錢貨之由、有其沙汰之旨、一條殿被申送ナド見奉、更
是等モ單ニ錢貨トスレドモ蓋シ亦宋錢ノコトヲ指スナラ
ン、天德以來、邦錢ノ鑄造既ニ絶ヘ、宋錢隨テ輸入スト雖モ、此
時尙ホ未ダ甚シキヲ加ヘズ、内外ニ錢動モスレバ價格差異
ヲ生シ、貿易不便ナルヲ以テ、今外錢ヲ停廢シ、邦錢一途ニ歸
セシメントスルモノアリシカ、戰亂ノ世ニハ、渾テ米穀ヲ重
フシ、金錢ヲ輕シトス、然レドモ四海稍靜平ニ赴クニ隨ヒ、人
情漸ク嗜好ニ流レ、物貨市ニ備ハリ、交易ノ業始テ盛ナリ、此

○品物賣買

於テカ通貨ノ用隨テ多キヲ要スルハ亦自然ノ勢ト謂フ
 ベシ是ヨリ先キニハ世間ノ通貨欠乏ニ及ブト雖モ物貨ノ
 賣買多ク行ハレシモニアリ源平盛衰記ニ小袖を以て龜を
 買取り直垂を賣に置き酒肴を買せてナド見ヘタリ東鑑ニ
 行幸者概盡而雖失度投甲冑買取小船云々行平陳申云在國
 之程失兵糧之計經日數之間爲扶郎徒等沽却彼輩之甲冑以
 平物具訖ト云フハ下河邊行平ガ西海ノ陣中ニ戎器ヲ以テ
 軍船兵食ヲ交易セシコトナリ又此用於九國名譽之由兼以
 風聞其主不慮之外沽却之行平喜之折節着小袖二領仍一領
 脫之替之ト云フハ衣服ヲ以テ戰具ニ交換シタルコトナリ
 又元曆二年五月ノ古文書ニ直米一斗八丈絹四丈ヲ以テ一
 段ノ田圃ニ沽却シ承元二年正月廿二日直現米數解(虫喰)ナ
 一段ノ田圃ニ賣却セシコト東鑑文治六年二月十日遠江守

○衣服易戎器

和名類聚抄。

銀其美者謂之
 銀又南ニ作ル
 或ハ歌ノ意ト
 云フ

好古日錄。南

廷古書ニ散見
 ス久安二年四
 月二十二日進
 上銀南廷瓦
 (直六百匹)

○物價

○關渡海運

義定申狀ニ臣於不足材木悉交直米金沙汰宛都鄙之間候
 畢ナドアルハ皆物品ヲ以テ價直トナセシコトヲ云フナリ
 又金銀ハ此比モ概乎贈遺ノ料トスルナリ黃金千兩砂金一
 裏或ハ千兩八百兩三百兩百兩等禁廷奉獻及ヒ佛寺施入ノ
 品種トスルコト東鑑源平盛衰記其他ノ書中往々載タリ又
 銀二百兩南銀一百兩廷一百二百ト云フコトアリ南銀南廷
 ハ後ニ云フ丁銀ノ類ナルベシ
 東鑑建久三年十二月二十日相摸國吉田莊貢租染衣五切代
 百文各廿上品八丈絹六疋各廿文細布九反内上七反代大
 藍摺布三十反代六文紺布二反代四率駄二疋代四十持者七人
 代五十トアリ是等ノ種品固ヨリ租額ト云フト雖モ價格頗
 ル低キニ似タルハ此比ノ時價尙ホ其貴ラザルヲ知ルナリ
 驛政ノコト延喜ノ遺制ニ據ルニ當時尙ホ郵亭稀疎ニシテ

此間軍事トハ
蘆ノ平家追討
ノコトヲ云フ
ナリ

延喜民部式ニ
相模國上ヲ二
十五日トシ下
ヲ十三日トス
陸奥國上ヲ五

徳施ノ利便未ダ宜者未得セルモノハ東鑑ニ文治元年十
一月二十日戌申今日二品被定驛路之法依此間軍事上洛
御使難色等伊豆駿河以西迄千近江國不論權門庄々所傳馬
可購用之且檢到來所可沙汰其根之由トアルヲ始メトシテ
東西ノ來往頗ル繁多ニ至リ東海一途ニ其驛亭ヲ加ヘ路程
亦經營スルモノ亦少ナラズ其驛旅ノ便者得タルコト固共
リ蓋カレシモ他ノ諸道ノ如キハ山川處々ニ横ハリ往來尙
亦阻滯難水舟ノ及ルヲ免レズ平家追討ノ時範頼が西國
ヲ鎌倉ニ贈ル文書某年十一月十四日ニ發スルモノ翌年正
月本日ニ達シ其間五十餘日ヲ費スニ至リ又頼朝奥州征伐
ノ時七月廿八日京都發程ノ脚方九月八日ニ奥州陣取圍ニ
着ス亦三十九日ニ歸ルモノノ途上或ハ阻格ノコトナシ
蓋カレシモ驛陣悉數ノ際尙水且斯人如キ日子ヲ要セ其

十日トシ下ヲ
二十五日トス
何レモ京都ヨ
リ其國府ニ至
ルノ行程ナリ
上ト云フハ尋
常ノ旅行ニシ
テ下ト云フハ
飛脚ノ類ナル
ヘシ

○東奥航路

通傳ノ難滞實ニ尋常ノ事ナリト雖怪ヤシムルニ足ルモノナラズ
カレ而シテ當時概テ京師ヨリ鎌倉ニ達スル行程飛便五箇
日頃ハ七箇日トス延應元年五月廿三日六波羅ノ飛便二十
日未刻出京四箇日馳着殆如飛鳥トアリ其後寛元四年壬四
月一日北條經時卒去ノ飛便京都ノ行程三箇日タルベシ
云フコト亦東鑑ニ見ヘタレバ東西二府ノ間道路漸次開通
セシハ察スベクシテ通商其便ヲ得ル亦推知スベキナリ然
ルニ東北地方海路ノ如キ東鑑ニ載スル所ヲ見ルニ是ヨリ
先キ陸奥ノ基衡ガ邊佛ノ料ニ生美絹練絹ヲ以テ數隻ノ船
舶ニ積載シ京師ニ上セシコトヲ記セリ此等ノ物貨ハ蓋シ
亦常陸洋ヲ通航シテ東海波上ヲ往來セシカ此一條ヲ筆セ
シ者畢竟追記ニ遺ヤザレバ果シテ然ルヤ然ラサルヤ尙ホ
疑ヒテ存スルモノアリ而シテ續日本紀寶龜七年七月令造

今井ハ今武藏國諸郡ニ今井村アリ是ヲ云フカかめなシハ武藏國足立郡ニ尾有村アリ此邊ニアリシ地名ナリシカ

○西條船

安房上總下總常陸四國船五十隻置陸奥國以備不虞トアルハ既ニ是等ノ地方ヨリ航路開通セシモノトス然レハ獨リ軍船ノミナラス其運漕船ノ如キ商賣船ノ如キ夙ニ東北ノ外洋ヲ渡テ彼我往來セシヨト亦知ルベキアルナリ而シテ鎌倉開創以來東西航路ノ期程頗々タルコト察スベク東鑑元暦二年正月十二日ノ記ニ征討平氏兵船三十三艘日本海干伊豆國鯉名奥并妻真洋被納兵糧米仍早可解覽之由マ義經記治承四年九月十一日頼朝下總ヨリ武藏入賑ル條ニ千葉介萬西兵衛南入は江戸水部を助むとて知行所今井栗川かめなむとせしむといふより海人の釣舟をのぼせ江戸太郎が知行所なりゆき若濱に折節西國船の着たるを數千艘集め三日の中に浮橋を組で云々又源平盛衰記ニ折節舟置國住入近藤四郎國澄ト云々昔年貢運送ヲ爲ニ南海道ヨリ

○陸奥貢金

舟ニ乗テ上ナル者辰月舟ニ乗テトアリ此條ニ據リテ見レバ西海地方ノ船舶モ早ク相武ノ邊ニ通ゼシモノアリテ其實價ノコトモ彼我交渉セシテ察スベキモノアルベキナリ又東鑑ニ文治二年四月七日甲寅法皇御灌頂用途等事爲京進被出解文云々於駿河上總兩國御米者先日既出國之由斯言上也此外絹布等自陸路可相具同年十月一日甲戌陸奥國今年乃貢金四百五十兩秀衡入道送献之ニ品可令傳進給之故也同四年五月十四日乙亥泰衡京進貢馬貢金桑絲等昨日着大磯驛トアリ黃金絹布ノ如ハ脚夫ヲシテ陸送セシハ古例既ニ然リ但シ米穀其他粗大ノ者ハ渾テ船送ニ附セシナリ又東鑑ニ建曆二年二月二十八日乙巳相模河橋數箇間朽損可被加修理之儀云々爲ニ所御參詣要路無民庶往返之煩其利不一不顛倒以前早可加修復之旨被仰出トアリ且此橋ハ

○相模河橋

與正菩薩傳。或時追道昭道賀之跡造立字

怡木津之大橋
云々與正八建
仁元年生ルト
アリ

○商舶入來

寶物集ハ平判
官帳頼辨

元久九年新造セラレシコトヲモ載タリ
海外貿易ノコトハ當時ノ遺書ニ散見スルモノ多カラズ其
蹟ノ今日ニ徴スベキ事亦甚稀ナリ東鑑文治元年十月三十
日源範賴ガ西國ヨリ鎌倉ニ來着セシ條ニ唐鏡唐綾絹唐墨
茶碗具唐筵其他各種ヲ法皇及ビ賴朝政子ニ獻ゼシ事アリ
是範賴ガ西海ノ戰ヲ果シ尋デ九州ヲ鎮撫セシ日部内ニ於
テ得シ所ノモノ即チ支那貿易ノ物貨ナルベシ然レバ當時
博多津ナドニハ外船常ニ往來シテ貿易ノコトハアリシナ
ラシ目吉山王利生記ニ建久七年春使を大宋國に發す其船醫
難なし類多かりける中に最初ニ明州に着たり即不慮に經本
に尋あふて奉請すといへども價不足奔馳しける所に本朝の
船二艘忽然として同津に着り傍輩に談じて奉請する思の
をもちて茶ヲ五艘ヲ船トハ益シ入宋ノ商舶ナルベシ寶物集

○市屋廊

秋風抄。香咲
のおきなの雪
の腕車かけし
に牛くるしみ
て市の外にヤ
すめりト云フ
ハ信實朝臣ノ

ニ天竺に商人ありもろくのたからをもとめむが爲五百
人の友をやして風に乗かせて舟を出し大海を渡る程にト
云フハ固ヨリ寓言ナレドモ亦印度地方ノ商估ガ四方ニ來
往セシモノヲ云フナリ又元暦二年六月十四日對馬守親光
ガ平軍ヲ高麗ニ避ケ既ニシテ其本土ニ還ルニ臨ミテ高麗
王殊ニ別ヲ惜ミ財寶三船ヲ副送セシト云フコト東鑑ニア
リ親光對馬ニ在テ嘗テ彼邦ト通ゼシナルベク對馬人ノ朝
鮮ニ出入スル亦世々絶ヘザリシナリ
○土御門天皇第百八代百鍊抄ニ建仁元年九月二十九日今夜市屋
廊并近邊小屋等燒亡トアレバ此比モ市司ハアリテ其在ル處ヲ
市屋廊トハ云ヒシナルベシ京中販賣ノ業猶ホ東西市場ノ遺制
モアリシコトナルベシ
○順徳天皇第百八十四代東鑑ニ建保三年七月十九日町人以下鎌倉中

時ノコトナレハ此比市ト云フハ四條ナトニアリシナルヘシ

○鎌倉商估之數

古事談。小松帝親王之開借用町人物御即位之後各參内實申仍以納殿物被返與トアリテ町人ノ稱古シ又結城殿場語ニ下々ノ町人商人ニ知行ヲ取ラセタ

諸商人可定員數由被仰下朝光奉行之トアリ文治元年十月頼朝俄ニ上洛ヲ企ツ隨後ノモノ即千千葉常胤以下ノ宗族二千九十六名ヲ得タリト云フコト亦東鑑ニ記セリ創業ノ際猶ホ且ツ此ノ如キ濟々タルヲ得タリ況ヤ鎌府開始以降殆ト三十年四民ノ幅濶スルモノ歳ニ多キヲ加ヘ交市ノ繁賑亦知ルベキナリ此際ニ方リ或ハ風俗漸ク流レ或ハ士藉ニシテ市人ニ類シ其利ヲ爭フ如キノ動作ナシトセズ其弊或ハ武力ヲシテ衰弱ニ陷ラシムルノ狀ナキヲ保シ難キガ故ニ今此規格ヲ設ケ士族市人ノ區分ヲ判定スルニ非ラザルカ亦北條氏武治ヲ慮ルノ一手段ナルベシ貞應四年ニ記セシ海道記ニ此所ノ景趣は海あり山あり水木たよりあり廣にもあらず狭にもあらず街衢のちまたかたかくに通せり實に群聚たなじ邑をなす郷里都を論じて望まづめづらしく、豪をあらび賢をあらぶ門柳しきみをならべて地又賑へりお

マフトアリ町人ハ市籍ノ人トシ
海道記ハ源光行ノ紀行ナリ
世ニ鴨長明カ撰フ所トスルハ誤レリト云フコト群書一覽ニ辨セリ
所典。諸市分掌百族交易事
○承久之亂

るく將軍の貴居を垣間見れば、花堂たかくおしひらひて、翠簾の色、嘉氣をふくみ、又朱欄妙にかまへて、玉砌のいしすへ光をみかく、春にあへる鶯の聲は、好客堂上の花にあざけり、あしたをねくる龍蹄は、參會門前の市に嘶ゆを論せず云々、東南の角一、道は舟楫の津商賣の商人百族にぎはひ、東西北の三方は、高阜の山、屏風のごとくに廻て所をかざれりトアルモ、鎌倉府中繁榮ノ一斑ヲ見ルベキモノニシテ、商賈ノ幅濶セルサマ亦知ルベキモノトス既ニシテ承久ノ擾亂アリ王師克タズ關東ノ大軍京師ニ入ルモノ十九萬餘騎京民震駭スト云ヘバ其他ノ事亦察スベシ三帝四方ニ蒙塵シ給フ程ナレバ多クノ公卿ハ北條氏ノ爲メニ擯ケラレ京方ノ武族罪ヲ得シモノ亦少カラズ新帝即位アリシカドモ是ヨリ以還朝廷ノ事ハ決テ北條氏ニ仰グニ至リ武士ノ絶テ參朝スルモノモナク内裏モ一層寂カヘリテ京洛ノ繁榮昔日ノ如

クナラズ商估ハ追次就業ノ便ヲ失フヲ恐レ或ハ轉ジテ鎌倉ニ入リシモ多カルベキナリ

○後堀河天皇第八十代東鑑脱漏ニ嘉祿三年閏三月十七日諸國守護地頭所務之事貞應二年任御下知狀致沙汰市津料供給雜事赤銅等事可停止守護所張行事以下條々被觸仰ト云ヘリ市津料トハ開市渡津ニ課スル税目ナルベシ貞應二年ノ記ハ今存セザレバ其顛末ヲ知ルニ由ナシト雖モ市津料ノ如キハ舊地頭ノ所得ニ屬スルモノナレバ守護人ノ收入スベキモノニアラズト其張行ヲ制セラレシモノナルベシ

建武式目ニ諸國新關並津料事成諸人往來上下之煩之條太以不可然早本新共可被停廢之歟ト見ヘタリ

此比世上無事ニ東西靜穩ナリシカバ諸國ノ市場モ物貨彙集シ賣買ノ事亦多カルベシ海道記ニ駿河國にうつりぬ前島を通る

○各地市場

東鑑紀行ハ仁平三年八月源親行撰ム

になみハたゝねとも藤枝の市をとをれば花咲かゝりたり前島の市には波の跡もなしみな藤枝のはなにかゝりてトアルハ前島藤枝二市ヲ云フナリ又東關紀行ニかやつの東宿の前を通れば、ろころの人あつまりて、里もひらくばかりに、のゝしりあへり、けふハ市の日になむ、あたりたるとはいふなる、往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づとも、かのみてのみや、人にかたらんと、よめる花のかたみには、やうかはりて、れぼゆ、花ならぬ色香もしらぬ市人のいたつらならてかへる家つと、又諏訪明神繪詞に正應の比當國の御家人に小諸太郎と云もの當社順役の時、下部下女等隣國上州に越て、朝の市をすぎけるに、關東の執權貞時朝臣の管領しける果圓號三平右衛門代從人等牛を飼て、下女にれいかけたり、ナド云フモ皆各所立市ノアリシヲ見ルベキモノナリ又百練抄ニ寛喜二年六月廿四日、以錢一貫文可被直一石之由、被下宣

諏訪明神繪詞
ハ一品尊道親
王撰ム
平圓ハ長崎氏
北條家内管領
ト號ス
○一石米價銀
一貫文

法曹至要抄。
錢直法任律久
三年八月六日
宣旨狀一貫文
別以米一斛爲
正物於利分者
云々

○船舶廻漕

旨ト云フハ東鑑ニ寛喜二年六月十日武藏國在廳等注申之去九
日辰刻當國金子郷雪交降又同時降雹同十六日美濃國飛脚參申
之去九日辰刻當國薛田庄白雪降云々涼氣過法穀實不登歟ナド
アルヲ以テスレバ時令不調米價騰貴ノ兆アルヲ慮リ今此價格
ヲ定メラレシカ

○回船式目

式目追加ニ寛喜三年六月海路往返船舶或漂倒或遭難風自
然被吹寄處々地頭等號寄舟無左右押領之由有其聞所行之
企甚以無道也縱雖爲先例何以非據可備證據哉自今以後停
止押領彼損物已下慥船主可被糾返也若猶遁事左右不被拘
制法者可被注進交名之狀ト云フハ被難ノ船舶ヲ押ハ物貨
ヲ掠ルノ弊ヲ禁ゼシナリ相傳フ貞應二年三月北條義時海
運船則三十條ヲ定ム乃チ廻船式目ト云フ今之ヲ閱スルニ
其辭體亦當時ノ物ニ類セズ蓋シ後人ノ托シテ以テ構造セ

○鎌倉諸物

○鎮西船

シナラン而シテ回漕船舶ニ庇保ヲ加フルノ事ハ古來之ナ
キニハ非レドモ殊ニ其法ヲ設ケラレシハ乃チ此時ヲ以テ
創始トスベシ四方航運ノ業是ヨリ起リ物貨出入ノ道亦開
通セシモノアラン廻船式目ノ如キ後世其道ニ行ハレタリ
是ヨリ先キ海道記ニ申の斜に湯井の濱に落着ぬしばらく
休みて此處をみれば數百艘の舟ともつなをくさりて大津
のうらに似たり千萬宇の宅軒をならべて大淀のわたりに
とならずトアリ又是ヨリ後東鑑ニ弘長三年八月二十七日
鎮西乃貢運送船六十一艘於伊豆海漂濤ト云フチミルニ海
程頗ル通シ四方廻船ノ繁多ナリシコト推知スベク因テ想
フニ海内ノ產品亦多ク鎌倉府中ニ湊集シ其販鬻ニ從事ス
ル者少カラズ商業繁盛ナリシコト亦已ニ察スルニ足レリ
庭訓往來ニ鎌倉ノ詠物ト稱スルハ京師鎮西ノ商人等衆庶

ノ需ル所ニ應シテ綾、羅、錦、繡或ハ海外ノ諸物等ヲ齎シ來リ
之ヲ鎌倉ニ鬻ク之ヲ他所ニ賣買スルモノニ比スレバ皆殊
ニ住品ナリシナリ

○毀屋爲薪
百練抄ニ寛喜三年九月十九日近日壞取小屋成薪賣買事可停止
之由仰武士并使廳被糺斷ト云フハ東鑑寛喜三年七月ノ記ニ今
年天下大饑饉又二月以來洛中洛外疾疫流布貴賤多以亡卒五月
七日ノ記ニ此間炎旱涉旬疾疫滿國トアリ又皇帝紀抄ニ此年五
月二十一日風聞近日飢饉甚之間京中在地人等合力推入富家飲
食之後犯借錢米等數多分配取事所々多聞ト見ヘタレバ當時凶
歲疾疫有テ世間殊ニ困弊セシヨリ一時ノ食ヲ求メンガ爲ニ家
屋ヲ壞チ賣買セシモノニテ斯ル非常ニ遭遇シ京中ノ商業モ亦
衰殘ヲ極メシコト知ルベキナリ又東鑑ニ寛喜四年十二月二十
九日和市賣買之間奸謀之輩横行所々可加懲肅ト云フハ京中守

東鑑。寛喜四
年四月十四日
今日改元昭書
到來去二日改
寛喜四年爲貞
永元年トアレ
ハ寛喜四年ハ
貞永元年ナリ

高麗高宗十四
年ハ本邦後堀
河天皇安貞元
年ニ當レリ

直感ハ三代實
錄ニ太政大臣
直感(以藏院
爲直)トアリ
公務ヲ執ルノ
房舎ナリ

東國通鑑ハ朝
鮮徐居正等撰

衛ノ武人ニ示ス所ニシテ都下販鬻ノモノ、不肅ナルヲ制セシ
ナリ寛喜以降既ニ連年ノ凶荒ニ際シ世間衰頹ヲ極メシカバ或
ハ風俗壞亂ノ弊俗ナシトセザルモノアリ當時商賈ノ輩ニ至リ
テハ譎射射利以テ其欲ヲ逞フスルモノ殊ニ多キヲ加ヘシナラ
ン東國通鑑高麗記ニ高宗十四年五月日本國寄書謝賊船寇邊之
罪仍請修好互市ト云フハ百練抄ニ安貞元年七月二十一日於關
白直盧有議定事左大臣以下參入去年對馬國惡徒等向高麗國全
羅州奪取人物侵凌住民事可報由緒之由牒送太宰少貳資賴不經
上奏於高麗國使前捕惡徒九十人斬首偷送送牒云々我朝之耻也
牒狀無禮トアレバ此時高麗ニ使ヲ遣セシハ太宰府ノ矯作ニ出
テ本朝ノ意ニハアラザルナリ況ヤ當時朝鮮ニ對シテ互市ノ事
ハナカリシナリ東鑑ニ貞永元年閏九月十七日鏡社住人渡高麗
企夜討盜取數多珍寶ト云ハ邦人が朝鮮ニ害ヲ與ヘシモノナリ

○邦商到朝鮮

又東國通鑑高宗三十一年春二月有司劾奏前濟州副使盧孝貞判官李斑在任時日本商船遇颶風敗於州境孝貞等私取綾絹銀珠等物徵孝貞銀二十八斤斑二十斤流于島ト云フハ此比モ我商估ガ常ニ彼地方ニ往來セシコト知ラレタリ

○停商人補代官

○四條天皇第七代東鑑ニ曆仁二年九月十一日諸國地頭等以山僧并商人借上輩補代官事一切被停止是爲貪當時之利潤不顧後日之煩以如此輩補代官之間偏念公物備只廻私用計之由依有其聞也ト云フコトアリ代官ハ農市ニ政等ヲモ掌ル職吏ナリ借上ハ錢ヲ借シテ利ヲ得ルモノナリ當時豪商等ノ地頭ニ馴レ或ハ其財物ヲ稱貸スルモノアリシヨリ積弊ノ赴ク所或ハ其人ヲ擧ゲ以テ我職權ヲ分掌セシムル等ノ事アリシナラン是等ノ輩ヲシテ固ヨリ民政ニ與カラシム可カラザルガ故ニ今此令ヲ布キシモノナルベシ

○停米穀外輸

○後深草天皇第九代百練抄ニ寶治元年十一月二十四日被宣下西國米穀渡唐停止事ト云フハ未ダ其因由ヲ詳カニセズト雖モ寬喜以來年穀常ニ登ラザルコト多シ當時邦内凶歉ノ虞アルヲ以テ米穀輸出ヲ禁ゼラレシカ既ニ輸賣ヲ制スルヲ見レバ其米穀ノ外送アリシコト亦久キヲ知ルニ堪ヘタリ又東鑑ニ寶治二年

○商人式數

四月廿九日鎌倉商人等可定其式數之由其沙汰外記太夫倫長奉行之トアル式數トハ商估ノ遵守スベキ格式定數等ヲ云フカ或ハ商賈ノ特權トスル後世所謂株式ノ如キモノヲ指スナラント云ヘリ此時ニアリテ青砥藤綱等既ニ其職ニ任シ鎌倉頗ル民政ニ名アリシ比ナレバ商業モ亦規格ヲ立テ其擴伸ヲ圖リシナルベシ又世ニ傳フ藤綱始テ爲替金券ノ方法ヲ制シテ通商ヲ便ニスト未ダ是非ヲ知ラズト雖モ亦以テ當時藤綱ガ販鬻ノ事ニ傾念セシノ一證トスベキカ百練抄ニ建長元年十月十八日於記錄

○青砥藤綱

○下知估價

大理ハ司法官ノ唐名ナリ此ニハ檢非違使ナトヲ指スナルヘシ

保々奉行ハ後世ニ町奉行ト云ヒシモノナリ

所被定估價法同二年六月十三日大理召商人等被下知估價同五年四月廿一日於仙洞被評議沽價法ナドアルハ皆禁中ニ物價ノ詮議アリシナリ五代帝王物語ニ建長元年三月二十三日京中大燒亡又如是院年代記ニ建長四年壬子大飢米升百錢ト云フコトモ見ヘテ當時此等ノ變異ヲ呈シ物價ヲ動カスモノアリケレバ今此ノ事ニハ及ビシナルベシ

東鑑ニ建長四年九月三日辛亥鎌倉中所々可禁制沽酒之由仰保々奉行人等仍於鎌倉中所々民家所註之酒壺三萬七千二百七十四口云々又諸國市酒全文可停止之由又十月十六日丁卯沽酒禁制殊有其沙汰悉以被破却壺而一屋一壺被宥之但可用他事不可有造酒儀若有違犯之輩者可被處罪科之由固定下之トアルハ建長四年七月近國旱魃之間青苗悉黃枯庶民莫不愁之トアリテ蓋シ飢餓ノ災ニ因ルナルベシ

○鎌倉市屋

東鑑纂。延應二年二月二日鎌倉中停止ノ條中ニ下々ト云々賣買事トアリ

○物價減直

又東鑑ニ建長三年十二月三日戊午鎌倉中在々小町屋及買賣設之事可加制禁之由日來有其沙汰今日被置彼所々此外一向可被停止之旨嚴密觸之被仰之處也佐渡太夫判官基政小野澤左近太夫入道光連等奉行之鎌倉中小町屋之輩被定置處々大町小町米町龜谷辻和賀江大倉辻乘飛和坂山上ト云フハ鎌倉開府以來買人四集各自其業ニ就キ肆店ノ制未ダ整肅ナラズ或ハ武族市人其居相混ズルモノアリ故ニ今之ガ區分ヲ明カニシ以テ市域ヲ定ルニ在ルノミ又是ヨリ先キ東鑑寛元三年四月廿二日ノ記ニ保司奉行人可存知條々作町屋漸々狹路事ト云フコトアリ亦以テ商估ノ不肅ヲ制スルヲ見ルベシ東鑑ニ建長五年十月十一日被定利賣直法其上押買事同被固制禁小野澤左近太夫入道内島左近將監盛綱入道等爲奉行薪馬務直法事炭一駄代百文薪三十束三把別萱木一駄八束代五十文藁一駄八束代五十文穢一駄俵百文

山東遊覽記。
鎌倉ノコトヲ
云フ條ニ材木
座ハ濱邊の漁
村ヲ云トアリ

昆陽漫錄ハ青
木敦書撰ム

一文代五十文、件、雜物近年高直過法、可下知商人者、又和賀江津材、木事近年不法之間、依難用、造作被定其寸法、所謂樽長分八尺、若七尺、令不足者、令點之、奉行入可申子細之由、ト云フハ薪以下、各種ハ住食二事ニ在テ欠クベカラザルノ要具トス、又藁糠二品ノ如キハ馬糲ノ料ニ供スルモノニテ、鎌倉ノ兵制騎戰ヲ以テスレバ、殊ニ必需ノ糧物ユヘ臨機所分ヲ加ヘシナラン

昆陽漫錄ニ此事ヲ記シテ、建長ノ比大抵米一石今ノ升一正銀五匁ニ過ベカラズ、正銀一匁錢百文ニ當リ、錢百文米二斗ニアタレリ、此價ヲ以テ考ルコト左ノ如シ、炭一駄代百文ナレバ、大抵一駄ヲ三十貫目トシテ、六貫目入ノ炭五俵一駄ニテ、米二斗ナリ、薪三十束三把別ニ百文ハ別ハ、今ノ每ノ意ニテ、十把ヲ一束トシテ、内三把コトニ代百文ト云フコトニテ、一束ハ錢三百三十三文ナリ、薪二駄ノ價ヲ炭一駄ニアテシ

内官長曆官符。
嘉祿三年七月
事始、祿料有給
一頭工友次二
頭工、真包三頭
ニ近、雨各白布
二端（但以前
代錢六文也）
小工卅人各一
端（代錢全上）

トミユ一薪ハ大把ニテ、一把半ヲ薪二駄ニテ、米二斗ナリ、サテ薪拾束トアゲズシテ、三十束トアグルハ、一束ハ六駄一把ニテ、十束ハ六十六駄一把、三十束ハ二百駄ニシテ、端ナキユヘナルベシ、萱木一駄八束、五十文、萱木ハ萱草ノコトナルベシ、此時板屋根少ク、萱葺多キユヘ、萱貴クシテ、大束ニテ八束三十貫目アルヲ一駄トシテ、薪一駄ニ充テ、米一斗ニアタルナリ、藁一駄八束、代五十文、コレモ萱ト同シコトニテ、藁屋根多ク、其外藁ノ用甚多キユヘ、藁甚貴クシテ、大束ニテ八束三十貫目一駄トシテ、薪一駄ニアテ、米一斗ニ當ルナリ、糠一駄俵一文代五十文ハ、俵ノ代一文ニアタルナルベシ、糠一升大抵重サ百四十目粉米ヲサリテ糠三十貫ヲ一駄ニスレバ、糠二石一斗四升二合五夕餘ニテ、米一斗ニアットナリ、ハ今貫目ニカマハスハ、斗糠一升八錢二分三厘三三ニテ、二斗二入三俵トス

○解物價減定之令

文三分三厘三ニアタルト見ユ未ダ必シモ其當ヲ得タリトセザルモ暫ク記シテ以テ參閱ニ供ス

又建長六年九月十七日、雜物等依有高直之間被定其法、今日所被施行也。炭薪、萱、藁、糠、事高直過法之間、依爲諸人之煩、先日雖被定、直於自今以後者、不可有其儀、如元可被免交易、但至押買并迎買者、可令停止也。以此旨可被相觸相摸、國如然之物交易所也。ト云フハ、曩ニ炭薪以下ノ品種ヲシテ其價格ヲ減ゼシメシハ蓋シ商估ノ權買ニ出ルノ嫌ヒアシリガ物價ノ昂低自然ニシテ商估ノ故意ニアラザルヲ知ルヨリ更ニ此令ハアリシナラン迎買ハ誘買ナルベク交易所ハ開市場ナリ又東鑑ニ建長六年四月二十九日、唐船事有沙汰被定其員數、即今日被施行之、唐船者五艘之外、不可置之、速可令破却ト云フ唐船ハ支那其他ノ來往及ビ貿易ノ爲ニ備フル船舶ナリ東鑑、建保四年十一月二十四日可修造唐船之由仰

○海外往來船

宋人和卿ト云フニテ知ラル、ナリ今其船數ヲ減定セシハ其費途ヲ節セシモノニテ當時貿易ノ制、國用ヲ察シ以テ有無ヲ換フルニ止ルモノトス乃チ茲ニ船數ヲ限リ其多寡ヲ定ル所以ナリ東鑑ニ建長五年九月十六日、今日被定新制事、延應法之外被加十三箇條、關東御家人并鎌倉居住人可停止過差條也、是去七月十二日、所被宣下也、ナドアレバ當時上下守約ノ爲ニカク輸入物貨ノ制限ヲ立テラレシモ亦未ダ知ルベカラザルナリ

○市城更正

○龜山天皇第九十代東鑑ニ文永二年三月五日、鎌倉中被止散在、町屋等被免箇所、又堀上家、前大路造屋、同被停止之、且可相觸保々之旨、今日可被仰付于地奉行人等、小野澤左近太夫入道也、町御免之事、一所大町、一所小町、一所魚町、一所穀町、一所武藏大路下、一所須賀江橋、一所大倉辻ト云フハ曩ニ建長三年鎌倉府中漫ニ市店ヲ開キ市場ヲ設ルヲ制スルノ令アリシヨリ茲ニ十五年府内繁賑

○通錢

ニ隨ヒ商業隆昌ニ赴キ市域或ハ漸ク紊亂ニ屬シ嘗テ區畫スル所ヲ變更スルモノナシトセズ故ニ今全府九箇所ノ市域ヲ定メシモノニシテ散在ノ町市ト云フハ或ハ新市モアリシナラン

東鑑ニ嘉祿二年八月一日、今日止准布、可用銅錢之由、被仰、延應元年正月十一日、今日陸奥國郡鄉所當、事有沙汰、是准布之例、沙汰人等、私念本進之備好錢貨、所濟乃貢追年不法之由、依有其聞、ト云フハ通錢ノ遐邇ニ行ハルヲ知ルベク又嘉祿三年九月十日、切錢事有其沙汰、近年多以出來之由有其聞、自今以後者、用切錢事可停止之、存此旨、普可令下知之由、被仰、左典、既等、其狀云、切錢之事、右近年多出來之由有其聞、於自今以後者、用切錢事可停止之、存此旨、兼而可令下知之狀、依仰、執達云々トアリ、切錢ハ損壞錢ナリ、此時本邦鑄錢ノ廢スルモノ既ニ久シク輸入ノ錢貨モ亦歲ヲ經テ損壞セシコト少カラズ

○切錢

貞永式目。名
主ハ過料十貫
文百姓ハ五貫
文

○買海外銅錢

賣買ノ際紛擾尤多カリシヨリ今此事ヲ停メシモノト思ハル、ナリ又東鑑ニ仁治二年九月十日、御禊大嘗會用途、事、每用地一段可進濟錢二百文、之由宣下云々、又全年十二月二十五日、諸御家人任官間事、日來内々被經沙汰、今日於評議有治定、先度准、鞞負尉一萬疋之由雖被定、自今以後不可然、可爲二萬疋歟、又百練抄ニ寛元三年四月、今日於記錄所、被勘定一年中公事用途錢貨等事、ト云フコトモ見ヘテ當時上下ノ間通錢多カリシコト亦察スベシ

○後宇多天皇第一代第十東鑑末ニ建治三年商賈ヲ支那ニ遣ハシ銅貨ヲ購入セシコトアリ、乃千元史日本傳ニ至元十四年、日本商人持金來易銅錢、ト云フ是ナリ、蓋シ商估貿易ノ爲ニ渡航セシモノニテ銅錢ハ此比一ノ輸入物貨ナリシナラン、在昔本邦探銅ノ事未ダ全ク開ケズ銅材モ亦極テ多カラザルヨリ支那地方ノ鑄錢

○得古錢

ヲ輸入シ其國用ヲ足セシナリ後足利氏ノ世ヲ經テ倣フテ常ト
 ス其名聲惡ムベシト雖モ或ハ亦當時經濟ノ一法ニ出ルナラン
 古今沿革攻ニ享保四年正月廿日芝口二丁目邸舎に密を掘る
 事有けるに地より一丈ほど堀ければ一物あり其形錢を覆たる
 と見へ又は岩の如く又は土塊の奇異なる物あり其物をさし
 を以て洗ひ見れば皆錢なり凡二千貫ばかりあり其物をさし
 物ゆへ凝結したれば石などにも來て打ち細かに砕けたり其
 どりけるほどに錢づゝには離れず皆々細かに砕けたり其中
 錢に一人剃刀を持來り心永くありはがしければ此祥符通寶は西土北
 宋の眞宗の時錢たる錢なれば五十六世花山院一條院の比な
 り然れば村上天皇の時乾元大寶を鑄さしめ給ふよりわづか三
 四年なり如此西土の錢數萬日本へ渡るべしト見ユ如何アラス
 土の錢のみにて通用ありしことなるべしト見ユ如何アラス

弘安四年七月ニ方リ元寇大舉シテ筑紫ニ至リシ時ハ西州各地ハ
 更ナリ京都鎌倉トモ頗ル戒心アリ九州ハ兵刃既ニ交ルノ變ニ際
 セシカバ西南諸道ノ船舶杜塞シ商業ハ爲ニ幾多ノ變動ヲ醸セシ
 ヤ亦得テ知ル可ヲザルナリ此時北越ノ米粟ヲ湖水ニ漕廻シ京
 洛據テ以テ飢ヘザルヲ得タリト云フ其狀況想像スベク東寺執行

○弘安元寇

鎌倉將軍家
 前。永仁元年
 四月鎌倉大地
 震死者一萬餘
 人

○鎌倉繁旺

日記元徳二年五月ノ條ニ詔任弘安之例一斗百錢ニ交易スベシ
 トアルハ蓋シ元寇ノ事起リ京中饑餓ニ困ミシ時ノ事ヲ指スナ
 ルベシ幾許モナク外寇退キ天下乃チ舊時ニ復シ尋テ世間久ク
 靜謐ナリシカバ鎌倉モ頗ル繁旺ニシテ商情モ前日ニ勝ル者ア
 リケント思ハル、ナリ帝王編年記ニ永仁元年癸巳四月大地震
 鎌倉中谷々山々崩之時舍屋顛倒死者二萬三千二十四人也ト云
 フ其一府ニ群居セル人員ヲ以テスルモ亦盛昌ヲ察スベキナリ
 侍所沙汰篇ニ弘安九年三月二日云々次押買迎買沽酒以下事禁
 制條々先度被仰下畢云彼云此於違犯之輩者可令注申不注進者
 守護人可有其科之狀依仰執達云々ト云フハ此比賣買ノ不肅ナ
 リシヲ制センガ爲ニ此令ヲ布キシナリ東鑑ニ建長六年十月十
 日鎌倉中保々奉行條々事殊不可有緩怠之儀旨被定云々トアリ
 テ押買以下事可停止ト見ユ強買等ノコトハ屢制令ヲ下セシモ

○博遊笑覽ニ
 七座ノ市座ハ
 一ニ補ノ座ニ
 二炭ノ座三ニ
 米ノ座四ニ拾
 物ノ座五ニ千
 石ノ座六ニ
 相物ノ座トテ
 兼ニ賣ル座ナ
 リ又紙ノ座ト
 モ云ヘリ七ニ
 馬商ノ座是七
 座ナリ其外ニ
 手買振賣トテ
 皆此七座ト與
 力ノ賣物多シ
 トアリ

其事常ニ絶ヘザリシナリ北條氏海内ノ政柄ヲ執ルモノ九世百
 五十余年其間三帝ヲ離島ニ移シ滔天ノ勢言フニ忍ビザルモノ
 アリ然レドモ其民政ニ於テ頗ル治蹟アルモノ、如ク四方無事
 ニシテ衆庶其業ニ安ンゼリ商業ノ事蓋シ亦觀ルベキアラン此
 時船規ヲ制シ亦爲換券ヲ興スト云フ固ヨリ其據ヲ得ズト雖モ
 其口碑ニ傳フル所淵原ナシト爲サルナリ而シテ當時商事ノ筆
 ニ載スルモノ亦已ニ稀ニシテ其蹟ノ徵スベキナキハ遺憾殊ニ
 少カラズトス庭訓往來ハ元弘四年正月僧玄惠ノ手ニ成リ蓋シ
 北條氏治世ノ動靜ヲ記スルモノトス今編中ニ就テ數項ヲ抄出
 シ以テ參勘ニ供ス藝才七座之店、諸國、商人、旅客、宿所、運送、賣買、律
 悉令、遵行候、交易合期公私之潤色、何事、如之哉、定役、公事、臨時、課役、
 月追、上分、節季、年預、更、不可、遁避、歟、凡、京、町、人、濱、商人、鎌倉、詭物、宰府、
 交易、室、兵庫、船頭、淀、河尻、刀禰、大津、坂本、馬借、鳥羽、白河、車借、泊々、借

○七座市店

○替錢

○問九

博遊記。諸藝
 商者十賦權等
 專右諸樂商賣
 爲本通難物等
 如先例可致其
 沙汰云々
 定役ハ定式ノ
 公役ト云フ意
 月追上分ハ歲
 尾ヲ買スル爲
 領主等ハ贈
 遣ノ物料ナル
 ヘシ
 刀根ハ河舟ヲ
 進退スルモノ
 馬借ハ馬ヲ貸
 シ車借ハ車ヲ
 貸シ各其ノ利
 ヲ得ルモノ今

上、湊々、替錢、蒲々、問丸、同、以、割符、進上之、任、俶載、運送之、次、大舍人、綾
 大津、練貫、六條、染物、猪熊、紺、宇治、布、大宮、絹鳥丸、鳥帽子、室町、伯樂豐
 島、蒔、嵯峨、土器、奈良、刀、高野、剃刀、大原、薪炭、小柴、黛、城殿、扇、仁和寺、眉
 作、姉、小路、針、鞍馬、木芽、漬、醍醐、烏頭布、東山、燕、西山、心太、此外、加賀、絹
 丹後、精好、美濃、上品、尾張、八丈、信濃、布、常陸、袖、上野、綿、上總、鞍、武藏、鎧
 佐渡、沓、伊勢、切付紙、播磨、杉原、備前、刀、出雲、鍬、甲斐、駒長門、牛、奥州、金
 備中、鐵、越後、鹽引、隱岐、鮫、周防、鯖、近江、鮎、淀、鯉、土佐、材木、安藝、樽、能登
 釜、河内、鍋、備後、酒、和泉、酢、若狹、椎、宰府、栗、宇賀、昆布、松浦、鯛、夷、鮭、奧、漆
 筑紫、穀、或、異國、唐物、高麗、珍物、如、雲、霞、交易、賣買之、利潤者、超過、四
 條、五條之、辻、往來、出入之、貴賤者、不、異、京都、鎌倉、トアリ、交易、合期、ト
 ハ、都鄙ノ、商品ヲ、流通シテ、約束、注文ヲ、違ヘヌナリ、泊々ノ、借上、湊
 ヲ、替錢、トハ、泊湊、トモ、皆、船舶ヲ、繫グノ、場ニシテ、借上、ハ、金ヲ、貸
 シテ、利ヲ、得ルモノ、替錢、ハ、爲換、ナリ、全書ニ、廻船、着岸、津、マタ、於、湊

○飛錢

ノ陸運事業ノ如キモノナリ
 新撰樂記ニモ馬借車借ト見ヘタリ
 宋初ハ初年ト云カ如ク其年創始ノ事ナリ
 手島ハ蘇州小
 樂ハ山城ノ地名
 地數ハ都下ノ
 勇子商ノ家號ト云フ
 貞丈雜記。城殿ノ名物ナリ今モ京都ト云フ
 城殿ト云フ
 輸入アリ其末

令買之ナドアリ港場ハ商品揚卸ノ地ナルガ故ニ貸附爲替ノ業ヲ爲ス者多キヲ知レリ問丸今ハ問屋ト云フ物貨運搬及ビ賣買ノコトヲモ掌ルナリ割符ハ物貨授受ノ際ニ用ユル割印アル證票ナリ此比都鄙ノ間交市ノ法既ニ開クルアレバ海内ノ商業頗ル區域ヲ廣メ貿易其利ヲ得ル亦知ルベキナリ其他玆ニ列擧スル物貨ハ皆土宜ノ著産ニ係レバ即チ當時商品トシテ賣買スル所ノモノ多カルベキナリ

鎌倉將軍家譜ニ永仁五年替錢借物可有沙汰書載其利分者可任證文トアリ替錢ハ吾錢ヲ他ニ交付シ盟約シテ之ヲ某地ニ受取ルモノニシテ後世是ヲ爲替トイフ日本貨幣史參考ニ唐憲宗ノ時商估京師ニ至ル者錢ヲ諸路進奏院及ビ諸軍諸使ノ富家ニ委子輕裝ヲ以テ四方ニ赴キ券ヲ合シテ之ヲ取ル飛錢ト號スト云フコト文献通考ニ載タリ飛錢ハ乃

○便錢

○市町見世

梳サリ
 元禧十年ノ出
 額萬萬萬
 水貨價高銀布
 仁和尚ノ所作
 ハ昔時仁和寺
 ノ僧院ニ於テ
 應作ト云フ
 鞍馬ノ木芽漬
 ハ山椒ノ芽ヲ
 製セシモノト
 云フ
 美濃ノ上品ハ
 本州片川ヨリ
 産入字賀ハ蝦
 夷ノ地名ト云
 ヘリ
 令解解青備給

チ今云フ爲替ナリ又錢幣零記ニ宋太祖ノ時唐ノ飛錢ノ故事ヲ取テ民ニ許シ錢ヲ京師ニ入テ諸州ニ於テ便換ス此後京師ノ用度マス／＼多シ開寶三年便錢務ヲ置テ商人ノ錢ヲ入ルモノヲシテ便錢務ニ到テ贖ヲ陳シ即日ニ錢ヲ左藏庫ニ數シ券ヲ給ス仍テ諸州ニ勅シテ凡ソ商人ノ券ヲ贖シテ到レバ當日ニ給付シテ住滯スルヲ得ズ違フ者ハ科罪ス是ヨリ停滯ナクシテ至道ノ末商人ノ便錢一百七十餘萬貫天禧ノ末ニハ一百二十三萬貫ヲ増ストアリ是ニ據テ見レバ便錢モ飛錢ト同ジク爲替ノコトニシテ爲替ハ唐ニ始リ宋ニ至リ倍盛ナリシモノナリ

又庭訓往來ニ市町者、辻子小路、令構見世棚、絹布之類、賣買之便之様、可被相計也、可招居輩者、鍛冶、鑄物師、巧匠、番匠、木道、并金銀細工、紺、染、殿、綾、織、蠶、養、伯樂、牧士、炭、燒、樵、夫、檜、物、師、轆、轆、師

市町見世

貴州開答。於米穀於蘇州松等者以船令滄上海路不合則之旨令存之問自陸路付夫領九所進上候也

商人主

新猿樂記。八郎直人者商人主領也。重利不知妻子。念身不顧他人。持一成萬。博殖成金。以言誑他心。以謀拔人目。一物也。東臻于俘囚之地。西渡於貴賀之島。交易之者。賣買之種。不可稱數。唐物。沈香。麝香。衣比。丁子。甘松。燕陸。青木。龍腦。牛頭。鷄舌。白檀。赤木。紫檀。蘇芳。陶砂。江雪。金盆。篋。銀。益。丹。紫金。骨。巴豆。雌黃。可梨。勒。檳。榔。子。銅。黃。綠。青。燕。紫。空。青。丹。朱。砂。胡。粉。豹。虎。皮。騰。茶。碗。籠。子。犀。生。角。水。牛。如。意。瑪。瑙。帶。瑠。璃。壺。綾。錦。羅。縠。吳。竹。甘。竹。吹。玉。等。也。本。朝。物。緋。襟。象。眼。縷。綢。高。麗。軟。鏡。裏。京。錦。浮。線。綾。金。鐘。阿。久。夜。玉。夜。久。貝。水。精。琉。珀。水。銀。流。黃。白。錫。銅。鐵。練。鍊。市。店。也。店。尋。

塗師、時繪師、唐紙師、紙漉、傘張、養賣、廻船人、水主、柑取、漁客、海人、朱砂、白粉、燒、楠、挽、鳥、帽子、折、商人、沽、酒、酢、造、弓、矢、細、工、深、草、土、器、作、葺、師、壁、塗、云々トアリ何レモ當時市藉ノ者ナルベシ見世棚ノコト下學集ニ見ユ商品ヲ列陳シテ需求者ニ示スサマ尙ホ今日市中ノ躰ニ異ナルモノナカルベク且賣肆ヲ店屋ト云フ亦本書ニ載セタリ新猿樂記ニ八郎直人者商人主領也重利不知妻子念身不顧他人持一成萬博殖成金以言誑他心以謀拔人目一物也東臻于俘囚之地西渡於貴賀之島交易之者賣買之種不可稱數唐物沈香麝香衣比丁子甘松燕陸青木龍腦牛頭鷄舌白檀赤木紫檀蘇芳陶砂江雪金盆篋銀益丹紫金骨巴豆雌黃可梨勒檳榔子銅黃綠青燕紫空青丹朱砂胡粉豹虎皮騰茶碗籠子犀生角水牛如意瑪瑙帶瑠璃壺綾錦羅縠吳竹甘竹吹玉等也本朝物緋襟象眼縷綢高麗軟鏡裏京錦浮線綾金鐘阿久夜玉夜久貝水精琉珀水銀流黃白錫銅鐵練鍊市店也店尋

五十錢買

新猿樂記。三那王弄細工並木道者也。永仁即位用途記。細工木道トアリ木道ハ拙人ノ類木質ヲ鑑定スルモノヲ云フ。東北院職人歌合。柑搦後ニ云フ柑屋ナリ

常每商家設棚。以販物。故曰。多。有。家。之。端。故。曰。波。之。衆。見。來。往。人。故。曰。見。世。新猿樂記。三那王弄細工並木道者也。永仁即位用途記。細工木道トアリ木道ハ拙人ノ類木質ヲ鑑定スルモノヲ云フ。東北院職人歌合。柑搦後ニ云フ柑屋ナリ。太平記ニ青砥左衛門が滑川にて、いつも燧袋に入れて持たる錢を十文取はづして、水に落せしに、少事の物なれば、行へかりしに、以の外周章て、其近邊の町屋にて、五十文を以て續松を十把買て、是を燃して、十文の錢を得たり、是を聞く人小利大損哉と、笑ければ、青砥左衛門眉をひそめて、錢五十錢は商人の家に止りて、永く不可失、我損は商人の利也トアリテ此

下物案ハ文安
元年東院被刑
撰ム

新推樂記ハ續
原明衛撰ム

○錢貨多見

比ハ上下錢ヲ携テ往來セシモノ、如ク北條氏中世以降通
貨尤多カリシヲ知ルベシ貞永式目贓罪ノ條ニ假令錢貨百
文二百文以下之輕罪者以一倍令辨償之可令安堵其身三百
文以上之重科者縱雖行一身之科更莫及三族之罪者又竊盜
ノ條ニ三百文五百文二貫文十貫文ト云フコトアリ嘉祿三
年七月古文書ニ伊勢内宮官符白布一端代錢二百文トス又
東鑑延應二年十二月十六日御家人任官功錢五十貫二百貫
官庫ニ納ムト云フコトアリ又弘安四年鶴岡八幡遷宮記ニ
モ裝束料十貫十五貫二十貫錢渡トス建長ノ例ナリトアリ
又文保三年記ニ文保三年五月禁中ニテ玄上ノ琵琶ヲ盜ミ
シモノ七條ノ玄海法印ノ許ニ三百文ニテ買トナシテルル
餌將入道八百文ニ買取リ其後志津河左衛門尉二貫文ニ買
得タルト云フ事ヲモ載セタリ日本貨幣史ニ仁治二年二月

博多ノ氏名未
考ヘス或ハ
計同ナトノ誤
リナランカ

○博多貿易

二十九日ノ古文書ニ米一石代錢三百文乾元元年六月ノ古
文書ニ貢米九斗四升代錢一貫四十四文正和四年平二月平
二日ノ古文書ニ錢百文ニ米一斗五合トアリ物貨ノ價位ヲ
記スモノ古書古文書ニ散見スルモノ少カラズ他ハ零シテ
此ニ載セザルナリ

○實朝遣月船

雲州消息ニ去月某日着博多津二十二日着鎮西府此間無風雨之
難神道祐之歟宋朝商客着船以來貨物數多倍於前々又庭調往來
ニモ宰府ノ交易トアリテ擬書ナガラモ此比外船博多ノ港ニ出
入セシコト知ラレタリ又源實朝外客ノ一言ヲ信シ嘗テ船舶ヲ
造リ自ラ之ニ駕シテ支那ニ入ントス實朝身將軍ノ重任ヲ荷ヒ私
ニ渡航ヲ千里ノ海外ニ試ム或ハ狂愚ニ類セル者ト雖モ想フニ
當時陳和卿等外人類ニ出入シ邦人モ亦屢往來シテ彼我ノ情意
頗ル熟セシヨリ遂ニ此舉ハアリシナルベシ然ラザレハ如何ニ

○武族入宋

崇佛ノ爲トハ云へ僅々一隻ノ船舶ニ托シ安危ヲ外境ニ放任ス
 ルモノアランヤ外史略ニ建保四年將軍實朝宋ニ遊ハント欲
 シト欲ス乃チ其船ヲ水中ニ放チ私ニ工人ニ命シ故ニ運轉セザラ
 遣ル小孫太尉其萬山願成此行ニ主タリ之ニ從フ者十人宮新
 兵衛三浦修理關東ヨリシ村ニ上テ船ニ駕野小江郎信濃ヨリ勝間
 兵衛南條次郎美作ヨリシ俱ニ一船ニ駕野小江郎信濃ヨリ勝間
 又異聞トスベシ併記シ佛舍利ヲ得テ歸ル云々因テ想フニ此時日
 支ノ交通大ニ開ケ貿易モ亦多カリシヲ察スベシ爾來文永弘安
 ノ際本邦元ト兵結テ解ケザルモノ數年而シテ商賈ノ往來ハ常
 ニ絶ヘザリシナリ元史ニ至元十五年十一月丁未詔諭沿海官司
 通日本國市舶二十九日六月己巳日本來互市風壞三舟惟一舟達
 慶元路冬十月日本舟至四明求互市舟中甲仗皆具恐有異圖詔立
 都元帥府令哈刺帶將之以防海道大德十年夏四月甲子倭商有慶
 等抵慶元貿易以金鎰甲爲獻命江浙行省平章阿老瓦丁等備之又

○邦商求互市

自神抄貞永元
 年三月廿二日
 伊豆守信光供
 養後邊橋件橋
 信光所管作也
 又仁治二年二
 月十一日廣司
 河原橋供養也
 導師宗源法印
 自去々年入道
 兵衛頭市房勸
 進之

○僧輩造橋

萬曆日天皇ハ
 孝德

哈刺解傳至元十六年日本商船四艘高師二十餘人至慶元港江哈
 刺解謀知其無他言于行省與交易而遣之又建治三年記ニ建治三
 年六月八日晴宰府脚力參着宋朝滅亡蒙古統領之間今春渡宋商
 船等不及交易走還ト云フ是等亦以テ此比吾商賈ノ支那ニ至リシ
 事ヲ記載スルナリ東國通鑑ニ高麗元宗八年又令君斐隨黑的如
 蒙古奏曰云々且日本素與小邦未嘗通好但對馬島人時因貿易往
 來全州耳ト云フ是朝鮮ガ本邦ノコトヲ報道スルモノナリ
 帝王編年記ニ弘安九年丙戌一月十八日宇治橋供養件橋萬
 豐日天皇御宇元興寺道登道昭奉勅建立之其後東大寺觀理
 道慶修造之始自大化元丙午終至弘安九丙戌六百四十一年
 造營七ヶ度也皆南都之合力知前事者不怠又武藏國風土記
 稿載スル所ノ古文書ニ遠江國天龍河下總國高野川兩所橋
 事所被仰付也早任先例可致沙汰之狀依仰執達如件元享四

野等ノ渡アリ
友人坪井山舟
ノ一語ニ今武
州崎五郡杉戸
地方ニ上下高
野村アリ相傳
フ古時刀根ノ
本原此地ヲ流
過ス後世是ヲ
古川跡ト稱ス
ト云ヘリ

○凶歲米貴
ト云フハ成
ハ玄米ヲ指ス
トナリト未
詳

年八月廿五日相摸守修理大夫トアリテ稱名寺長老トスル
ハ武州金澤稱名寺ノ佛資ノ余材ヲ以テ二橋ヲ修理セシモ
ノニシテ是亦僧徒道橋開築ヲ自任スルノ遺風ナルベシ後
世凡ソ橋梁ヲ造ルモノ橋供養ト號シ僧ヲ請シ經ヲ誦シ之
ヲ落セザルナキハ亦古來佛家ノ事業ニ屬セシ一證ト爲ス
ベキカ相摸守ハ北條高時修理大夫ハ金澤貞顯ナリ

○後醍醐天皇明九十太平記元亨元年の夏大旱地を枯カラして、旬服
の外百里の間、空しく赤土のみ有之、青苗なし、餓草野に滿て飢人
地に偪る、此年錢三百を以て粟一斗を買ふ、君はるかに天下の飢
饉を聞召て、朕不徳ならば、天われ一人を罰すべし、黎民何の罪有
てか此災に遭へる、自ら帝徳の天に背けるを歎き思ひ、朝餉の供
御を止られて、飢人窮民の施行に、行はせけるこそ有難けれ、是も
猶萬民の飢を助くべきにあらずとて、檢非違使の別當に仰て、當

○米斗百錢

○商估不賤米

時富裕の輩が利倍の爲に蓄積タケホる、米穀を檢して、二條の町に假
屋を建られ、檢使ケンシ自行オノカラて値チを定めて賣せらる、されば商賣共に利
を得て、人皆九年の蓄あるがとし、トアリ此時三百錢ヲシテ粟一
斗ニ換フト云ヘバ當時ニ對シ實ニ非常ノ凶歲ナルヲ知ルベシ
東寺執行日記、元徳二年五月二十日ノ條ニ洛中米穀和市之事、
右穀者民之天、國之本也、頃年豐饒之處、近日依ヨ和市之不定、有衆庶
之飢饉云々、太不可然、所詮新穀出現之程、任セ弘安之例、以宣旨一斗、
宛錢百文、可交易者也、今度之此難、不可准弘安例、以寬宥之儀、如此
所被下レ定也、於違犯之輩者、可有嚴衆議候也、ト云フハ米穀賣買ノ
時價定マラザルニヨリテ衆庶困難セリ、故ニ弘安ノ例ヲ參酌シ
テ低價賣買スベシト云フコトナリ、弘安ノ例トハ元寇ノ時ノ事
ナルベシ又寛喜二年ニモ錢一貫ヲ米一石ニ充ルト百練抄ニア
レバ鎌倉ノ時米穀ノ價格ハ動モスレバ一斗百錢ニ至リシモノ

○開市場發米

ト見ヘタリ、又全書、今年六月十一日ノ條ニ世間依飢饉米穀商人以外和市高云々仍勅裁トシテ、去月被定其法以來米穀不出現商人又不出者也、仍彌世間飢饉無極之間、今日ニ條町東西ニ市ノ被立カリヤ假屋公方ノ依仰也、五十餘間云々、此カリヤハ商人ヲ被召テ、賣買セラル、也、然ル間、諸人誠ニ喜悅ノ思ヒヲナシ、群集シテ如市也、ト云フハ、既ニ米價ヲ定ムト雖モ商賈等其法ニ服セズ、却テ現數ヲ隱蔽シ、時價ヲシテ又糶賣スルモノナシ要スルニ洛民ヲシテ飢餓ヲ免レシムル能ハザルヨリ、今此制ハアリシナリ、又全書同月九日ノ宣旨ニ近日京洛俗偏專利、潤杜康之業、頗以繁多、穀價騰躍之間、被定其法、爰酒爐交易之處、宜追門准據、以來穀上果宛酒醪一斛、早守此制、永勿違犯、又同日、沽酒法事、任宣下、狀可遵行之由、可令下知給之旨、天氣所候也、云々、釀酒ヲ減造セシムルハ凶年饑歲ノ時ニ方リ、其米粟ヲ糜爛セン爲、世々準例トスル所ナリ

○進門穀上果未

○元弘之亂

既ニシテ元弘元年八月笠置潛幸ノ日、干戈畿内ノ地ニ起リテ、東西忽チ騷ガシク、尋デ楠氏兵ヲ河内ニ擧グ、東兵之ヲ圍ミ、克ツ能ハズ、二年四方勤王ノ師起リ、五月足利尊氏等六波羅ヲ襲撃シテ、之ヲ平ラグ、此時ニコソ多年耳ニ觸レザリシ軍鼓ノ聲ハ、頗ル洛民ヲ驚カス事ニハナリタリ、太平記ニ赤松中ノ院中將貞能を取立テ、聖護院ノ宮ト號シ、山崎八幡に陣を取り、河尻を差塞ぎ、西國往返の道を打止む、依之洛中ノ商賣止テ、士卒皆轉漕の助に苦めり、ト云フニ、テモ其實況想フベキナリ、此月北條高時、新田氏ノ爲メニ滅サレ、鎌倉開創以降、一百五十餘年上下經營スル所ノ繁華一朝化シ去テ、灰燼トナリ、府民頗ル困難流離ニ陥リ、商家ノ資力ヲ亡ビシモノ又多々ナラントスルモノアリ、而シテ龍駕隱岐ヲ出テ還幸ノ日ニハ、東西既ニ靜謐ニシテ、五畿七道ノ武族皆京中ニ相會セリ、然レバ此比ハ別テ賑ハシク、其勢京白河にも充滿シ

○赤松ハ次郎則村入道開心

○洛商停業

○建武之亂

日本書紀上編

安撫集。六波羅密寺のほとりにはいさけなかりし時すみわたり侍しにすますなりて年をへてのち元弘の頃の世のさばきに其あたり荒はてぬとこそえ侍しかは秋のころ人々あまたいさなひてまかりて見侍しに住なれしやともなく庭に櫻などのあまたありしもなきてみしにもあらす侍しに

て王城の富貴前日に百倍せりト太平記ニモ見ヘタレバ此折ニハ京商モ賣買其利ヲ得テ一舉富チ成セシモノモ多カルベキナリ然レドモ中興ノ業幾程モナク廢シテ尊氏鎌倉ニ反シ大軍京師ヲ侵セシ日ニハ宮闕賊ノ爲ニ亡ビテ煨塵トナリ市中モ亦兵燹ニ罹リ其被害云フベカラザルモノアリ是ヨリ後千南北分朝天下攻伐チ事トシ海内麻ノ如ク亂ル商業ノ衰弊亦甚シキナリ太平記ニ大内裡作らるべく候とて昔より今にいたるまで我朝にはいまだもちおざるに紙錢を作り、諸國の地頭御家人の所領に課役をかけらる、條神慮にも違ひ騙過のはしとも成ぬと、眉をひそむる、智臣も多かりけり、又建武年間、龍ニ改錢事、建武元年三月廿八日、有御沙汰云々、今以新貨爲除舊幣始造官錢須頒天下、濟世便民、孰謂不爾、仍文曰乾坤通寶、銅楮並用、交易莫滯、トアリシガ尋テ兵亂頻リニ起ル此事實

愛代 まろ「雪なれやむかしの春の花のやと野原の露に秋風うふく」都下亂後ノ景象亦想フベシ錢幣考記。宋高宗紹興元年婺州屯駐ニ因テ見錢關子ヲ造リ婺州ニ附シ商人ヲ召シテ入中シ關子ヲ執テ權貨務ニ赴テ錢ヲ詰ヒ茶鹽香貨鈔引ヲ得ル事ヲ願フ者ハ許ス

施スルニ及バザリシナリ紙幣以テ國用ヲ翼ケ鑄錢以テ國寶ヲ饒ニス中興ノ政亦觀ルベキモ時熟セズ人和セズ天下其澤ヲ蒙フル能ハズシテ止ム惜ムベキカナ錢幣ノ供給ハ北條氏ノ中世ヨリ上下頻ニ其用ヲ知り萬般ノ交易邊邑阪巷ヲ除クノ外ハ概子授受スルモノ、如シ元弘建武大亂ノ日ニ在リテモ通貨ノ流用ハ敢テ前時ニ換テザルナリ北條九代記ニ奇犬ヲモトメテ進セケル世ニ奇犬ヲ飼立テ犬一疋ヲ錢二三十貫ヨリ百貫ニ及ビテ買取り又太平記ニ元弘三年三月兵糧の爲にとて、近國の庄園に、臨時の天役を被掛る、中にも新田庄、世良田には、有徳のもの多しとて、六萬貫を五日の中に可沙汰と堅く下知せられければ、トアリ又大塔宮を奉討たらん者には、伊勢、車間、莊を恩賞に可被宛行、其上に三日が中に六萬貫を可與、御内侍候の人御手の人を討た

○鑄錢最

此ニ於テ州縣
關子ヲ以テ糶
米ニ覺テ抑配
ヲ免レストア
ルハ支那ニ在
テ紙幣發行ノ
始メトラン紹
興元年ハ崇徳
天皇天承元
年ニ方リ此時
(元弘)ヲ距ル
コト二百餘年
前ニアリ

らん者には五百貫降人に出たらん輩には二百貫何れも其
日の中に必沙汰し與ふべし又官軍の兵糧とて、錢貨六萬貫、
米穀七千石、波止土濃の前に積たりければ、又博奕をして遊
ひけるに、一立に五貫十貫立ければ、一夜の勝負に五六千貫、
負人のみ有て、百貫とも勝人なし、又伯耆、卷ニ近邊の在家に
人を廻し、思立事有て船上に、兵糧を上る事あり、我藏に有米
を、一荷持來らん者には、錢を五百充とらすべしと、觸たりけ
れば、十方より聞傳へ、人夫七八千人出來て、晝夜を不分、錢と
米とを持來る程に、五千石を運びける、渾テ太平記ニ載スル
所、人員量數最過ニ涉リ疑フベキモノ少シトセザルモ當時
世上通錢ノ多カリシコトハ亦論ナキナリ勢陽五鈴遺響ニ
准后北畠しばらくこのとこ野大にましまし、多度の庄司
に百貫文からせたまひける、かため文云々、鶴眼百貫文は、軍

○軍資借錢

百貫と坊ひま
つをゆすりた
りけるに坊を
百貫にうりて
彼是三萬匹を
いもかしらの
料にさためト
アリ四八貫ニ
充レリ

用ふるくにて、むつの國司に送る料とて、當庄の人々にかり
給ひ、よろこび思しめしぬ、代もゆたかにかへらす時とさう
ばいにて返し賜はらん事、三神にかけ奉るものなり、午の九
月三日、ちかふさ、たどの庄司とのトアリ、午の九月ハ南朝ノ
興國四年壬午ナルベシ陸奥ノ國司ハ北畠中將顯信ナリ又
興福寺東院日記ニ文和元年三月二十七日兵糧ノコトヲ以
テ足利義隆ヨリ大納言法印ニ贈ル狀ニ錢五萬匹可有御合
カトアリ但五万匹ハ五萬貫ナリ又相國寺供養塔記ニ導者
鶴眼三千貫、砂金百兩、五山十刹等、各鶴眼五十疋、トアリ又鹿
苑院殿御直衣始記ニ康曆二壬子年正月二十日、前駟十人、各
三千疋、隨身番長二萬疋、錦襪一段、近衛五人各萬疋、居飼千疋
御厩舍人千疋被下行、又花營三代記ニ應安元年五月十二日
大般若開板勸進事百貫文之由、又同四年十一月、酒坐壺別ニ

弘安國筆八屋
備大郎私賣ノ
備ふ所ナリ私
賣ハ備川幕府
ノ内家權能
書一世ノ名士
ナリ

○除關制

一話一書。清
見開屋のへん
に布たゝみと
いふ所ありむ
かしせきもり
の布をとりた
るかつもりて
石となりたる
はスハシ

百文トアリ通錢豐ナリシテ證スベキナリ
年弘安國筆ニ文
錢、和銅通寶ニ錢、其他萬壽隆平ニ品、其外數錢ヲ除クノ外、寶三
皆、末那錢ニシテ、洪武永樂ノ如キハ一錢ヲ交ヘズト云フ蓋
シ、足利氏ノ初世ヲ通用セシ錢貨ニシテ、當時本邦古錢ノ存
スルモノ、多ク察スルニ、支那錢ノ通用頗
ル夥多ナルヲ察スルニ、足利氏ノ通用頗
海陸通運ノ事ヲ云フモノ、太平記ニ、夫四境七道の關所は國
の大禁を知しめ、時の非常を誠めんが爲也、然るに今、壘斷の
利に依て、商賈往來の弊年貢運送の煩ありとて、大津葛葉の
外は悉く所々の新關を止らるトアルハ、建武中興ノ時、四方
ノ關制ヲ廢撤セラレシナリ、建武式目ニ、搆新關、號津料、取山
手河手、成旅人煩事、又諸國往返要路、警固事、且任先例、且隨事
體、海陸共以差定、警固可止、旅人之煩トアリテ、此比ハ、武人戰
爭ニ乘シ、四方ニ關ヲ置キ、往來亦易カラザリシナリ、太平記
ニ、都を出て十日餘りと申に、越前の敦賀の津に着けり、是よ

○北越航路

○筑紫船商人
舟
あひ物ハ相物
ナリ元來生魚
ト干魚トノア

り商人船に乗て程なく佐渡國へ着ける云々、湊に商人船共
候へば、乗せ奉て後越中の方まで送付まいらすべし云々、船
は其日の暮程に越後の府に予着にけるトアルハ、日野阿若
丸が越前敦賀ヨリ商人船ニ乗リ、佐渡ニ渡リ、夫ヨリ越後ニ
航セシテ、云フモノニシテ、當時商人此地方ヲ往來セシコト
多カリシナリ、又此邊の案内者仕たる男、甲斐々々敷湊中を
走廻りて、伯耆の國へ漕もどる商人船の有けるを、兎角語ひて
主上を屋形の内へ乗せ進せ云々、同じ追風に帆掛たる船十
艘計出雲伯耆を指て馳來れり、筑紫船カ商人舟カと見れば
云々、是に御隠れ候へと申て、主上と忠顯朝臣とを船底にや
と進せ、其上にあひ物とて乾たる魚の入たる俵を取積
てトアルハ、元弘二年三月後醍醐帝隱岐ヲ出テ伯耆へ渡ラ
レシ時ノコトヲ記スモノニテ、九州ノ商估ガ山陰地方ニ往

ヒモノト云フ
コトナルヘシ
茲ニハ千魚ヲ
指スナリ

○山陰航運

來セシナリ又鹽谷判官高貞ハ船路の大將として出雲伯耆の勢を卒して兵船三百艘を調へ三方の寄手の相付んとするコレヒ黎に津々浦々より上てトアルハ因伯沿海ヨリ軍船ヲ越前ニ向ケ出セシナリ又越後より上る船越中を過ぎけるナドアルモ當時北海ノ航運各所ニ通セシヲ知ルベシ又嘉曆二年四月廿七日ノ古文書ニ攝津兵庫渡邊神崎三箇津商船目録ノ事停止トモアリテ此比此三津ハ商船ノ多ク往來セシモノニシテ目録ト云フハ蓋シ船舶ニ就テノ税目ナルベシト思ハルハナリ

○海外貿易

凡ソ海外貿易ハ常ニ邦内ノ治亂ニ因テ盛衰ヲ來タスモノナレバ輸入ノ多キハ概子太平無事ノ日ニ若カザレドモ戎器ノ如キハ亦平時預想ノ外ニ出ルモノアラン建武年間記ニ鎧直衣蜀錦吳綾金紗金襴紅紫ノ類不可着用唐皮尻鞆切付等同斷ト見ヘ又

○大内氏掌海
外通商

王代一覽ハ林
惣撰ム

建武式目ニ唐物以下珍奇殊不可有賞翫之儀候也トアリ此比又是ヨリ後ニモ軍人ノ海外輸入品ヲ多ク用ヒシコト知ラレタリ太平記ニ在京の間數萬貫の錢貨新渡唐の唐物等美を盡して奉行頭人評定衆傾城田樂猿樂遁世者まで是を引與へける間此人に増る御用人有まじとイタ未見へたる事もなき先に譽ぬ人ころ無りけるトアルハ大内弘世ガコトヲ云フモノニテ此時ニモ大内氏海外貿易ノコトヲ掌リシナリ王代一覽ニ鹿苑院殿ノ比ヨリ大内介代々異國往來ノ事ヲ掌リ勘合ノ印ヲ預リ周防國ニテ船ヲ作り使僧ヲ發船セシムル例ナリトアレドモ太平記ノ載スル所ニ據ツテ見レバ大内家はヨリ以前ニ在リテモ海外貿易ノ事ヲ管セシナラン太平記ニ龜山殿の舊蹟を點し安藝周防を料國に被レ寄天龍寺をレ被仰ける此時宋朝へ寶を被レ渡しかば賣買其利を得て百倍せりトアルハ天龍寺營建ノ費途ヲ支ヘン爲ニ本邦ヨリ

○天龍寺船

○無盡錢土倉

貿易船ヲ支那へ遣リシナリ外交史畧ニ興國二年足利直義天龍寺ノ僧疎石元朝歸化人ト譏シ商舶ヲ元ニ遣リ諸什器ヲ求メ得テ歸ル其後毎年例トス世ニ之ヲ天龍寺船ト云フトアレバ當時ニ在リテモ支那ノ通商ハ常ニ絶ヘザリシナリ又建武式目ニ建武元年九月十五日可被興行無盡錢土倉ト云フコトアリ土倉トハヌリゴメヲ置キ典物ヲ蓄ヘ錢貨ヲ貸附シ息利ヲ得テ營業トスルモノ即チ今ノ質舖ヲ云フ太平記ニ殿の法印の者共京中の土藏共を打破て財寶を運び取けるト云フ是ナリ蓋シ鎌倉ノ治世ニハ此業ヲ爲スモノ都鄙ニ多カリシト見ユ然ルニ土倉ハ固ヨリ富有人ノ市人ニ屬スルヲ以テ居常課役錢ヲ輸スコト尤多ク況ヤ頃年干戈戢ラス人情強暴群ヲ成シ黨ヲ結ビ土倉ノ物貨ヲ掠奪スルニ至ル是ニ於テ本業ヲ營ムモノ亦其跡ヲ絶チ融通ノ便頓ニ盡タリシヨリ足利氏今此令ヲ布キシナリ祇園執行日記ニ正平七

○洛南被難

○綿座

○小袖座

年四月六日社頭今日御供以半成備進畢珍事至極也云々建武三年山門合戰時當保分關如之間敬信之仁等以洗米備進了彼時者四方路次塞了其上無買儀候間無力次第也今度者於八幡雖有合戰方々路次不塞之上賣買無相違之處稱無計畧道已闕如條珍事也トアリ建武三年合戰トハ尊氏關東ノ兵ヲ率テ京ヲ犯セシ時ナリ正平七年合戰トハ南帝北畠親房等ヲシテ八幡ヲ取り足利義隆江州へ奔リシ時ナリ商估ガ戰爭ノ際ニ被フル損害ノ多カリシコトハ推テ知ルベシ康永二年十二月三日綿新座神人社役去卅日三百文外不出候間今日綿賣三人所持綿付納留置了四日綿新座神人昨日三人所持綿之處今日二人出人別二百文トアルハ祇園社領ノ綿商ガ賦課ヲ拒メルヲ以テ商品ヲ抑留セシコトヲ云フナリ正平七年二月十八日安居神人小袖座商人所役事自吉野殿號被免許商人公事難澁之間今日予帶康永元二兩年院宣案今